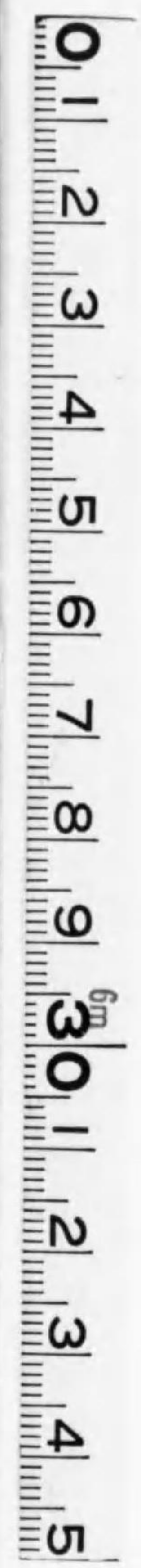


讀切
講談

水戸黃門



始



特 223
781

門 讀切講談 水戶黃門

田邊南龍演



1
水戸黄門

此度は、水戸黄門光圀公の、關西方面御漫遊を口演致します故、相變らず御愛讀を御願ひ申上げます。

光圀公は、多年副將軍の重職を御務めになり、天下の御政治に全力を盡されたまひ、在職三十有餘年、御隠居をなされました時は六十三歳、元祿の三年十月十四日のことであられたと申されます。

常陸國茨城郡水戸の御城下から四里、太田の郷西山村に御住居あそばされました。現今の西山莊であります。

二ヶ年程は、お百姓達と御一緒になられ、筒袖の衣類に、千草の股引、草鞋がけにて、鍬を擔がれて田畑に働き、よく農業をなされました。

其後、御旅行を思ひ立たれ、松雪庵元起と云ふ俳人を御供に連れ、奥羽兩州を廻國、行く土地土地にて隠れたる忠孝節婦義人等を、世に顯して人の手本となされ、また御政治向きに注意をあ

そばしました。然うして名所古跡も御見物、一度は西山村に御歸り。

二度目の御旅行が關西へと御仕度、御供は二人、佐々介三郎と安積覺兵衛。この兩士は、多い御家來の中でも有名な勇士で、且つ學者であり、佐々は三十歳、安積は三十五歳にて、膽力充分温厚の智者でありますから、黄門様の御供には最適當と、御當主綱條卿も御安心なされました。江戸小石川の御屋形に、數日御滞在の後ちいよく御出立、其時老公は兩士にむかひ。

「イヤ、兩人とも御苦勞である。此度もまた内々の旅行であるから、目立たぬやうにと思つて、三人とも、斯ういふ姿で行くのだから儀式張らぬよう。乃公は慣れて居るゆゑ、斯ふ申そう。常陸の天神林の百姓の隠居で光右衛門、とは何うちや」

「ハ、ツ」

「恐入ります」

「ハ、、、、堅くならず旅へ出たら友達づきあひにして呉れる」

「ハツ、畏りまして御座ります」

「アハ、、、、夫では友達づきあひにはなれぬ」

「ハイ、成程、御隠居さん、失禮を」

「其調子、中々上手じやな、失禮はいらぬよ、介三郎、覺兵衛、兩人とも、乃公を隠居さんと呼

んでおくれ、お前達を、然うだ、介さん、覺さんと呼ぼう」

「介さん、覺さんと、私共が、ハイ承知仕りました」

兩士は顔見合せて苦笑しました。そこで兩人も、お百姓の隠居が上方見物の御供といふ姿でありました。

江戸を立たれて東海道を三人旅、初めての泊りは神奈川の宿、次の御泊りは、日の永くなる時候と健脚の御方ですから、すーつと延びて小田原の宿でした。幸町のいろは屋といふ旅人宿の前に立たれた。

「入らつしやいまし、御早い御着きさまで」

「お疲れさまでせう、何うぞ御上りを」

「御洗足がこれにございます」

「御世話になります。三人ですよ」

と介さんが老公の草鞋をとれば、覺さんが足を洗つてあげる。

「自分でやるから覺さんも介さんも早く上つて休みなさい、疲れたらう」

「御疲れでせう、平塚宿邊が御泊りによいかと思ひましたが、少々延びまして」

「イヤ、少しは疲れた方がよく眠れるであらう、ハ、、、」

「あの御三人様、誠にすみませんが座敷が皆一杯になりました、別間がございませぬので、あの大廣間にどうぞ、御客さんが多いものですから、御勘辨を願ひます、御案内をいたしますから二階へどうぞ」

「大廣間は結構だ、御隠居さん参りませう、覺さん行かう、大廣間は有難い」

「介さんや、そんなに喜びなさんな、追込だらう、乃公は前の旅行で度々大廣間に泊りましたぞ、元起も始めは介さんのやうに喜こんだぞ、アハ、、、」

「ハア、左様ですか」

「妙な返答をしながら介さんが女中の後からついて行く。」

「何うぞこちらへ、あの廣間の皆さん、御客さま方を、もうお三人御願ひいたします」

「あゝいゝとも、大勢の方が陽氣でいゝや、三人の衆此方へすゝつと這入りなせエ、遠慮はいらねエ、何うせ追込だもの」

「然うだとも、追込客の方が御互に情が深いからなア」

「本當だよ、おい爺さん此方の正面へ來なよ若いのも此處へ來いよ、旅は追込が一番宜いなア、第一名前が宜いやア、大廣間ときやアがる、アツハ、、、」

「廣い座敷に大勢ごたくして居る、其陽氣なこと、老公はクス／＼、兩人は呆れて居た。」

「矢つ張追込だった。兩人は始めてかな」

「ハイ、左様です」

「これが面白いのだ、さア這入らう、皆さん宜敷御頼み申します」

「あいよ、爺さん己の隣へ來な、イヤア立派な鬚だなア、皆んな見ねえこの白い鬚をよう」

「成程、これは見事だ、おい御鬚さん、丈夫さうだなア幾歳だね」

「ハイ、皆さん元氣ですな、私の年かね、六十六歳ですよ」

「達者だなア、若いのは伴かね、然うだらう良い伴達があつて幸福だ、老人になつたら子がなくつちア駄目だ」

「本當だ、おい爺さん良い伴を連て何處へ行くんだね、おい伴、遠慮つばいなア此方へ來いよ」

「兩人はます／＼呆れた。とうに伴にされてしまった。程なく皆入浴をすませて食事となつた。三十疊ばかりの座敷に二十七八人も居るのでから賑やかなこと、ゴチャ／＼ガヤ／＼、食事が終るとまた旅人達は話を盛んにはじめた。」

「介さん、覺さん、何うだね面白いだらう」

「ハア、左様で」

「おい鬚さんや、此處に居る人たちは旅商人や職人達だ、向ふに居るのは越中富山の薬屋だそう」

だ、お前は何商賣だね、國は何處だね」

「ハア、私は常陸の者ですよ、商賣かね、百姓です、若い者達と上方見物に行きますのでなア」

「百姓かね、常陸かい、夫ぢやア水戸様の御領分かな」

「然うですよ」

「ウン然うか、水戸様は隠居してから百姓をして居なさるさうだ、太田の西山村に住んで居るので、西山公と云はれて居る。評判の良い方だ、年が年中人の爲に苦勞をして来て、何のくらの人を助けたか勘定が出来ない程だよ、己の伯父が水戸に住で居るから何時も話が出るんだ、永い間御政治をやつて来たから、今ぢや樂隠居をして居ていゝんだ、それを遊んで居ちやならねエと泥だらけに成つて朝から晩まで農業をして居なさるさうだ、偉い方だなア、未だ御丈夫かねエ」

「ハイ、丈夫でいなさるさうで」

「ウン、俺も其話を聞いた、水戸の黄門様と云やア大した者だ、然うして黄門さまは爺さんのやうに、長い白い鬚を生して居なさるさうだ、お前似て居るやうだ、オイお鬚、黄門さまぢやないかね、アハ、、、」

「然うだ、似て居るやうだ、おまへは良い方に似たものだ、爺さんついでに心持も似て呉んねエ、ハ、、、」

「ハイ、似るやうに致しませう。介さんや、覺さん面白いのう」

「ハア、面白くなつて来ました」

「全く以て、夢を見て居るやうで」

「オイ、若いの、今から夢を見るなア早いぜ、おまへ達も何か話ねエよ」

「ハア、でも私共は話が下手ですから、皆さんの御話を聞かせ下さい」

「然うか、夫ぢや向ふの薬屋さん、お前の自慢話を聞かうぢやないか」

「ハア、話ませう。薬と云つたら誰が何といつても、私等の越中富山でせう。富山の殿様が江戸の御城内で、御同様の御大名が急病の時、御印籠の中の薬をあげて御救ひ申したさうで、この良い薬を諸國に廣めて多數の人を救いたいと云ふのが富山の行商の始まりですわ、私等は諸國を人助けの爲に歩行て居ますのだ、取わけ宜く利く薬はこの反魂丹ですな、皆さん何うです一ト袋づゝ買ひなさらぬかな、萬病に宜いでなア」

「オヤ、薬の廣告か、商賣上手だぜ」

「私が一と袋買ひませう」

「ア、御鬚さんが買つたぜ、薬屋は上手持かけるからなア」

「俺も買ふよ、萬病に利くと来たからにやア」

「此方へも一と袋呉んな」

次々に薬は賣れて行く、其隣の男が、

「私の甲斐絹も一反買つて呉れないかなア、皆さん何うたらう」

「甲州の商人か、甲斐絹とくれば本場だから上物だらう」

「それは然うたらうが旅先で荷物になるからなア、宅が近けりア買いたいなア」

「然うだ、追込客でも一反ぐらゐは買へるからなア」

「荷にならないものなら宜いけれども」

「皆さん、御宅の方へ出掛けた時には頼みますぜ、それに水晶を持て来たのだが賣切つたもので」

「甲州の水晶か、これも名物だ、置物にも宜いな、印形には宜いぜ、草入水晶なんてエのも良い

なア、賣切れかい惜しいなア、御鬚さんが買ひさうだのに、甲州にやア名物が多いなア」

「然うです。勝沼の葡萄と来たら良い味ですよ、それに柿も名産で、ころ柿と来たら美味ですか

らねえ、それから甲州金ですね、金の質が良いからなア、また品物ばかりではない、人間に偉い

御方が出ましたからね」

「へエ、甲斐絹屋さん名物の良いのは判つたが、傑い人間と云ふと誰人だね」

「サア、身延山には日蓮上人が昔御出で遊ばされたが、甲州で生れて甲州で天下第一の名將と呼

ばれた御方があるからねエ」

「だから誰人だと聞いてるんだ」

「武田大僧正信玄公ですね、甲州流といふ軍學の元祖だ、何處で戦をしても一度も負けた事が無

いと云ふ天下無敵の名將だからねエ」

「フン、天下無敵は無いだらう。私は越後の者だ、上杉謙信公に勝てたかね信玄公が」

「オヤ、越後の人妙な事を云ふなア、勝つて居るとも、幾度も御勝なすつたぜ、戦の名人で

大僧正で、學問の傑い方で歌の名人で戦をしながら歌を讀みなさる英雄だ」

「何んだ、戦をしながら歌を讀むぐらゐのこと、謙信公は其すつと上の御方だぞ」

「オヤ、越後と甲州と始まつたぜ、何方が勝つかな」

「両方共口は達者だからなア、これは聞きものだぜ」

「面白いなア、双方確かりツ」

「誰だ喉掛けるのは」

「謙信が何んな立派な歌を讀んだか聞かうぢやアないか」

「謙信とは何んだ、勿體ないぞ、氣を付けて口を聞きな、上杉公は天正の五年九月十三日、能登

の七尾城を攻めた時、十三夜の明月を見られ詩を作られて高聲に御吟になつた。

霜 満軍營秋氣清

數行過雁月三更

越山得併能州景

遮莫家鄉憶遠征

と斯う云ふのだ、傑い御方だらう、夫から歌だつて御上手だつたさうだ、其時に御詠になつたのは、

武士の鎧の袖をかたしきて枕にかよふ初雁の聲

また發句だつて御見事だぞ、矢つ張其時の句に

月澄めば なほ静かなる秋の海

と御詠になつた。これだけでも御傑い事は判つたらう』

『へん、信玄公の御歌などは大したものだ、甲州には城を御築城にならなかつた。城は不用だと言はれて御詠になられた歌は、

人は塀人は石垣人は城情は味方仇は敵なり

なんと傑いものだらう。競て見てどつちが意味が深いかね皆さん』

『フウーンだ、大きな事を云ふな、信玄公は無理な戦を起して、信州の村上義清と云ふ御方を初め、五人の大名方を攻めたから、皆越後へ逃て來られて謙信公に御頼みになつたのだ、そこで義に強い上杉様は、武田家へ使者を立て和談を取持たうとなすつたが聞かないから川中島で戦をな

さつたのだ。少勢で武田の大軍を何度も負かして居るではないか』

『何をつ、負たこと等は一度でもあるかい、いつでも信玄公の方が勝て居るんだぞ』

『何んだと、夫れなら永祿四年九月の車掛りの合戦は何うだ、妻女山と云ふ山から八千人で下りて來た謙信公の車備が。川中島八幡原の武田の本陣へ斬り込んだ時、信玄公の旗本はめちやく／＼になつたではないか、其時大久保内膳と云ふ勇士が、鐵砲で謙信公を射たうとしたから、長光の陣刀で斬り下ろしたら、鐵砲ぐるみ大久保内膳ほどの勇士が眞つ二つになつたさうだ、然うして信玄公を斬らうとした時、原大隅守と云ふ強い旗本の一人が、槍を突き出したら、法性月毛と名付けた名馬の足に傷をしたので謙信公が落馬をした。其間に信玄公は命から／＼甲州へ逃げ歸つたぢやアないか、それでも負けないと云ふのだね』

『馬鹿な事を云ふな、信玄公は大軍の大將だ、自身に刀を振廻して斬込などはなさらない、本陣に悠然と控へられ、斬り込み來る陣刀を軍扇で受流された。其處が傑いところなんだ。謙信坊主

などゝ一緒になるものか』

『何んだ、謙信坊主とは何をいやがる。この信玄坊主め』

『此野郎、信玄坊主とぬかしたな、サア勘辨出來ないぞ』

『サア野郎、矢でも鐵砲でも持つて來い』

「これは凄いとぞ、謙信公と信玄公の一騎討がはじまるぞ、双方負けるなしつかり」
「これはいかぬ、お静かに、ア、介さん覺さん止めておやり、笑つて居ないで」
「ハイ」

兩人が出ようとすると、同時に二人を早くも引分けた男があつた。向側に座つて煙草をのみ乍ニヤ／＼笑つて居た三十歳ぐらゐな美男の旅商人、さうして軽口な愛嬌もの、

「お兩人さん、何んにも云はないで仲直りをして下さい。御一同が仲人になりますから、ねエ皆さん、御隠居さんも心配して居なさるやうだ、然うでせう」

「然うとも、仲良くしてもらひたい。御互に言ひ盡したのだから、思ひ残すことはない」

「あの通り皆さんが案じて居なさるから、言はゞ言葉の發みでせう」

と立ち上つて下から酒を持って来て上手に仲直りをさせた。二人も得心してニコ／＼笑ひ出し一同に挨拶をした。それから皆布團を並べた。氣の利いた計らひに、老公も感心なされ、御疲れも出て程なく床に入られた。さて翌朝は悠くり仕度をなし、廣間の一同より一ト足後から御出立。

「御隠居さん、謙信公と信玄公はすつかり仲好になりました、私が顔を洗つて居る時、笑ひながら語り合つて行きました」

「アハ、、、元氣な人達ぢや、あれも中々味のある論争ぢや、大廣間も宜いであらう。ハ、、

、、

「ハイ、併し可成大入でありました。三疊に一人が宜いと申すのに、三十疊に二十七人でした」

「起て半疊、寝て一疊でございますか、この覺さんも實は餘り寝られませんでした。隣りの者が餘りに近いので、併し此様なことでは未だ悟道には這入れませぬでせうか、アハ、、、だが追込も宜敷うございます」

「これからは時々大廣間に致しませう」

「アハ、、、夫れもよからう」

話を續け三人は、小田原の町を通つて正面に箱根の嶮山を見ながら、山の入口とも申しませう三枚橋をわたられた。

これからが、黄門さまの箱根越、三島奇談の一席となります。

東海道名代の箱根山、江戸から行きますと第一番の御關所である。箱根の關は有名であります關の手に西山公は足をとめられた。見れば通行の旅人は一々調べを受けて居る。無事に調べがすむとこゝして通つて行きます。

關は關東第一の要害、當所の役人は、相模國足柄下郡小田原の城主 十一萬三千石、大久保加賀守殿の預かります嚴重な檢めである。關役人は兩人、少し下つて五人居並び、大久保家の定

紋付いたる幕を張り廻し、獅頭、月形、牛尾の三つ道具を並べてある。この三つ道具を軽く云へば、袖搦み、刺股、突棒と申すので、其他六尺棒等を飾り立て、通行人を見張つて居ります。御隠居さん、東海道の三關所と申しますが、次の新井の關や、氣賀の關と違ひまして此處が實に嚴重でござります。尤もさうなくては成りませぬが」

「ウム、左様だのう」

役人衆は聲張上げ、

「コレ、調べがすんだら早く通れ」

「ハイ、有難うございます」

「コラ、お前達は幾人だ、手形を見せろ」

「ハイ、十一人でござります」

「手形を早く出せ」

「ハイ、これでございますで御通しを願ひます。皆んな同村でハイ」

「ウム、お前達は奥州か」

差上げ申す一札の事

此者十一人、奥州信夫郡山口村より伊勢参宮に罷越候間、御關所無相違被遊御通

可被下爲後日一札差上候仍如件

元禄六年三月一日

村役

藤左衛門判

箱根御關所御役人中様

「よろしい、通れ」

「ハイ有難う存じます」

ぞろぞろ次々に通行をする。其所へ覺さんが、

「御願ひ致します。三人連で、常陸の國太田の在天神林の百姓で、隠居の光右衛門、介三、私は

覺三、上方見物に参ります。何うぞ御通しを願ひます」

「さうか、常陸の百姓か、手形をこれへ」

「ハア、その何で」

「何を云つてを。手形を見せろと言ふに」

「ハア、其手形を、申譯もないですが御役人様、忘れて來ましたで、何うぞ御勘辨を願ひます」

「何んだと、馬鹿な事を云ふな、手形が無くて通れると思ふか、何んの爲の關所だ、此所ばかり

では無いぞ、新井の關や氣賀の關へ行つたら何うするのだ、しかも老人が付いて居て何と云ふこ

とだ、手形を忘れて来るとは不注意な奴等だ、歸國して出直して来い」

「ハア、其所のところを御願ひを、國へ歸るのは大事ですからハイ」

「相成らぬ、下れ〜」

「私からも御願ひをいたします。御役人様」

「お前が出て同じことだ」

「ハア、夫れでは内々で伺ひますが、御關所が通れませぬければ、エ、裏通がございませうか」

「この大馬鹿者め、貴様は幾歳だ、關所の裏道を教へてくれとは、裏が通行出来れば關所は不用になるは、呆れて物が言えぬ奴だ」

老公は苦笑せられて、

「介さんは妙なことを云ふたぞ、これは幾度頼んでも手形なしでは通れぬぞ、兩人は何うするか
な」

獨言をいふて見て居らるゝところへ、後から来た旅人が、老公を見てニコツリ。

「御隠居さん、御先へ出て後になりました。買物をして居たものですからねエ」

「オ、御仲人をなされた方か」

「ハイ、では一ト足御先へ」

關所の前で、合羽を抜き、裾を下して小荷物と三度笠を傍にをき、

「ハイ、御役人様御願ひでございます。私は江戸の八丁堀に住みます小間物屋、藤屋清介と申します。三島の明神様へ御拜を致し度存じます。御通しを願ひます」

「手形を見せろ」

「ハイ、誠に恐入りますが手形がございませんので、ハイ」

「またか、今日は心得違ひの奴がついて来るわい」

介さん覺さんは、老公と顔見合せました。

「コラ町人、此所を何と心得てをる、我々は何の爲に出張して居ると思ふ。箱根の關は天下の嶮手形なしで通れると思ふか」

「ハイ、重々御尤と存じます」

「御尤と存じて居つたら歸れつ」

「其所を折入つて御願ひが御座います。實は小田原迄商に参りました。幸町のいろは屋に泊つて居ります。毎度泊りますから宿屋で御聞きになれば私の事は直ぐ御判りになります。何う云ふ人間かと云ふことは、ところで商の方は調子よく賣切れになりました。次の御注文で、急飛脚を立てまして荷物の來るのを待つて居ります」

『それが何うしたといふのだ』

『へい、其荷の来る迄遊んで居る間に、三島の明神様へ御参りが致したので御座います。それと云ふのは私の母が、昨年の暮重い病氣になりました時、三島明神様へ大願をして一心に拜みましたら、有難いことに全快いたしました。母は三島の生れで、氏神様ですから、其御禮参りがしたいのです。遊んで居る間どころでは有りません。早速来なければなりませんのに、一人商の多忙さに今日迄延々になりまして、本當に相済まぬことゝ存じて居ります。御禮参りをして来たよと、母に告げましたら何んなに喜ぶか知れません。喜ぶ顔が見たいのです。老先の短い母親を思ひまして、斯う云ふ譯でございます。取急ぎ手形も忘れながら御無理な御願ひをいたします』

ホロリと涙、頭を大地にビタリと付けた。

『ウム』

この時、最前から一言をも言はずに同席して居つた同役が、静かに座をすゝめ。

『旅人、今の言葉に偽りは無いか』

『へい決して偽言は申しません』

『それなら始めからもう一度述べて見よ、今申したことを』

『へい〜』

再度彼が述るのを、ちいつと聞いて、

『よしつ、向後はならんぞ、此度だけは見通してやる。御拜のことであるし、母に孝行の二字に免じて』

『へい、有難う存じます〜、其所の御役人様、有難う存じます』

『ウム、御拜禮が済んだら早く歸つて来いよ』

『へい、では御免下さい』

挨拶もそこ〜に、三人の方へ一寸ふりむいて、急ぎ足にどし〜出掛けました。

覺さんは、後ろ姿を見送りまして、

『彼の男は、輕口で程のよい昨夜の仲人、氣樂さうで中々の親孝行と見えます。氣に入りました御隠居は如何思召ます』

『ウム、さうだのう』

『イヤ、私も感心して居ります。役人衆の計らひもまた感心いたしました』

『ウム、情味のあるはからいだのう』

『ハイ、仰せの通りにございます』

「仰の通りかね、覺さんは時々堅くなりますな」

「これは、つい」

優しい役人は聲をかけて此方を見た。

「其所に何時迄立つて居る。三人共早く國へ歸つて手形を持つて來なさい。ア、コレ、元來た道路へ歸るのだ。判らんか、御前方の來た方へ戻るのだ、彼方へ行け、彼方へ」と右手を上げて三島の方向を指した。

「ウム、これは感心、氣轉の利いた情ある計ひだ。介さんや、禮を述べてきなさい。然うして役人達の名を聞いておいで」

「ハイ」

三人は頭を下げて通行する。介さんは小戻りを、程なく引返して來た。

「姓名を聞いて参りました。中村靜馬、ボン／＼申します方は山倉儀助と云ふのでございます」
「左様か、夫れでは日記に書いて置きなさい。ボン／＼云ふ方も、あれで中々味の有る男のやうだ。兩人共揃つて居る。あれで宜いのだらう」

關役人は何う云ふ調べをするものかと、試してみました。手形も出しませず、御名も申さず。「さうであらうと、様子を見て居つた。併し介さん、裏道を聞いたのには驚ろいたよ、アハ、」

「イヤハヤ、面目次第も、思はず出ました。あれは甚だしい愚言で、赤面のいたりで、ウフ、」

「では、参りませう。あの男も早足と見へます。もう姿が見へなくなりました」

「あゝいふ男は、連になりましたら面白いことせう。御隠居さんは如何に思召しますか」

ニツコリ御笑ひになつて。

「ウム、面白いであらう。だが三人が話が合つて宜いな、それから、御隠居はいかね、隠居でよい。思召ますか等と、それも餘り堅い言葉だ、毎度申すやうだが、軽く話をしておくれ」

「ハイ、御言葉に従ひます」

足柄山や、金時山、老の平や箱根竹、名所古跡は天下の勝景、四方を見ながら西山公、靜かに山道を行かれるところへ。

「御隠居さん」

笑ひながら、小間物屋が樹々の横から聲をかけた。

「ヤアー、仲人さん、未だ此所に居たのですか」

「へエ、貴方達が通れたかと心配になりました、手形が無いやうだから何うだらうと、案じて居りましたよ、來なされば宜いかなアと待つて居りました」

「イヤ、それは御親切に、有難う存じます。優しいお役人で通行を許して下さいました」

「夫れはよかつた。御三人とも今夜は三島泊りでせう。私も三島の宿には定宿があります。花屋です。御縁が有りましたね、今夜も御一緒に泊りませう。花屋は大廣間ぢやありませんよ、ハ、ハ、ハ、」

「それは宜い、では隠居さん、覺さん、此方と御一緒にになりませう」

「それがよい。併しあなた小間物屋さんですか、若いのに感心だ。昨夜の仲人をしたり。親孝行であつたり」

「イエ何う致しまして、でも御關所の御役人が優しい人でしたから通れましたのです。お蔭で御参拜が出来ます」

それから四人連となりまして、小間物屋の話上手に、足のはこびも軽くなり箱根を越へて三島の宿に着き、三島明神様に参拜をなし、程近き花屋と云ふ宿屋に入りました。宿の女中達が出迎ひまして、

「御早い御着様で、入らつしやいまし、御疲れで御座いませう」

「御疲れさまで、御四人さまですよ」

「ハ、イ、何うぞ御上りを、御案内をいたします」

「今夜は頼みますよ、ヤレ〜」

「隠居さん、御疲れでせう」

「何、それ程でもない」

「山越は、若い者でも疲れますから」

二階の座敷に案内されて、茶菓を持って来た若い女中が、

「お風呂が宜しうございます。何うぞ御入浴くださいませ、込み合ません内に」

「さうかい、サア御隠居さん入らつしやい。御兩人も一緒に」

「マア、小間物屋さんから」

「イエ〜、御遠慮なく御先へどうぞ」

「それでは先に入れて貰ひませう」

「では私も御一緒に」

老公と介さんが入湯、小間物屋が帳面を記けて居りますから、入れ替つて覺さんが入浴に出掛けた。

「隠居さん良い湯でしたから、お疲れが取れませう」

「さうだ。風呂上りは實に良い氣持ですよ、小間物屋さん入つてをいでなさいよ」

「へエ、一と風呂這入りますかな、この胴巻をすみませんが御預かりなすつて下さい」

「ハア、御預かり申します」

入れ違ひに覺さんが湯から上つて來ました。

「介さん、胴巻を手にして何を考へて居るのだね」

「ウム、小間物屋のを預かつたのだが、少し變なのだ、それで考へて居る」

「何が變なのだな」

「サア、小判が這入つて居るのだらうが、黄金にしては餘りに軽いのだ、贋金ではあるまいかと思ふ」

「なに、贋金、それはけしからん。捨置けぬ」

と手に取つて、胴巻の上から探つて見て、

「成程軽い、中を改めて見たいと存じます。見ましても宜しう御座いませうか、御心持を」

「よい、調べて見なさい」

御許を受けて兩人は、胴巻の中から取出した五十兩包みが三ツ。封目に金五十兩と書いてある封をぶつりと切れば、バラ／＼、軽いも當然、一兩小判が前後に一枚づゝ張つてあり。中味は残らず鉛であつた。三包とも同もの、小判は皆で六兩だけでした。

「これは呆れた。人は見かけによらぬもの」

彼の小間物屋の所持品としては、正直さうな孝行者と見たのに、三人顔を見合せて居ましたが覺さんは再度。

「よしつ、あの呆れた奴が來ました時、私が調べてやりませう。ア、來ました／＼」

ところへ、濡手拭を下げて小間物屋が笑ひながら、

「ア、良い湯でした。たつぷりありまして、旅行の中の楽しみは、疲れた足を、身體を宿屋の湯に入れた氣持は、まアこれが一番でせう。オヤ、皆さん何うかしましたか」

「、、、、」

「アリア／＼、これは驚ろいた。御預けした胴巻が口を開いて、小判の包が切れてバラ／＼だ、何うしたことですな」

「小間物屋さん。此處へ御座り、預かつた胴巻が餘り軽いから不思議でならない。夫故中味を調べて見ましたよ」

「エ、何んですと、他人の金を一言の斷りもなく調べなすつたと」

「然うです。この覺三が調べたのです。さうしたら、此通り鉛だ。贋金でした。本物は六兩しかない。實に呆れました」

「へーエ、呆れたのは此方だ。贋金とはなんです。先刻、では無い今しがた、湯に行く時に、紺

木綿に鼠甲斐絹の裏の付いた胴巻へ、小判で百五十兩、五十兩包が三つ、確にお前さんへ預けましたぜ』

『それは預かりました。偽物とは思ひませんからね、それが中を開けたらこれです』

『若しく、お前さんは氣はたしか、ね、人様の胴巻を預かつて、軽いからと開けて見る手がありますかエ、人を馬鹿にしないで、サア隠した金を早く出しなさい』

『この六兩だけで、外には一枚の小判も無いから出す譯には、まア、いきませんなア』

『へーエ、能く其んな事を兩人共言つて居られるなア、これが御役人に聞えたら重い罪になりませ』

『さうですかなア』

何とも話の仕様が無い、落付いたものだ『若し御隠居さん。介さん覺さんとかには口がきけない餘り圖々しいので、他人の品を開けて、中味を抜いて平氣で居る、御老人に心配を掛てはすまないが、御相談をするのだ』

隠居さんは右手を上げてニコく。

『まア御座りなさいよ小間物屋さん。中腰では話が出来ぬ。さう怒らないで悠くり話ませうよ』

『へエ、すると御隠居の答を聞きませう』

『サア、胴巻を開けたのは兩人だが、言ひ付けたのは乃公ですよ、ハ、、、』

『ナニ、お前さんが、へエー、何がハ、、、だ、能くも三人揃つてこんな悪事をしたものだ、優しい顔の爺が、斯う云ふ仕事をしようとは、もう情をかけては居られない。宿役人へ届けるから宿の主人を呼んで手続きをするよ、表面になると命は無いよ、三人共覺悟をせなせエ、併し、もう一度考へて見なさい。命有つての物種だ。今の内なら私一人ですむ、他には知らさない。早く金を出して詫た方が能いだらう』

『考へるところはない。御届けが宜からう。御遠慮なく、お前さんこそ早くなさいよ、私等は疲れて居りますで食事がすむと寝ますでなア』

『然うか、届けて能いのか、ようしつ、待つて居るよ此奴等、後悔するな』

立上つた小間物屋の凄顔、最前とはがらり變つて別人のやう。鋭い目光で老公を屹度ならむ然うして座敷の外へ出て、

『女中さん、一寸来ておくれ』

『へーい、御客さま御用でございますか』

『ア、旦那は居なさるか。花屋さんは』

『へエ、あの御帳場に居ります』

「さう、今行くから、さう云つてお呉れ」

「申し傳へます」

小間物屋は、再度三人をギョロリツと見て、トン／＼と下へ下りて行つた。

「隠居さん。人を見たら泥棒と思へ、火を見たら火事と思へとは、旅へ出での注意だと申しませうが、成程よく云ふたものであります」

「實に油断がなりません」

「餘りに程のよい男で、それが私の氣にいらぬところも有つたのだ。實は内々注意をしてをつた關所で本當に涙を見せた時は、見なをさうかと思つたが、一寸面白くないところも見へた。老人でさへ騙されさうなもの、若い人は無理もない。だが兩人は何う見て居るかと思つてな」

「これは恐入りました。双方を御試しのやうで」

「あの男ばかりには、一杯喰ひました」

すると、小間物屋がまた入つて来たから、宿屋の主人や、宿役人を同行したのかと見ると、一人で来たのです。三人は無言のまゝに見て居ると、やがて老公の前へ靜かに座つて、御顔を見詰めて居る。

「御訴へをしたかね、お膳が来てをるから、私等は食します。お前さんも食事をなさい。役人衆

の来る迄、間もありませんから」

三人は悠々と食事をはじめた。小間物屋は無言を續けて、兩腕を組み、食膳を見向きもせず、老公をなをも見詰めて居る。薄氣味わるい場面となりました。

食事をすませた御隠居は、

「小間物屋さん。話は判つて居るのだから、然う堅くならないで、サア食事をしては何うですわね」
御言葉が終ると小間物屋は、後へ少し下つて、兩手を疊へピッタリ仕いて頭を下げた。

「オヤ／＼／＼」

覺さんが思はず獨言を云ふと。

「これは變だ、どうしたのかなア」

介さんも不思議さうに見入つて居た。

「小間物屋さん、何うしました」

「へい、何とも申譯がありませんでした。御詫を致します。斯んな立派な親分とは知らずに」

「ハーア」

「我身ながら愛憎が盡ました。間拔な野郎で御話にやアなりません。さぞ御笑ひなすつたでせう子分衆にも御詫をします。お兩人さん御勘辨をなすつて」

『これはく』

呆氣にとられて聞いて居る兩人と顔を見合せられた。

『親分さん。私は東海道五十三次を盗いで居ます大蛇の長吉と云ふ、駈出しの小僧ツ子でござんす。でも此頃ちやア仲間の奴等に、兄い〜と立てられて良ひ氣になり、親分氣取で居りましたところが未だいけません。親分方と氣も付かず、小田原のいろは屋で同宿をした時、田舎の大百姓の隠居が作男を供に連れての上方見物、三人ながら懷中にやアたんまり、少なく見込で四五百兩、うまく行きやア一とツ箱、近頃になエ大仕事、殊に依つたら千兩にもありつけやうと、絆名の大蛇を地で行つて、御隠居さんを一ト呑みと見込んだ仕事は大外れ、イヤハヤ面目もねえ此姿です。何うか御勘辨下さいまし、然うして親分の御名前と繩張を御聞かせなすつて下せエ』
『隠居さん。貴方泥棒の親分と間違へられましたやうで』
『ウフ、、、』

『アハ、、、』

『皆さんが御笑ひになるのが當然です。間拔な奴だと御考へでせうが、これでも生れは江戸なん

で、へ、、、』
『イヤ、大蛇の長吉さんとやら、其考へは違つて居ります。私は御仲間ぢやないよ、本當の百姓

ですよ』

『未だ御隠しになりますか、胴巻を外から見破つた眼力、其大膽な落付きと云ひ、私の腹のそこ迄見通しなすつた様子と云ひ、何處から見ても大親分、此目にはづれは無いつもりです。御兩人さんの御名前も、一緒に聞かせておくんせエ』

『これは困りましたな、介さん覺さんも御仲間だと云はれるぞ』

『これは、益々驚ろきましたな』

『幾度云ふても同じことで、私共は常陸の百姓で光右衛門、介三覺三と云ふものですよ』

『へーエ』

老公の御顔を、またもち一つと見詰て居たが、

『然うかなア、ウム、二度と目違ひをするやうぢやア、もう己も駄目だ、胡麻の蠅ぢやア飯にならねえ、背中の大蛇の刺青が泣くだらう』

泥的は悄然と下を向いて、深い息をついてゐた。

『長吉さんとやら、少し話があるから、まア食事をしなさい。それとも胡麻と見られて胸が一抔飯が通らないかえ、アハ、、、』

『何、そんな事が、いくらでも喰ひますよ』

膳を引寄せむしやく喰ひ出した。弱味を見せまいと、負ぬ氣を出したと見へる。

御隠居は、彼の食事を終ると見るや。

『長吉さん、此處へおいで』

『へエ、何んですね、何を云ひなさるか聞いたところで仕方がない、サア宿役人へ突き出して貰はう、先刻主人に會ふと云つて、下へをりたのは狂言だ。宿屋では何も知らねエんです。サア早く、決して逃やアしませんぜ、斯う目が違つちやア、生れ變つて來るより仕様がねエ』

と言ひながら兩手を後ろへ廻して、身體を老公へ付きつけた。

『マア、お待ち、私の云ふことを能く聞きなさい お前は幾歳だね』

『三十でさア』

『人間は三十にして立ち、と云ふからお前さんはこれからなのだよ、今言ふたね、役人につき出して呉れと、出されたら命はあるまい。夫れを知つては居るだらう、すると命を捨る覺悟をして居るのだね、それなら死んだ氣になつて改心しなさい』

『、、、』

『兩親はあるのかね、親は我子の健康と、其次は出世するのを何よりも楽しみにして居るものだから泥棒になつたと聞いたなら、死ぬより辛い思ひをして居なさるだらう、世間に顔向けも出來

まい。自分が出世するよりも、我子が丈夫で、世の中の爲になつてくれたら、其方がどれ程嬉しいか知れぬと思ふ』

『、、、』

『兩親は丈夫かね、生ていなされば、何程嘆いてをるか判るまい。死んで居るなら、冥途で案じて居られやう。長吉さん、今からでも遅くはない。改心して正直な人になつてほしい。私の言ふことが判るかね』

『、、、』

『さうなつたら兩親は、どんなに喜ぶであらう。若し此世に居なされなくても、お前さんは孝行が出来る。明るい身體となつて、善行をすれば、これが、孝の終りをとゝのへると云ふことになる。それが親なき後の孝行ですぞ、私は、お前さんの親になりかはつて意見をす』

『、、、』

『私の言葉が氣にいらなにかね、まア悠くり考へて返事をしなさい』

下を向いて聞いて居た長吉は、しばらくするとボロ／＼涙を流して疊へ頭をピッタリ付けた。やがて起直つて老公を見上げ、

『ア一濟まねエことをしました。何とも申譯が有りません。御隠居さん、今の御言葉は骨身に確

かり堪へました。ア一悪かつた。俺は馬鹿だ。何うしてこんな汚れた身体になつたらう面目ねえ、御隠居さん、私のお母アはね、こんな悪者を伴に持つて、世間さまに顔向が出来ねエと、家を引越してばかり居ましたが、私の身を案じながら病氣になつて、とう／＼死んださうです。後で聞いたんで、母親の死の際にも會はねえんです……。父親はそれから、お母アの故郷野州へ引込んで仕舞つたさうでしたが、其後廻國をすると云つて、何處へ行つて居ますか行衛が判らないうさうです。それも私の不孝がしたことですよ、友達から聞いた話なんです。聞いた當時は濟まねえなアと思つたんですが、だん／＼圖々しくなつて、矢つ張悪の道から足が洗えなかつたんで、すねエ、今度こそは本當に改心します。きつと眞人間になります。戸板の上へ餡菓子並べて、一文商ひを道路の端でやつても善人になります。悪事をして金を儲けやう等とは決して思ひません。御勘辨なすつて、御兩人さんもねエ、御隠居さん有難うござんした」

と、幾度も頭を下げては涙を拭いて居る。

『よく改心した。お前さんが善心に立返つてくれて、私も喜ばしい。のう介さん覺さん』

『左様です。私等も共に喜びます。長吉さん向後は何んなに苦難な場合に出會つても、再度悪道に走らぬよう注意をなさい』

『へエ、御意見有難ふござエます。これから親父を尋ね出して孝行をします』

『それが良い、私等も心掛けませう。お父さんは何處の生れの人です。名は、職は何んですかな』

『へイ恐入りますが、若し御會になりましたら長吉は改心したと、喜ばしてやつて下さい。縁が無くつて、一生會ねえでも、聞いたら安心して呉れませう。然うすれば親父へ詫の、孝行の眞似ごとになりませうから』

と、長吉は涙をふいて、

『エ、さうして江戸の神田大工町の者です。大工の甚吉といふのです。エー、五十六だと思ひます。腕利きの大工でした。大工は職人の司だぜ、長吉確かりやれ一人前になれよと、よく私に云つてくれました。それに親父は木彫が上手でした。彫物大工の甚吉と云はれて仲間の通りが宜かつたんです。圖引きも上手でした。それを私が悪いばかりに、故郷の江戸にも居られなくなり……。ア一濟まねエ、これから屹度罪滅ぼしを致します』

『よかつた。心がけませう』

『御願ひします。二三年の内には野州の佐野へ参りますと、御會になつたら傳へて下さい』

老公は、介さんが出す紙包みを手を、

『承知しました。それから此紙包は意見料ですよ』

長吉は手を振つて、

『何う致しまして、これを頂いちやア濟みません。御心持だけで充分です。いけません。いえ頂きません』

『さう云はないで 遠慮なく頂いて置きなさい。折角の御心持を無にしては失禮ですよ』

『でも、夫れでは餘りに勿體ない』

『隠居さんの清いお金で、清い商賣につきなさい』

『へエ、成程、これは御尤だ。では遠慮なく頂きませう。御隠居さん重ね々御禮の申上やうが有りません。有難うございます』

『サア、然うきまつたら、そろく寝物語りにしようかね』

『御疲れでせう、御床に御入りを』

『どれ、寝ませうかな』

翌朝は早く長吉が、別れて一人先に宿を出でた。さうして彼は別人の如く、元氣よく出立いたしました。

『案外早く改めまして、宜ろしかつたと存じます。あの悪道の智を正しい方に用ひますれば相當な人間になれませう』

『ウム、ウムさうぢや』

『お道中御氣を付け遊ばして、御近い内に、また御泊りを願ひます。御水變りに御氣をつけなさいませ。へい御大切に』

宿屋の内儀や、番頭女中達の、耳當りよい言葉を後に、三島の宿を過ぎられて、沼津の手前の松原迄おいでになつたところへ、

『御隠居さん』

と聲をかけて長吉が正面から、三度笠をぬいで頭を下げた。

『オヤ、お前は未だ此邊に居たのかえ』

『へい、御待ち申して居りました』

『何ぞ用でも』

『へい、御兩人さんも一寸足をとめておくんせえ』

言ひながら長吉は、往來から少し横へ入つて、人目の少ない場所へ七八間、立木の間へ案内し地面へピッタリ座つて、

『昨夜は少しも寝ませんでした。今迄のことを考へたり、御隠居さんの事を考へまして、夫れから此先私に行く道をなど、就ては貴方のことなのです。百姓の光右衛門とは受取れません。御身分のある方が姿を變て、内々の旅だと斯う考へました。御侍でせう。介さんも覺さんも』

「イヤ、それは違ふ侍ではない。常陸の百姓だよ」

「いけません。御侍です判りますよ」

「何うして判るね」

「侍は子供の時から重い刀を二本、左の腰に差すでせう。だから自然と左の肩が張る。大小を差さない時でも同じです。貴方がたの肩を見てハ、アと思ひました。そ、そうら、其肩です」

「ウーム」

「モウ一つ、言葉が違ひます。百姓職人商人とは、言葉が重々しい。御隠居さんはよく真似て居なさる。己達にもさん付けで呼び、優しいね。だが、介さん覺さんは駄目だ、話して居る内に侍口調が出たり。商人になつたり。百姓になつたり。まるで言葉の五目だね、いくら隠しても無駄な話だ」

「さうか、残念ながら御隠居、見破られました」

「仲々目の利く男でござります。もう白状いたしますせうか」

「ナニ、白状をいたす。彼と反対になつたかな、アハ、、、」

御隠居は笑ひながら長吉を見て、

「察しの通り侍であるが、それを聞いて何うするのだね」

「御隠居さまの御名を聞かせて頂きたく存じます。御立派な御方と心得まして」

「隠居の身ぢや、名乗るにも及ぶまい」

「是非御聞かせなすつて、御願ひです」

「コレ、御隠居が御迷惑だ、早く出立するが宜いぞ」

「でも御座いませうが、昨日の長吉ぢやありません。今朝三島明神様へ、清い心で御拜をさせて頂きました。今迄のこと、箱根の御關で述べたこと、幾度も、御神前で御詫を申上げてまいりました。心の中も、兩方の耳も汚れがとれてをりませう。何うぞ聞かせて下さいまし、決して他言はいたしません」

長吉は、兩手を付いて頭を下げました。

「これほどに申して居りますが、如何致しませう」

「聞かせてやりませう」

「ハ、長吉これへ、それでは聞かせてつかはす。水戸家の御隠居、前の中納言光圀公であらせらるゝ」

「エ、ッ」

長吉は身を震はせて後へ下り、大地へ顔をすり付けました。

「ア、勿體ない。水戸の黄門様とも知らずに、失禮ばかりしまして、御免下さい。何うぞ御許しなすつて、よく御聞かせくださいました。有難う存じます」

「もうよい、頭を上げなさい。さう叮嚀にせんでもよい。隠居のことだから」

「へーい、恐入ります、それから御兩人さんは何といふ方ですか」

「私は、佐々介三郎」

「拙者は安積覺兵衛と申す」

「へい、お兩人とも水戸様の御家来ですか」

「左様だ」

「長吉さん、いつ迄座つて居ないで立ちなさい。サア、遠慮はいらぬ長さん」

「ウへー、恐入ります長さんなんて、何んと云ふ優しい御言葉で、傑い御方は違ふなア」

御顔を見上げて考へて居た長吉が、御傍へ近寄り、聲を張り上げ、

「御願ひが御座います」

「また御願ひか、よく願ふ奴だなア」

介さんが笑ひ出した。覺さんもクス、だが長吉は目をすえて、

「御隠居さま、私を御供に御連下さい。何處までも御供をさせて下さいまし、改心をした長吉で

す。斯う云ふ御方の御傍に半年でも、一年でも居りましたら、それこそ本當の良い人間になれませう。是非共御願ひいたします」

「これつ、無理な御願ひをするな、御困りになる。考へても見ろ、改心はしても昨日迄は泥棒だつた者を、御連れになれるか」

「でも今日からは眞人間です。昨日の事は言はないで、介さんからも願つてくごさい」

「ならん、然う云ふ御願ひは出来ぬ」

「御隠居さま、御承知が願へませんか、御返事のないところを見ると駄目かなア」

と考へて居たが、やがて懐中からヒロート振を取り出し、右手に持つて、

「御隠居さま、御供が出来ないぢやア生きて居てもつまらねえ、御手打にしてくださいこのヒロ

で」

兩眼を閉じて西の方に向ひ、再び地面へ座り老公に體を寄せました。

「お前は、父親を尋ねるのであらう。不孝の詫をするのであらう。また罪滅ぼしに善行をする筈であらう。それを私の手討にならうとは、約束が違ひはせぬか」

「へエ、御尤です。併し、黄門様の御供が出来ねえやうな不運ぢやア、一生親父に會へねえと思

ひます、御別れをするのが辛いのです。思ひ切つて御手討になります。冥途に行つた時、兩親に

會つて、斯う云ふ譯で水戸様に御手討になつて來たと話たら、親達は喜ぶでせう宜く罪滅ぼしをして來たと、斯んな氣持で願ひます。サ、何うぞ御手討を』
首頂垂れて覺悟のよいこと。

『さうか、それも宜からう、望みとあらば手討にしやう』

長吉の差出したヒ口を御手に、キラリツと光つた。然うして目先へ突き付けられた。だが平氣で首を差延べた。

『斬るぞよ』

軽くピタリと、首筋を七口の平でうたれた。けれど長吉は目を閉つたまゝ身動きもしない

『ウーム、よい覺悟だ、其膽力を良い道へ向けよ、供をいたせ』

『へエ、御隠居さま御供をさせて頂けますか有難うございます、勿體ないことだ』

長吉はまたボロ／＼

『長吉、お前は幸福者だぞ、御供が出来るとは』

『夢のやうだらう。併し物騒な奴が御供になるから、今迄と違ひ、これからは油斷がならぬ、以

前の氣を出すなよ』

『冗談いつちやア不可ません。私は夫程馬鹿ぢやアありません。御兩人さん御願ひします弟だ

と思召して』

『オヤ／＼、大變な弟が出来るぞ、ハ、ハ、ハ、』

『そろ／＼出掛ようかな』

『ハイ、参りませう』

『御荷物は私に持たせて下さいまし』

『然うか、覺さん何うする』

『サア、宜からうが、でも途中で居なくなると困るな』

『冗談でせう。未だ疑つて居るんですか、辛いなア』

『アハ、ハ、ハ、宜いだらう持つてゆきな』

聞いて居られた老公も、苦笑しながら長吉の御供ぶりを見ていらつしやる。

一行四人となつて沼津の宿に御休息、それより道中は益々御元氣にて、原、吉原、神原、江尻府中(今の静岡)、阿部川を渡り鞠子の宿、それより宇都の谷峠を越へて岡部の宿、藤枝の宿迄御いでになられた。時には、三四里行つては御泊りのこともあり。行處御視察と御見物、泊りを重ねて來られる内、長吉はもうすつかり御馴染となつて仕舞ひ、そして滑稽百出の愛嬌者で、時々笑ひの種を撒くのでした。

さて、藤枝宿へ御入りになつたのが、黄門様岡崎の看板といふ一席になるのでございます。宿の中程に、櫻屋と云ふ小料理屋がありました。店の入口に櫻が二本、有合酒、肴、めし、と書いたかんばんが出てをります。旅人の中食で繁昌をして居る時刻、其所へ中食に御遣入りなされた。

いま食事の終らうとするところへ、店の暖簾をくゞつて入つて来た一人の少年がありました。草鞋をはいた旅姿、汚れた衣類に青い顔、悄然として腰掛の方の端に、四方を見ながら遠慮さうに腰を下ろした。女中達は働きながら目をつけて、

『御飯ですか』

『エ、』

『お茶は何にします』

『エ、あのう、なんで』

少年はさも氣まりがわるさうに、云ひ出し兼て居るようです。

『お肴ですか、お野菜ですか』

若い女中は懊焦さうに聞いて居ると、

『あのう、御飯とお香の物だけ賣つて下さい』

少年は顔を少し赤くして下を向いた。

『御飯とお香々だけですか、旦那何うしませう』

帳場格子の中に居た主人に、女中が聞きに來た。すると主人は目鏡をかけ、延び上つて少年の

方を見た。

『おまつ、出してあげなよ』

『ハイ』

『香々ばかりでなく、エ、ト、肴とお汁をつけな、野菜も一ト皿付けなよ、お代は、心配なくと言つてなア、この次に頂きますからとさう云つて、めしは山盛にしてあげなよ』

『ハア』

女中は言ひ付け通りにして、お膳を少年の前に出し、

『どうぞ』

『これは違ひます。御願ひしたのは』

『宜いんです。宅の旦那がたくさん上げてと言つて居ます。次の道中の時一緒に頂きますからと

遠慮しないでおあがりなさい』

『ハイ、有難う、それでは頂きます』

帳場の方へお辭儀をして、落る涙を拭きながら、やがて食事につきました。他の客が流し目に見て居る中に老公は、ち一つと見て居られた三人もともに、食事が終ると少年は、懐中から紙包みを出し、其内から小錢を手に、

『女中さん、御飯と香々だけ幾錢ですか』

『イ、ンですよ』

『これだけは拂ひますから、取つて下さい』

主人は半身乗り出して、

『拂はないでも宜いんですよ、此次の時に貰ひますよ、少しばかりの勘定を義理堅いなア、オイおしんや、にぎり飯を大きくして三つ四つ、竹の皮へ包んであげな』

『ハイ』

少年は帳場の方へ向ひ。

『旦那ですか、有難うございます。此次まで御借なすつて下さい』

『エ、エ、よう御座いますとも、何處へ行くんですね』

『江戸へ参ります』

『氣を付けておいでなさいよ、遠い、からねえ幾歲です』

『十四歳です』

そこへ女中が竹の皮包みを持って来た。

客の中にも三四人は、氣の毒さうに顔を見て、幾錢づゝか出したいやうな氣分が見えた。此時

老公は、

『覺さんや、あの子を一寸呼んでお呉れ』

『ハイ』

すーつと立つて、腰掛の方へ寄り、

『にいさん。私の御連の隠居さんが、少し御話があるさうで、あの白いお鬚の方です。何うぞ上

つて下さい』

『私に、何か御用ですか』

『サー、御話が、一寸御上りなさい』

少年はもちくししながら、足を拭いて老公の前に座つた。櫻屋の亭主は、横目に見て居る。御

隠居はこれを見て、

『御亭主、此御子に少々聞きたい事がありますので、来てもらいました。それから、私共は感心

して聽いて居りました。良いお心がけですね』

「エへ、、、是は恐入ります。何んのこれしきりの事で」

「よい氣持の方ぢや、そこで、この勘定は、私の方へ一緒にして拂はして貰ひませう」

「何う致しまして、僅かばかりですから、併し御親切は有難いことで、何うぞ御心配なく」

「櫻屋さんの繁昌は、御主人の心がけに有るのでせう」

「然う御褒になられちやア面目ないんです」

御隠居はしきりに感心して、さて少年に向ひ、

「お待たせしました。江戸に行かれるさうですね、失禮だが路銀をあげたいと思つて居ります」

「エ、私に、貴方は何處の御方ですか」

「サア、それは私の方から聞きたいと思ひます。私等は常陸の百姓ですが、お前さんは十四だと

云ふが、大人のやうぢや、さうして禮儀も正しい。何か仔細のありそうに見える。江戸迄の一人

旅、それに食事の金も少ない様子、御國は何處ですね、御両親は御丈夫か、何う云ふ譯で江戸に

行きなさる」

長吉も乗り出して、

「黙つて居ないで話なせえ、御隠居さんは親切だぜ、お前さんの味方になつて下さるぜ、有難い

心の方だ、己も多くさん苦勞をして覺えがある。飯と香こで思ひ出した……」

「何を云ふのだ、……サア、聞かせて下さい」

優しい情味の御言葉に、少年は顔を上げ、

「それでは申します。私は尾張の名古屋です。尾張大納言様の家來で、白井重内、號を正齋と云

ふ學者の子で、庄太郎と云ふ者です」

「ナニ、尾州家で聞こえた名の、白井さんの子とも有らうものが、其姿は何うしたものかね」

「ハイ、私の母は五年前に亡くなりまして、次に來ました義理ある母が、今度私を江戸へ學問の

修行に出るやう、父へ進めました。父も承知をして、供を一人連れて行けと申しましたが義母は

一人で行けと申しました。そこで名古屋を立ちましたが、途中三河の吉田で泥棒にお金を盗まれ

衣類の包迄取られました」

「アレ、畜生奴、悪い野郎だなア、こんな子供の物を」

「長吉、だまつて御聞き」

「へい、可哀さうに、へい」

「それから、何うしたね」

「少しばかり別に持つて居ましたお金で、江戸へ行かうと思ひまして、安泊りに寝かせて貰ひ、

三河から此處まで來ましたが、もう少々の残りで、これからは宿にも泊れません。いま飯だけ

賣つてもらひましたら、御主人の情を受けました。今夜からは道路へ寝ても旅を續けて参ります』

『成程、江戸は何處へ行きなされる』

『小石川の白山と申すところの近所に、父の門人が居ります。其所を尋ねて参ります』

『泥棒に盗まれたのは三河と聞きましたが、近い名古屋の家になぜ歸らなかつたね』

『ハイ、義母が怒りますと思ひまして』

『お母さんは、無理を言ふ人でせう、毎日辛いのでせう』

『イエ、私がわるいのです』

『子供は、おまへさんの外にありませんか』

『エ、お母さんの産んだ子、弟が一人居ります。私は愚ですから、父に心配を掛けます』

『御隠居さん、私に一ト言いはせて下さい、白井正齋と云ふ學者は、何うかして居ますね、女房にすつかり、馬鹿にされて居やアがらア、何んでエ、其女は我子ばかりを可愛がつて、義理ある此子を邪魔にしやアがるに違ひねエ、ようし、己が合點しねエ』

『コレ、長吉何を云ふのだ、靜かにしておくれ……、そこで庄太郎さんや、私達が送りますから、一度名古屋へ御歸り、然うして三四年立つて、年頃になつてから修業に行きなさい、名古屋は通り道だ一緒に行きませう』

『それでは、御迷惑を掛けます。それに母が怒りますと、父も困りますし、また近頃は父も怒りますから』

『へん、何んの事たい、親父迄卷かれて居やアがらア』

『また長吉……、まア私に任せて、庄太郎さんや、心配せずに付いて御居で、御兩親になにぶんにも意見をませう、判らぬことはないと思ふ』

『庄太郎さん、何を考へて居るんだ、御隠居は話が上手だぜ、話で納らなきア本音が出るぜ、うちの隠居さんの本音は優しくつて利くよ』

『よく出てくるのう』

『介さん覺さんも、庄太郎にすゝめましたので、考へ込んで居ましたが、老公を信じたものと見へ、』

『それでは御供を致します。宜敷御願ひ申します』

『決心が付きましたか、それが宜い庄太郎さんの爲にも、御兩親のためにも』

『ハイ、御隠居さんの御名を聞かせて下さい』

『私は、常陸の天神林の百姓で光右衛門といひます。若い者は覺三に介三、長吉ですよ、上方見物の途中です』

「さうですか、皆さんも御百姓さんですか」

此話を主人も聞いて、

「良い方に御目にかゝつて結構でした。確かに御願ひするんですよ、私も喜びますよ」

「有難うございます。御世話になりました。これも御主人の御蔭です。皆さん有難う」

「マアこれで安心なことねエ」

と女中達も口々に話して居る。そこで櫻屋の勘定をして、見送られながら一行は表に出で、庄太郎を慰めながら行かれました。

藤枝を過ぎて島田の宿、こゝを通つて大井川の河原へ出られた。

「オウ、幾年ぶりであらう大井川へ参つたのは、ウーム、流石に勝景ぢやな」

「御隠居さん、大井川へ来ました。何時見ても宜いですねえ、何うです廣い河幅は、七百間の餘もありますよ、川の手前が駿河の國、川に向ふが遠江國、駿遠の國境ひだ、大した場所ですね」

「さうだのう」

「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川。と人足達が唄つて居りますよ、川越人足は威勢がいなア、私も人足をしたことが少しの間ですが有りました。辛棒が出来ねえで、エヘ、」

「さうか、辛棒が、それで彼の商賣に變つたのかね」

「へ、、、こりや驚ろいた。其話はよして下さいよ介さん、だが御隠居さん、川の御規則は厳しいですよ、若し川越切手を買はないで渡ると死罪になりますよ、悪者の人相書があるから、高飛者などは直ぐ捕まいますね」

「さうかい、川の關所だな、お前は何うだね」

「エ、確ですよ、御供をして居ますもの」

「御供か、をや〜」

「をや〜は心細いなア、ア、渡る〜、増水してゐるやうだ。御隠居さん、ごらんなさい。川會所の役人衆が見張つて居るでせう。毎朝お役人が川原へ出て、水の深さを計るんです。何しろ流れが早いし、時々出水がして來るので」

「成程」

「ですから、水のやうすで渡し賃が違いますよ、二尺五寸が普通です。それが膝通水と云ひまし

て、それから増と股下通水、股通水、その上が帯下通水、帯通水となります。なほ増水すると帯

上通水、乳下通水、脇下通水、さうなると川止となります。永い川止をくふと旅の人は困ります

よ、用が遅れて金がかゝりますから、エ、芭蕉とか云ふ名高い人の句に、

「川原の舟は、舟の心細いなア、ア、渡る〜、増水してゐるやうだ。御隠居さん、ごらんなさい。川會所の役人衆が見張つて居るでせう。毎朝お役人が川原へ出て、水の深さを計るんです。何しろ流れが早いし、時々出水がして來るので」

「成程」

「ですから、水のやうすで渡し賃が違いますよ、二尺五寸が普通です。それが膝通水と云ひまし

て、それから増と股下通水、股通水、その上が帯下通水、帯通水となります。なほ増水すると帯

上通水、乳下通水、脇下通水、さうなると川止となります。永い川止をくふと旅の人は困ります

よ、用が遅れて金がかゝりますから、エ、芭蕉とか云ふ名高い人の句に、

「川原の舟は、舟の心細いなア、ア、渡る〜、増水してゐるやうだ。御隠居さん、ごらんなさい。川會所の役人衆が見張つて居るでせう。毎朝お役人が川原へ出て、水の深さを計るんです。何しろ流れが早いし、時々出水がして來るので」

五月雨の雲吹き落せ大井川。とやつたさうで、芭蕉宗匠も困つたのでせう』

『ウム成程、名句であるのう』

覺さんも老公に向ひ、

『川越人足が、旅客を一人操なして流すやうな場合は、人足七人の罪となります由、其くらゐに厳しくして置かぬと間違ひが多いでせう。大井は川の上より底の方が流れの早いと聞きをります。箱根と共に要の場所にごさいます』

『私承はりますれば、寛永三年に三代將軍家光公が京都に御上洛の際、御舍弟駿河大納言忠長卿は、この大川に船を並べて浮橋を御造りになり、御迎へ申上げたる處、御供の諸大名は非常に感心なされた由、然るに家光公は御怒りになられ、箱根大井の兩嶮は關東第一の要衝なり、それを知らずや、往來の自由を得さしめるとは言語同斷なり、と仰せられましたと拜聞いたします』

『左様である。御用意の御言葉、私も拜聽して居つた。實に要衝の地である』

其處へ人足が来て、一人を四人で乗せる蓮臺渡して、ザブ／＼／＼、どっこい／＼、どっこい／＼、と人足は聲を揃へて調子を取り、金谷の河原へ渡られました老公は、長吉が一番先に立つて、遠州金谷の驛に着きました。先に行く長吉が聲をかけ、

『御隠居さん、珍らしい張紙が出て居ます。あの宿屋です。尾張屋金兵衛と云ふ家です』

『どれ、何處に』

と、見れば、大きな旅人宿の入口に、

(今ばん 話 あり)

十四五人が、この下げ紙の文字を見て、話をしながら、

『今夜また聞かせて下さい。楽しみにして居ますから』

『ア、皆さん早く入らつしやいよ』

尾張屋の若い男が顔を出して、挨拶をして居ると、また七八人來て入場を頼んで居る。

『尾張屋へ泊りませうか、如何でせう話と云ふのを聞きたいなア』

介さん覺さん庄太郎まで、話の文字を見入つて居りますから、皆が聞きたいなら私も聞きませうと、この宿屋に御遣入になつた。

『入らつしやまし。御早い御着さまで』

宿屋は程なく満員となる。後から來る客を断はると、話だけは聞きに来るから頼むと、約束をして他の宿屋に泊る旅人が可成りある様子。皆尾張屋の客は入浴をすませ、食事が終ると廣い別間に這入つて行く、

『この先生の話を聞いたら、堪えられない。宜い時に泊り合せた。話の名人だからねえ』

『傑い學者で、何を聞いても直ぐ教へてくださる。面白くつて爲になる話をして下さるから大した先生です』

『本當です。諸國を話で廻つて居なさるのださうですね』

『併し、當分は遠三兩國を廻つて頂きたい』

『全くです。遠州三河だけで年中話を願ひたい。特に金谷の近所に居て頂きたい』

御隠居の五人連れは座の中程に座つてこの話を聞いて居ると、後から後からと席は一杯となつた。旅の人々や、近所の人達で、廣い座敷を開け拂ひ、縁側までぎつしり詰つた。

『先刻、尾張屋さんに聞いたら、今夜の話は尾張屋さんの由來を御話して下さるのだと、然う云つてゐたから、何んな話でせうなア』

『へエ、尾張屋さんの由來と云ふと』

『何んでも、尾張屋と云ふ屋號の出來た由來だといふことで』

『介さん、よく這入りましたねえ、私は、千人ぐらゐ居ると思ふが何うでせう』

『サア、夫程も居まいが、七八百人は居るやうだね』

『然うでせうか、一杯這入つたなア』

ところへ、若い男が二人出て、一段高く座を造つて、上へ机を置く、座蒲團を敷き直す、正

面へ大きな張紙を下げる。それに書いてあるのを見ると、

今夜の話、尾張屋の由來、一心堂文山

一同はこれを読むと、こやく／＼と話あいました。中にも熱中して居る人々は、口々に、

『ソラ、文山先生が出なさるぞ、尾張屋さんの若い衆、もう始まりますかね』

『直ぐですよ、ア先生が見えましたよ皆さん』

ところへ静かに出て來た人は、紋付き袴、四十二歳か、色白で目の細い背の高い上品な態度

一禮して高座に上り、頭を机の上に向けて、呻に挨拶をした。

『先生、毎度御苦勞様です。今夜はまた御聞かせ下さつて有難う存じます』

『文山先生、御願ひ申します』

皆一同が挨拶をする。御辭儀をする。老公も會釋をなされて御聞きになる。

文山は一座の人々を見廻して、

『さて皆さん、今夜の御話は、尾張屋さんの先代、今の御主人の御父さんの美しい心持が根元で

尾張屋の屋號が生れて來る、義理人情の美談であります』

座中はシーンと、水をうつたやう、咳する人もなくなり、文山の顔を見詰めて居ります。尾張屋は下を向いて、熱心に聞いて居ります。文山は高聲となり。

「人は謝するの禮と云ふ事を、忘れては不可ません。報恩といふことも忘れてはなりません。よく忘れる人もあるとのこと故確かり申します。皆さまは忘れるやうな人では無いが、若し心得違ひの人を見付けたら、よく意見してあげて下さい。御話は、この二つが眼目であります。御婦人方や子供さん方も多く見えますから、判りよいやうに、身振り、手真似で面白く話しますから、遠慮なく笑つて聞いて下さい。其笑ひの中に謝するの禮と、報恩の四字が現はれて來ます。サアこれから辯じませう」

「先生、どうぞ御願ひいたします」

文山先生の雄辯に釣こまれて、思はず返事をする人々がありました。またシーンと聞いてをります。

「遠江の國金谷宿に、尾張屋と云ふ屋號を、尾張大納言様より、當家の先代が御許しを頂いた事は、實に有難いことで、此家の譽であります。其處が、尾張屋の由來なのです。何うして給はれたでせうか、

皆さん、今から五十餘年前、先代が未だ四十幾つと云ふ盛り頃、夏の初めの或日、金谷の河原に行かれた。それは島田の宿に用事のため、川を渡らうとすると、旅客や人足達が大變だア、御侍さんが川へ落ちた。増水だから助かるまい。可哀さうに、ヤア、今の若

侍は蓮臺返しを喰つたのだ、流れたくくく、

ワア、混雑の中にも川役人は血眼になつて、早く助けて上げやう。人足達は總掛りで行け、萬一の場合は役目として申譯が無いぞ、早く御救ひ申せ、口々に聲を張上げて駈まはる其時、先代の金兵衛さんは、見るくうちに見當を付け、衣類を抜いで裸となりザブン、馳け行くなり水煙りを上げて、ザブ、ザブ、乳下増水の中を探し廻ると、目の前に流れて行く人を見付けた。人足共も同時に見付け、力を合せて抱あげると、氣を失つた若侍の様子、

救けたよ、御侍だぞ、

人足達は呼び立て、金谷河原に上つた。藁火を焚く者がある。侍の衣類を抜がせる。薬を持つて來る。金兵衛さんが手傳つて侍の全身を撫さすり、口中に薬を入れて介抱すると、

「ウ、ウーン、と息を吹返した。氣が付いた、しめたく、御役人方、もう大丈夫ですよ、御安心なさい」

「然うか、まア宜かつたなア、皆御苦勞々々々、オ、金兵衛さんか、御骨折であつた。これで我々も役目の落度にならずに済む」

「且那方も御心配でしたらう」と金兵衛さんは衣類を着ながら侍の様子に目を離しませんでした。そこへ、蓮臺を落した人足四人が悄然として、引かれて來た。

「御侍、もう大丈夫でござる。御氣を確かかり御持ちになつて、直ぐ御恢復になりませう。いま此處へ連れて來ました奴等が、蓮臺を落したのです。重罪にをこなひませう。行き届かぬ段、川役人として平に御用捨を願ひませう。ヤイ四人の奴等、何んと云ふ間拔な事をしたのだ、旅人一人を流せば、七人の下手人を出さなければ濟まない御規則を知つて居ながら、重い罪は覺悟をして居ろよ」
「何うか御勘辨を願ひませう。左の足を、水底を流れる石に爪づき、御存知の水底の方が急流だもんで、石をごろ／＼流すんですから、ハツと思つたが肩が下つて、落して仕舞つた。申譯ないことです。御輕くなすつて、へい、四人とも御願ひです。これからは氣を付けませうから」
此時侍は顔を少しく上げて、「御役人方、其人足共を御調べください。蓮臺を無理に引落して拙者の足を引き、水中に突き入れました」

「何んと、夫れは間違ひでござらぬか、ウーム」
「旦那々々、違ひませうよ、御役人方、御侍の考へ違ひですよ、そんな馬鹿な事が出来るものか、なア兄弟」
「然うだとも蓮臺返しばかりは出来ねえもんだ」ところへ一人の足が出て、
「御役人様、先刻この七助と旅侍が話をして居ました。すると旅侍が居なくなつたら、此奴がニコ／＼して六番の小屋へ這入つたんです。と今此騒ぎです。變だなアと思つて、六番小屋の内を見たら、七助の荷物の中からバラ／＼小判が落ちたんです。下帯が五六本這入つてゐる荷物

を見て遣つたら、紙包みが破けて小判が、だから御届けに來ました。小判は無くなると不可ねえから皆んな持つて來ました。七兩あります」
「さうか、宜く氣がついた……。こりや七助、此金は何處から這入つた。其侍は誰だ、云へないか、なぜ黙つて居るのだ、何うしても云はないか……」
怒る役人を、金兵衛が宥めて、「お前達四人は、御手敷を掛ないで、白狀をしなせえ、其旅侍と黄金と此御武家、誰が考へても蓮臺返しと判断するねえ、何程剛情を張つても隠しきれない。私も願つてあげやう軽くすむやうに、白狀して御慈悲を願ひなせえ」
四人はべた／＼と頭を下げ、「相濟ませせん。恐入りました。蓮臺返しに相違ありません。ア、悪いことをしました。金兵衛旦那、御役人さま方にも、御侍さまにも謝つて下せえ、悪い事は出来ねえものだ」
役人衆は膝をすゝめ、「さ、申立てろ」「へい七助が申上げます。私が小屋の外で客待をして居たら來た人は六年前肥後の熊本で知合、私が彼地へ行つた時下男をつとめた。大館七郎右衛門と云ふ劍術の先生でした。すると其旦那が、七助、折入つて頼みがある。聞いて呉れ、今後から來る武士は拙者の伯父の仇である。仇討したいが勝つ見込が無い。卑怯のやうだが計略でやりたい。大井川の真中で蓮臺返しをして殺して呉れ、脇下通水ぐらゐ増水して居るやうだ、きつと遣れるよ小判を二十兩出したのです。それりや駄目です役人衆の見張がある。それに蓮臺返しが見えたら、四人共命が無いと断はりましたら、なに大丈夫だ過失であつたとすれば五六日休ませられ

叱言で済む。上手に遣れば判りはせぬ、と黄金を懐中へ入れられて、面目ないが兄弟分三人に力を借りました。私が悪いんです」この調べを聞いて居た侍は、ズート起上るから「御無理をなさらぬやうに」「ハイ、其熊本の侍のもう一度姓名と、行く先を聞きたく存する」「ハ、これ七助熊本の侍の今の住所と姓名は何んと云ふのだ」「へい、これから信州上田へ行く、其次は越後の高田から長岡の方へ行くのだと云つてました。大館七郎右衛門です」「ウム、さうか、御聞きになれましたか如何です」「ハイ判りました。ア、残念、その大館こそ拙者が永年尋ねる恩人の仇敵に先へ顔を見られたのであらう。斯うした悪計に落ち入つたものか、ウム、各々方、種々の御厚志、御世話になり有難く存する。厚く御禮を申上げる。仇討の後ち改めて御禮を申述べに参ります。さらば御免」と立上つたがよろ／＼、川役人は左右から「オット危い夫れは御無理だ先づ／＼安静なさらねばならぬ」「ハイ御親切は感謝仕る。されど仇を逃しては」とまた立上ると金兵衛が其手を取り「先づ御待ちなされませ、御役人方の御言葉通り、其御體で行かれたら仇に會つても返り討におなりでせう、御残念でも一ト先づ私の家へいらつしやい、金谷宿の宿屋です。宜い御醫者さまも居りますから、充分療治をなすつて、元の元氣になられて御立ちなさい御全快迄は幾月までも御世話いたします。斯ういふ時は悠くり氣を御待ちなさいまし、急がば廻れ、延びるものは先づ縮んでかゝれと云ふ譬喩がございます。御役人さま方と、私に御任せ下さ

い、ハイ／＼、御任せくださる、然うですか、心得ました。御役人方、では私方へ御連れ申しませす」

『それは安心だ、金兵衛さんに頼んであれば何分宜敷御願ひ申す』『ハイ承知いたしました。オ、イ人足衆、その大きい連臺へ御乗せ申して下さい。寝かせてあげるので、四人直ぐ間に合はな

いかね、何、三人だけ、宜ろしい私が一方擔ぎませう。早く御醫者にかけて、安静させてあげたいオット合點だ、ヨシツ擔ぐよ、ウムム、大丈夫だよ、早くだが揺振が少ないやうに、靜かに靜かに』と、人足たちに注意をしながら、トツ／＼、トツ／＼と擔いで行く、金兵衛の全身から、熱と情の汗がたら／＼、と斯う讀みたてる途端、聴衆は熱して、『金兵衛さん傑い』『金谷の名物だ』『金兵衛さん、えらいなア涙が出た』『感心な人だなア』『尾張屋さん、良い御父さんを持つたなア』『かういふ人が出て、俺達迄肩身が廣い』ウワーツ、ウワー、自然に揚がる感激の聲は、文山の雄辯熱辯に、金兵衛の人格情味が目前に現はれたやうに、再生したやうに聞こえたので皆引き付けられた聲でした。御聞きになつて居られた御隠居も、思はず膝をうつて御感心、御供の五人も感じ入り、長吉等は唸つて居ました。

喚聲の靜かになるを待つて文山は『さて皆さん、金兵衛さんは一ト方ならぬ親切にて、この侍を世話をしたのです。二ヶ月程も病となつたが漸やく全快したこの侍は、薩摩の島津様の家來で

浪人中の佐野清連と云ふ人でした。恩人鴻田傳吾右衛門と云ふ細川様の御家來を、討つて逃走した。大館七郎右衛門と云ふ悪人を尋ねて歩行うち、此難にかゝつた譯でした。感涙を流して佐野が出立すると、それから三月程して、尾張大納言様から御呼び出し、何事かと心配しながら御伺ひしたところ、何んと皆さん、大納言様の御目通りを仰せ付けられ、尾張屋の屋號を御許しになり、金一封を給はりました。金兵衛さんは夢の様に喜ばれました。だが、何うしてこの譽があつたかと申すに、佐野鹿十郎清連と云ふ方の義兄が、吉田周一郎といふ人で、其所へ書狀で金兵衛さんの親切を知らせたのでした。それを御主人大納言様へ言上したのです。どころで尾張様が、感心な金兵衛を御褒めになり、何か印を與へて、多くの人に親切情味の手本を、後々迄残すやうにと、尾張屋を給はつた次第です。これが由來なのであります』

『ウーム、成程、さうですかい』

『へエー、尾張屋の由來、大したものだなア』

『立派な屋號だなア、恐入つた』

また、満場は聲がなかつたが、互に制止あつて居ました。文山はまたも一段と聲を高めて、

『モウ一つ感心なのは、佐野氏は未だ二十五六歳であつた若いのに、入牢して居つた四人の人数を、御役人に願つて助命の手續きをと、意見を以て眞人間に改めさせ、お金を遣つて農業につ

かせたと、然うして行く先々からも、仇討の後も當家に永年禮狀を寄せられたと、私も見せて頂きました。皆さんも後で悠くり見せてお貰ひなさい。情は人の爲ならずと申すが本當です、世の爲、人の爲、皆さんも、金兵衛さんのやうに心掛けて、良い事は必らずやつて下さい。今夜はこれで終りと致します』

ワァー、と聲があがつた。尾張屋の主人が出て『先生、有難うございました』と挨拶すれば、『文山先生、有難う存じます』『御苦勞さまでございました』『私の村へも來て下さいませ』『御待申して居ります。御出でを願ひます』『また御近いうちに願ひますよ』

一同は、挨拶をしてぞろ／＼席を立ちます中に老公は、

『介さんや、覺さんや、感心しましたな、満場の人々が、斯くの如く感じて居ることは、イヤ恐入つた。初めて見ました。斯う云ふ會合は』

『ハ、左様で、私共も始めてございます』

『皆さんと同じで、長吉もすっかり感心して居ります庄太郎と……』

『面白くて爲になる、良い話を文山さんのやうな名人が話すのですから、感銘深い譯です、かういふ人々に廣く話してもらいたい』

『御尤、では座敷へ参りませう』

『参らう、長吉さん、何うだね御話しは、面白かつたねえ』
『へエ、モ一一度聞きたいと思ひます。涙が出ちまいました。大きな聲では言へねえが、川越人
足は俺のやうだ、佐野と云ふ侍は、御隠居さんの役廻りだ』
『さうだね、御隠居さん、感じやすい長吉は泣いて居ります』
『さうかい』

座敷へ御這入りになると、女中が来て、

『御隠居さま、文山先生が御目にかゝりたいので、直ぐ御伺ひをしても宜敷うございませうか、と
申されますが』

『ハア、さうですか、御目にかゝりますから御出でなさいと云ふて下さい』

『ハイ』

と女中が出て行きました。皆が御隠居に口をきかうとする處へ、

『御免くださいまし、一心堂文山でございます』

『サア、遠慮なく御這入りなさい、何うぞ』

『ハッ』

文山は頭を下げて、静かに入りて後を見返り、両手を付き、疊へ頭をピッタリ付けました。

『オヤ〜〜』

長吉が思はずいつて、口を押へ老公の御顔を見ました。

『文山先生、さう叮嚀では困ります。頭を上げて下さい』

『ハッ、恐入ります。水戸の先様と拜見 仕りました』

『イヤ〜、違ひます。私は常陸の天神林の百姓ですよ』

『御言葉返し恐入りますが、私は江戸本郷の森川に住居して居ります。讀書、書道の指南を致
しますもの、關根内記と申します。感ずるところ有まして兩三年前より、巡國をなし御聴を給は
りましたる如く、行く土地に語りをります。御老公の御顔は、本郷よりは近い小石川のことゝて
御散歩の折柄を、御拜顔を度々 仕りました。内々の御旅行の御事を拜聞いたしをります。失禮
ながら御目通りを願ひ、御機嫌伺ひの御挨拶と、御聴きを給はりました御禮を申し上げたく罷り
出でました』

『左様か、それはよく来て呉れました。良い話しをしてくれて、結構でした。此先も充分話して
下さい。御頼み申します』

『ハッ、有難き御言葉を給はりました』

『イヤ〜、隠居の旅ですから、友達と思つて下さい』

と四人を紹介なさる。

『御隠居様、御道中の御供に御加へを願ひたく存じます』

オヤ／＼、また御供が、と、長吉は妙な顔をした。

『折角ながら、私等は御別れをします。文山さんは、何處迄も話しを續けて行つて下さい。隠居が御頼み申します』

『ハイ』

そこで文山は、翌日御名残り惜しげに、一日御話しのお相手をして別れました。尾張屋でも内々知りまして、御取持をなすのを、會釋遊ばし、さて金谷の宿を御立ちになりました。

ところが、時々長吉の居なくなる事がありますので、

『長吉さん、折々何處へ行きますな』

『未だ長吉さんと、何んぼ御優しくつても困りますねえ、御隠居さん私が居なくなるのは、元の仲間を見付けると、意見して改心させるんです。見込みの無い奴は、御役人に引き渡すんで、これも私の仕事の一つで』

老公も合點をなされた。日坂、掛川、見付、濱松、舞坂、新井、白須賀、二川、吉田（現今の豊橋）、御油、あか坂、藤川、岡崎迄、泊りを重ねて来る中に、庄太郎も一行の溫情に引付けられ

いつ迄も御供をしたいと喜んで、すつかり馴染でしまいました。

三河の國の岡崎へ着きましたは、正午を少し過ぎてゐました。本町の手前にみへた茶亭に休み團子を食し茶をのんで居ますと、茶亭の老婆が御顔を見て、

『御隠居さん、御見物ですかね、四人さんでは賑やかで宜いなア、一昨年わたしは一人で上方見物をしたが、連が無いと淋しですよ、旅は道連と云ひますでなア』

『さうだねえ、お婆さんは一人で行かれたとは達者ですな、幾歳におなりだ』

『もういけませんよ、七十を出ましたよ、でも足腰が丈夫だから、今の内にと出掛けましたが今年なら駄目ですよ、一二年でめつきり違つて来たやうですよ、御隠居さんも今の内ですな、折角來なされたのだから岡崎屋さんのお庭を見せてお貰ひなさい。未だ見ないでせう、夫れとも見ましたかね』

『イエ、見ませんよ、それは宜いことを聞きました。何處ですか、其家を、おしへて下さい、見せて貰ひませう、のう皆さん』

『結構です。参りませう、お婆さん、其家は遠方かい』

『イエ／＼、直ぐ其處ですよ皆さん、この先を一丁ばかり、岡崎屋清兵衛さんと云ふ、大きな宿屋さんです。大きい看板が出て居ますから目につきます』

「餘つ程宜い庭かい、私も庭を見るのは好きだ、誰にでも見せるかい」
「頼めば見せて呉れますよ。何しろ近江八景をお庭にしたのだからねえ御客さん、近頃は餘り見せないやうですが、申食でもして御頼みなさいよ」

「有難う、早速行きませう」

茶代をおいて此家から一丁程来たると、

「御隠居さん、彼家です。岡崎屋だ、立派な宿屋だ、成程大きな家だ」

長吉が大聲に云ひますから御隠居は、介さんに頼んでお呉れと云ひ付けられる。介さんは道中笠を左に下げ、岡崎屋の入口に立ち。

「お頼み申します」

「ハイ」

横の入口にある暖簾を分けて、若い女中が頭を下げた。

「私共は五人連の旅の者ですが、いま聞いたところ、お宅の御庭が結構ださうで、何うぞ見せて頂きたいと御願ひに來ました。それに中食を御頼み申します」

「さうですか、あの御中食は近頃休ませて頂きますので、それに庭の御見物も御断りして居りますが、少々御待なさいませ、番頭さんと呼んで來ますから」

云ひながら、女中が奥の方へ這入ると入れちがひに、四十前後の男が出て、

「エ、御庭見物ですか、折角ですが、近頃は月に二度づゝ御見せすることに致しまして、其他は皆さんに御断り申して居ります。實は、見物の方が花をもらい、木の枝を折つたりする方もありまして、中には植木の鉢を持つて御歸りになった人もあります。庭を荒されますのを主人が嫌ひまして、へい、もう前には毎日御道中の方にも、何百人となく御見せして居りましたが、然ういふ譯で一切御断りして居ります。御一人でも御見せすると他の方々が、己達にも見せると直ぐ聞き傳へて御見へになりますから、どうぞ御用捨を願ひます」

「さうですか、心無い人々が多數ので困りますな、お邪魔をいたしました」

番頭は述べ終ると引込んで仕舞ふ。店の三四人は急がしさうに働いて居るので、話しの仕様もなく、老公のところへ引返し、

「見せて呉れませんさうで、一月に二度見せます外は、何人でも一切断ると番頭が申します。聞いて見ますと無理もございません。庭を荒破つたり植木鉢を持って歸るのもあるさうです。残念ながら断られました」

「植木鉢まで盗みやアがる。情ねエ野郎だなア畜生奴」

長吉がボン／＼云つて怒るので、皆笑ひ出した。やがて老公は、

「介さんや、私が行つてもう一度頼みませう」

と岡崎屋の門に立たれて、暖簾の中へ聲をかけられた。

「モシ、一寸御願ひ申します」

「ハイ、何ぞ御用で」

女中が出て、返答をしながら老公と、後ろの介さんを見くらべて居る。

「我等五人、御手数ですが中食を御頼みいたします。夫れから結構な御庭を一度見せて下さい。

何うぞ宜敷」

断はらうとした女中が、御顔を見ると口ごもり、云ひ出し兼ねてか、

「あの、番頭さんに申しますから、少し御待ちなさいませ」

と奥へ入り、

「番頭さん、今の方の御連が来て、また中食と御庭を見せて呉れといつてますから、出て下さい」

「御断りすると云へば宜いのに、役に立たないア、御客さまがおいでに成るので、多忙のに」

「でも、中々歸りさうもないので、断り兼ねましたものですから」

「断つて来る。一人でも見せると他の人に悪いぢやアないか」

ぐづぐづ云ひながら番頭が店先へ出て、

「御庭を見たいと仰言る御方は」

「私です。番頭さんですか、宜いお庭と聞きました。國への土産話しに、一寸見せて頂きたい」

「それが」

断らうと番頭が、正面から御顔を見ると、軽く頭を下げてニッコリ、笑をふくまれた温顔に、

長い白鬚を左の手にしごかれ、番頭の顔を見られたので、思はず頭が下つてしまひ。

「へエ、宜ろしうございます。實は皆さまに御断りして居りますのですが、内々で御見せ申しま

すから、貴方がたも内々にして下さい。御中食ですか、何んとか致しませう、五人さんですね、

今御案内しますから、少々此所で御待ちなさい」

番頭は中へ入り、額の汗を拭きながら、

「断りきれないよ、上品な御老人だから、それに中食を五人前、仕方がない受合つた。頼むよ、

おしんどん、笑ふなよ」

「番頭さんは、役に立ちますねえ、私だつて断れなくなつたのですよ、私は叱られちやつて、ホ

ホ、、、」

「濟まないく、何としても優しい言葉の人だ品の好い、私が案内して来よう。受合つたからに

は」

と、帯をしめ直して、出迎へました

「お待遠さま、サア御案内を致します。後ろの方一度御断りをしました。折角の御頼みですから御見せ申します。貴方には御断りして済みませんでした」

「どうしまして、隠居さんが御喜びで私等も喜こんで居ります」

「番頭さん有難う。それでは行きませう」

「サア何うぞ、此方から、草鞋をぬいで、草履を穿て下さい。御荷物はお預かり致します。おなべどん、皆さんの御荷物を御預かりして」

雄辯で親切に、説明しながら案内をする番頭の後から御見物、廣い庭園の見事なこと、風流雅味良く行きとゞいた名庭園に、老公初め、長吉や少年迄も我を忘れる程見入つて居ります。得意満面の番頭が、

「宜ろしいでせう、御氣に入りましたね、あの松は、紀州の那智山の下から出入りの植木屋が木の時持つて参りました。それが立派に育ちました。あの楓は珍しいでせう、向ふの杜若が能く咲きますよ。蘭に南天ハツ手の邊、池の橋は寒國の谷間の杉で造りました。柱目が小細かいでせう。石燈籠の数を、何れも自然の味が出てをるところを御覽下さい」

「ウーム、成程」

「次へ参りませう。これから先が近江八景をとり入れましたので、唐崎の一ツ松、瀬田の長橋、石山の月、比良の雪、三井寺の鐘、堅田の落雁、粟津のせいらん。この琵琶の湖水の景が、どれも實物そっくりです。主人も植木屋さんも庭師も、永年苦心をされました」

「ウーム、さうでせう、宜く寫しました。有難う、思はず目に正月をさせました。皆んな何うですな、結構ですね」

「左様で、只々感じ入つて居ります」

「隠居さん、宅へ歸つたら、斯ういふ庭をお造りなさいませんか」

「アハ、、、長吉さんは大きなことを云ふ」

ところへ女中が向ふから手を振つて、

「番頭さん、旦那が御呼びですよ」

「直ぐ参りますと、然う申しておくれ、……では御隠居さん、私は旦那の座敷へ行きますから、今の道から木戸を出て左の方が中食の座敷です。皆さんも判りますね」

「ハイ判ります。もう少し拜見します。御世話でございました」

「庭も良いが、番頭も良いなア、話が上手で親切で……そろそろ行きませう御膳が出て居るやうですぜ」

『長吉さん、庄太郎さんと、先へ中食をしなさい。私等は一ぶくして、直きに行きますから』
『さうですか、では御先へ、庄太郎さん行かう』

老公は飛石傳ひに、座敷の縁側に腰を下ろされる、向ふの煙草盆を、介さんが引き寄せると、御腰の煙草入をとつて一ぶくなさるところへ、最前の女中が来て、

『皆さん、其所へかけてはいけませんよ、程なく御客さまが御出でになりますから、まア、煙草盆が、御客様に支度をしたのですのに、先生様がおこしになるので、只の御方とは違ひますからねえ、御連さんが待つて居ますよ、早くあちらへつ行て下さい』

女中は懐中から手拭を出して、煙草盆を拭いて、灰ならしで元のやうに直して居る。

『女中さん御手敷をかけました。もう少々休ませてもらいたいですが、御客様では仕方がない。サア覺さん、介さん行きませう』

『ハイ、女中さん御客様は多數かね、今夜一と夜私達五人泊れませんか、隠居さんが氣に入りましたので』

『お氣の毒さまですが、此處四五日は一杯で皆さまへ御断り申して居るのですから、夫れに今夜は名古屋の名高い學問の先生が御泊りになりますので、今おいでになる先生です此御座敷へ』
これを聞いて覺さんは、一ト足前へ出た。

『女中さん、名古屋の先生とは何と云ふ御方だね』

『御名前は、尾張名古屋の大納言様の御家來で、エ、白井正齋先生と聞いて居ます』

『ハア、白井先生が、今此所へ來るのですか、ウーム』

『御客さんは知つて居る御方ですか』

『イヤ、御名前だけ知つて居るのだ』

『さうですか、早くあちらへ、そろ／＼御見えになりますよ』

女中が行く後ろ姿を見送りながら、顔を見合せて老公は、苦笑なされた。

『妙なことになつたのう、偶然ぢやな』

『不思議な廻り合せと申しますか』

『面白いことになりました』

『出先でも宜い、一寸會ひませう』

そこへ番頭が来て、

『お早く、女中から聞いたでせう御客さん、オヤ、御隠居は御辭儀をなすつて、そんなに御禮を

云はないでも宜いですよ、彼方へ』

『それから番頭さん、白井先生がおいででさうで、今夜御泊りですか、有名な學者だが何か御用

で岡崎へ見へられましたかね」

「エ、昨年から先生へ御願ひして漸く御出が願へたのです。岡崎の舊家が相談をして、五軒ばかりで、書き物を願ふのです。先づ宅の表看板を御書きくださるのが初めです。その御座敷で願ふので、御名筆ですからねえ」

「さうですか、番頭さんもう一ツ御頼みがあります。決して御邪魔にならぬやう、氣を付けますで、白井先生の御書きなさるところを、こゝらの隅で見せて下さい。國への土産話にしたいのです」

「折角ですが、計ひ兼ますねえ、旦那に叱られますよ、若し先生の御目障りにでもなると、私が困りますから」

「イエ、充分注意をします。番頭さん何うぞ御願ひですから計らつて下さい」

と、ニッコリ御笑ひになつて、頭をお下げになると、番頭は目を丸くして、

「困つたなア、だが御隠居さん。貴方に頼まれてニッコリ笑はれると、私には何うも断り切れなのです。不思議だなア、宜ろしい引受けませう、ですが御目障りにならないやうにして下さい。御兩人さんも氣を付けてね、間違ふと私が大變迷惑をしますから」

「心得ました。有難ふ〜」

「エ、蘭と南天の間か、八ツ手の後がいゝかな、御目に付かぬ處へ隠れて拜見なさい」

「ハイ、ハイ」

番頭が行くと、介さんは早くも中食所へ行つて、長吉と庄太郎に告た。迎ひに来る迄此所に居るやう云ひ付けて元の庭へ引返し、老公を中に、兩人は左右に、木蔭に隠れて正齋を待たれた。

「来ました〜」

覺さんの小さな聲に、ソツと御覽になると、羽織袴の四十年輩、立派な士が先に立ち、續いて二人、其中に一人先に來たのは主人らしく、次の二人は家來であらうかと思える。其後から七八人、紋付袴の町人風であるが、いづれも相當な人らしい。長い廊下を通つて正面の座敷につく、先に立つた案内役の人が、

「御多忙の中を恐入ります。何うぞ御席に、皆一同、先生の御尊來を喜びをります」

一同が平伏すると、先生と云はれた人は、軽く會釋をして、

「毎度御使を受けても、何に致せ多忙のため今日迄參ることが出来ぬのでした。幸ひ御許しを頂き、二三日は滞在が出来ますので、御伺ひ致した。書けるだけ書きますから、御遠慮なく御出し下さい」

「有難く存じます。今夜は私方に御一泊を願ひまして、明夜は隣家の山屋さんへ、次は三河屋さ

んへ御案内を、拙宅の看板を御願ひ仕ります。先生の御染筆を當家の寶物といたしまする考へ
でございます。ねえ皆さん』

『左様です。白井先生の御筆を願へますことは私共の譽で、一枚も多く御染筆を給はり度存じま
す』

『イヤ、左様に申されては、併し大いに書きませう……、オウ、宜い庭園でござるのう、幾年ぶ
りですか、益々雅味が加はり。實に天下の名庭園でござる』

其處へ女中が三四人、茶菓をはこんで給仕をする。

『それでは、書きませう』

『直ぐ願へませうか恐入ります。では仕度を致します』

主人の差圖に、毛氈を廣い座敷の真中に敷き、其上に櫛の看札板を置く、

『これは立派な板ぢや、厚みもあり丈も長く幅も廣く、見事なものだ、のうお前達』

『ハイ、御見事であります。先生墨を下ろしませう』

門人と見えて兩人とも慣れた手付きで硯に墨を下ろし初めました。

『先生、斯う御書きをねがひます』

『ウム、承知しました。表を隷書に、裏は草書に、諸國御旅人宿、岡崎屋清兵衛と、よろしい』

『先生、墨はこのへんでは如何で』

門人が出だす、墨色を白紙に試して、太い唐筆を右手にとりて、字配りを見定め、

『よからう』

『オ、書きますく、御目がとゞきますか』

介さんが御耳に口を當てるばかりにして、

『ウム』

居並ぶ人々は、白井の筆法に注目なす。正齋は見事に筆を走らせました。流石は尾州家の學者
書道指南で名高い書家、書き上げました看板を見て、其出来ばえに得意満面、

『如何でござるか』

『御見事であります。有難く心得ます。實に結構に存じます』

主人は大喜び、皆一同感銘した途端、

『ア、下手ものだ』

と、四方に響く高聲を上げられた。

『何んと』

正齋が呼ばると、門人二人は立上つた。主人を初め一同は、立て膝をして庭を見た。

岡崎屋は老公を見付けて、庭へ飛下り驚ろきの目を見張り、

「お前か、今の聲は」

「左様」

「呆れた老人だ」

一同も庭へ下りて、老公の廻りを取巻きました。

「お前は何處から此所へ来た。誰が許して庭へ入つたのだ」

怒りの聲を聞かれても、ニコ／＼と御笑ひになつて居られる。

「オ、番頭を呼びな、女中達も来い。番頭は皆んな来い」

一番番頭は驚ろいて、ブル／＼しながら、

「へ、旦那申譯もございませぬ私が入りましたのです」

「定吉、お前は何をすの、場所もあらうに、此様な老人を何うして此所へ、先生に申上げやうが無い」

「御勘辨下さい。此んな事になるとは心得ませぬで、イエ御庭を見せて呉れ國への土産にするか

らと申しますので、見せてやりましたら、丁度先生の御出で、御書き物をも見せて頂きたいと頼

まれました、私が不注意でした。斷り切れずに、御目障りにならぬやう充分申して置きましたの

に、今談判します。御詫をさせます故」

と番頭は泣き聲を出して老公に向ひ、

「オイ、此處へ出て呉れ、私の迷惑を何んと思つて居る。あれ程云つて置いたのに、兩人も付い

て居て呆れた人達だ、サア先生に、旦那方にも、宅の旦那にも、早くお詫をしなさい。然うして

直ぐ出て行つてお呉れ」

「番頭さん、御心配をかけて済みませぬ。餘り下手ので思はず出た言葉が」

「また、また、さ、出て行きなさい實に困つた人達だ」

「まア、心配なさるな、だが番頭さん許して下さいよ」

「私に詫なくつても宜い、先生と旦那にお詫をして」

「其御詫なら出来ませんよ。詫る譯がないからな、アハ、、、」

「笑ふどころぢや無い、圖々しいにも程がある」

「定吉、もう物を云ふ事は無い、皆んなに手傳はして追ひ出さない」

正齋は、飛下りやうとする門人をとゞめ、大刀を左に下げて縁先にすゝみ、

「老人、お前は正氣か、それとも狂人か、答へて見ろ」

「これは白井先生か、妙なことを聞きますね、私は正氣ですぞ」

「ウム、夫れなら皆さんが良く書けたと云ふ中に、お前一人がなぜ下手と云ふのか」

「他人は別だ、私は下手と思つたから言ひましたよ」

「ウム、無禮な奴だな、コレ／＼、其處に居る兩人の男、お前達が付いて居つて、なぜ云はせた」

「ハイ、隠居さんの言葉が尤だと思ひますから止めませんでした」

「何んと、揃ひも揃つた奴等だ、夫れなら老人に聞かう、此父字の何處が下手のだ、さア云ふて見ろ」

「何處と云つて、皆下手、一字も宜いところが無い、夫れでも正齋先生は學者か書家かね、ハ、ハ、」

「何を笑ふ、只下手では判らぬぞ」

「それなら云ひませう。文字の全體に品位がない。文字は人體を形ちつくと聞く、美筆に書けたやうだが人體と見る時は、氣品の無いやうに思ひます」

「何を」

「まア、御聞きなさい。白井さんは常の行跡は何うですな、正しいかな、他人から見られて、我家のこと等、後ろ指を差さるゝやうな事は無いですか、一家が納まらぬやうでは、他人に學問

文學のこと等、教へる力はありませんまい。書法においても同じこと、其筆法に亂れがある。老人の目には直ぐ判る。白井さんの文字がそれだ、遺齋さんが普通の人はちがひ、學者だ書道の先生だと聞くからには、拙いと云ひたくなる。云つて悪いなら、もつと良い文字を書いて貰ひませう」

此御言葉に、怒つて居た一同はシーンとした。

正齋は言葉が詰つて四方を見廻はしたが、また座をすゝめて、

「老人、拙者の文字に難を云ふなら、お前に書けるか」

「エ、書けますとも、白井先生よりすゝと上手に書きますな」

「然うか、ではこゝへ上つて書いて見よ、若し拙者程書けない時は、無禮討にするぞ」

「エ、御手打ち結構、書きませう。だが岡崎屋さん宜いですか」

「、、、、」

「御主人書かせてやつて下さい。御氣にいらすば削り直して、私が何度でも書きますから」

「そ、それなら書かせませう」

「ウム、老人上れつ、御主人の許しが出た。サア書いて見よ」

「さうですか、岡崎屋さん、隸書にしますか、草書ですか、行書にませうか」

『何うせ削るんだ。何んでも勝手に書くがよい』

『アハ、、、未だ立腹かな、番頭さんには済みませんなア』

定吉番頭は目を白黒させて居る。やがて老公が御上りになると、兩人も續いて上りました。筆墨を調べた御隠居は、太筆を取り直し、

『矢つ張り私も隸書としませう』

筆力鮮やかに、見る見るうちに書き上げられた。馬鹿にして居た一同も、次々に引き付けられる御言葉に、今はち一つと見詰めて居ましたが、其筆法にはアツと感じて、皆顔を見合せた。正齋も驚ろいて言葉もなく、暫く見入つて居りました。

御名筆も當然、明國の大學者朱舜水に師事なされて多年の御研究、これぐらゐの文字、サラサラと書き上げられた譯でございませう。

岡崎屋は、看板の正面にまはり、ちつと見詰めた。

『諸國御旅人宿 岡崎屋清兵衛』

『ウーム』

正齋に氣兼ねをしながら、思はず吟つてしまつた。

『正齋さん如何、御氣に入りませんか、裏と表を見競べて下さい』

『黙れつ、この無禮者、多少の文字を書くと雖、其方は身分の高下を知らぬ奴ぢや、百姓爺の身をもつて、尾州家の重臣白井正齋に向つて數々の雑言、これが無禮でないと云ふのか』

『ハア、無禮を云ひましたかなア、正齋さんは尾州家の重臣でしたかな』

『そ、それが無禮だ、白井さん、正齋さんとは何んだ、禮を知らざる奴は禽獸にひとしいと云ふぞ、其汝が書いた書法は、拙者が見れば亂れて居る』

『左様か、何んだか私の眞似をしなざるやうぢやな、白井さん、正齋さんと云ふたのが無禮ですかい。初めから然うはいはぬ。白井先生と云ひました。ところが、語つて見ると先生と云へなくなりましたよ』

『云ふな、重ねくの無禮者、身分の高下さへ判らぬ奴に、口を利くには及ばぬ下れ』

この問答をち一つと堪えて聞いて居た兩人は、餘りのことに堪り兼ね、

『白井正齋、下れつ、汝こそ、無禮此上も無い奴だ』

『何を申す、モ一捨置けぬ』

大刀を取つて正齋師弟が下りやうとするを、

『生意氣な奴等』

『ア、覺さん御待ち、話はこれからぢや』

「お捨置きを願ひます。コリヤ正齋、頭が高い下にをれつ、此御方を何んと心得る。水戸の黄門前の中納言光國公であらるゝぞ」

「ア、ア、」

驚ろいた正齋は、餘りのことに縁より飛下り地面へピッタリ平伏した。弟子の二人は氣も遠くなり、ハツと飛下りたが飛過ぎて、コロコロと転倒した。見れば正齋は大地に伏して比目魚のやうに、鰐のやうになつて居るから、二人は鯛のやうに海苔のやうになつて平伏した。

主人を初めとして、一座の人々夢のやうに思つてか頭を下げて言葉もなく、水をうつたやうに静かになつた。中に只一人少しづつ頭を上げかけたのは、定吉番頭でした。

正齋は恐るゝ頭を上げ、

「存ぜぬ事とて御無禮の數々。何と御詫の申上げやうもなく、此上は何卒御手討に遊ばされますやう。覺悟 仕りました」

地上に座して兩眼を閉じ、兩手を膝について首を延ばした。

「オ、宜い覺悟ぢや、併し、もうよいから此處へお上り、許しますから心痛せぬが宜い介さんも覺さんも許しておやり」

「ハイ、白井氏、話が判ればそれでよい。御言葉でござる御側へ」

「それは餘りに勿體なく」

「もう忘れなさい。さ、上りなさい」

正齋は悄然として、座敷の隅に座りました。

「ア、もし、岡崎屋さん、とんだ騒ぎで御氣の毒でした。皆さん、然う叮嚀では困りますな、サアもつと近く寄つて下さい。それではいけませんよ、覺さんが珍らしく怒りましてな、水戸の隠居とな、アハ、これからは百姓の光右衛門ぢや、さう堅くならんで友達と思つて下さい。

のう介さん、覺さん」

「さうでございます。皆さん方、宅の隠居さんは遠慮が嫌ひですよ」

「御隠居様、御言葉に甘へまして、岡崎屋清兵衛、一同と共に、改めまして御詫を申上ります。何卒御用捨を願ひ上げます」

「未だ云ふて居りますね、ハ、、、もう宜いのですよ、エ、それから、あの番頭さんを褒めてあげて下さい。私は感心して居ます」

「ハイ、承知 仕りました。この御言葉を給はりまして、定吉は幸福者でございます」

定吉はボロ／＼泣き出した。然うして口がきけません。

「岡崎屋さん、この看板は、良い樺ですから削り直して、白井さんに裏の方も書きなをしてもら

ひなさい』

『何う仕りましたして、私方の寶物でございます。もう雨ざらしには致しません。店の内側正面に掛けさせて頂きます』

表面を削つて、黄門さまに書いて頂きたいと、小さな聲で定吉番頭が云つて居た。それから別席へ正齋を連れて行かれ、

『突然ながら、面會たい人がありますぞ、サ、覺さん呼んでおあげ』

『ハイ、ア、もう来てをります。此所へ御這入り』

長吉に連れられた庄太郎は、父の顔を見るより早く、其座へ駈込みワーツと泣いた。

驚ろいた正齋は我子に飛付きました。

『庄太郎、何うしてお前は御供をして居たのか、よくア無事で居てくれた。江戸へ出したが無

理であつたと跡で考へた。許して呉れ、父が悪いのだ』

『御父さん、私は御隠居さまに助けて頂きました。御禮を申上げて下さい』

『さうか、……御隠居さま、有難く存じます思はず俸に面會をいたしました』

『白井さん、我子がなぜ可愛くないのですか、今の様子を見れば、親子の愛情が無いとも思えぬ

庄太郎から何事も聞きましたよ』

藤枝の宿から同道して、名古屋へ送る途中であると御話をなされた。

『正齋さんは、後妻が大切で我子の愛を捨てましたかな、それほど妻が恐ろしいのかね、三河の吉田で盗難にあつた庄太郎が、近い名古屋の我家に歸らぬ、これだけ考へても無理が何れにあるか判ると思ふ。年少の者を一人で江戸へ出すなら、相當の注意があつてほしい。道中筋には、時々盗難があるかもしれぬ。それ、胡魔の灰とか云ふものが居るさうぢや、のう長吉』

『ウヘー』

『大人でも、旅行は油断がならぬものを、何んと後妻がすゝめてもお前さんは、併も人道を教へる學者ではないか、譬喩がありますな、論語讀みの論語知らずといふ、尾張家の御先代は、善行をなすものと聞くと、遠方にまで使を送り、表彰優遇なされたりと承はる。私が泊りました、遠州金谷宿の尾張屋金兵衛の、昔語りをお前さんは聞いて居らないかね、尾張家の家臣なら、傳聞して居る筈ぢや、知らずば一度調べて見なさい。五十餘年の昔語りではあるが、然ういふ御家に奉公の身が、一家を納めて行くことさへ出来ぬやうでは、御主人に對しても申譯がないことになる』

『ハツ、ハ、ツ、重々恐入ります』

『判りましたか、先づ話は是迄にして、向後は親子夫婦が圓く納まり、晴々と暮して行きなさい』

『勿體なき御意見を給はり、厚く御禮を申し上げます。此後は伴を大切に、一家圓滿に暮して参ります』

『それが宜い。庄太郎も安心したか、尾張へ歸つたら、繼母と思はず、誠の母と思ひ優しく仕へるのぢやよ』

『ハイ、左様にいたします』

と涙を拭いて笑顔となりました。隣に坐つた長吉も、貰ひ泣きをして居ましたが、

『庄太郎さん良かったなア、俺も涙が出た。親子仲よくしてお呉れ、若しも、また意地の悪い事をしやアがつたら』

『これこれ』

『へエ、へエ』

『もう宜い、其話しは済んだのだ。他の話しにしたがよい』

『エツへ、、、何うもすみません』

それから御隠居は、此家の御優遇で、一行八人となる。夜半のころ迄、次々に御目通りを願ひに来る。御機嫌伺ひに出でる者がある。ようやく寢間に御入りになつたのは、大ぶん更けてをり

ました。

さて翌日は、せめてもう一日御滞在をと留る袖をお拂ひになり、微行の旅故御城主にも會はずに行くから、後で判つたら宜敷申傳へてお呉れ、と御出立つとなりました。

『正齋さん、お前は主家の御用もあらうから、一ト足先へ行きなさい。私等は悠くり見物しながらゆきます。サア遠慮なく』

『ハツ、それでは名古屋で御待ち申上げて居ります。何うぞ御立寄りをお願いします』

『訪ねますが内々の旅ゆえ誰にも云ふて下さるな、出迎ひ等を受くるのが氣の毒でならぬから』

『ハツ、御意の通りに仕ります』

『ウム、それでは庄太郎や、また會ひますぞ』

『ハイ、御待ち申して居ります』

『行きますよ……、御弟子さん達も御苦勞ぢやのう』

『ハ、ツ、恐入ります』

庄太郎は元氣よく、介さん覺さん長吉にも別れを告げて、振り返り、父に従ひ行きました。老公はまた四人となり。岡崎を後に八丁餘り、程なく來たる矢矧の橋、橋上に暫く足をとどめられた。尾張の生むた大英雄、豊臣秀吉公が少年時代、此橋上に住み居られ、道行く人に食を乞

はれしと云ふ、昔語りの舊跡なるかと、感慨深く三人と共に語られました。それより行かれて、ちりふ、も過ぎ、鳴海街道をすゝまると、左側に見へたはこの奥に、今川義元の墓あり、と書いた建札があります。

「ハ、ア、今川侯の御墓か、御参りをしてゆきませう」

「御供をいたします」

と覺さんが先に立ち、横の細道を左へ入りますと、程なく見へました。近づいて御覽になると

「今川治部太夫義元之墓」

とあります。石碑の脇には、大きな塔婆がたてゝあります。それには、

「天澤寺殿四品前禮部侍郎秀峯哲山大居士」

と書かれてある。其横に、數基の小さいお墓が見えます。一禮をなされると、早くも墓の廻りの草をとり拂つた長吉は、近所の農家へ駈て行き、線香と手桶と花を持つた老人と若い男を連れて來ました。兩人は、綺麗に御墓を洗ひ、香と花を供へます。御拜みになつた老公は、

「皆も御まゐりをしたら、少し休みませう。お前さんも御手数でした。有難う」

介さんは懷中から出したお錢を渡すと、

「こんなに頂いてはすみません。イエー」

「まあ遠慮しないでとつて下さい」

「さうですか、御氣の毒ですなア」

老人は御隠居の側に腰を下ろして御顔を見詰め。

「今川様とは、御知り合か御縁續きで、もありませうか」

「イヤ、知り合續きと云へば、云へないことも無いが、私等とは時代の違ふ昔の大將、名高い御人でありませうから御まゐりをしました」

「ア、さうですか、御奇特な事で、今川様もさぞ御喜こびでせう。いま御詣りをなされた小さい

方の御墓は、今川公の忠義な御家來さまのですよ」

「ハ、ア、あの數基が、さうですか」

「永祿三年五月十九日の合戦で、この桶狭間で討死をなされた時、御一緒に御供をした方々です

よ」

「成程、忠義な人々ですね」

「ハア、尾張の人達は餘んまり面白く思つてをりませんでせう。今川様は、尾張へ乗り込で來て尾張清洲の御城主織田信長公を討て、御領地を乗り取らうとしたのですから、でも名高い大將ですからね、古跡に残つて御墓が立ちましたが、尾州の人は御詣りが少ない譯です。旅の人はよく

御参りをしますが、私は縁あつて近所に住みますし、名高い方だし、忠義な御家來さんの事を考へますと、時々御参りして、御墓の掃除をしますよ』

『それは感心ですねえ、續けてあげて下さい』

『ハア、承知しました。御隠居さん、あの向ふの松が、今川公の鎧をかけたといふ、鎧掛けの松ですよ。何にしろ太閤様の若盛り、木下藤吉郎と云はれた時分、信長公の軍師でしたから、幾等義元公が強くとも大軍でも、敗軍したのは當然ですよ。尾張から偉い御方が生れたものですねえそれから皆さんは何處へ行きますかね』

『上方見物に出て来たので、常陸の國から』

と長吉が横から口を出して

『お爺さんは幾歳だね、宅の御隠居より餘程上だらう』

『サア、御隠居さんは幾歳か知らないが、私の子ぐらゐだらう、アハ、、、八十八の米の祝ひを昨年やりましたよ。此男は末の孫ですよ』

『成程、私の御父さんですね、ハ、、、達者で宜いですな、永い間には面白い事や、珍らしい話しも多く有つたでせう。さうして此邊は暮しよいですか、お役人方は優しいですかね』

『ハア、優しいねえ、暮しよいでなア、尾張大納言様の御領分だからねえ、徳川將軍様の御親類

御三家の御筆頭ですもの、紀州大納言様と、水戸中納言様と御三家は、よい御政治の御手本を示して下さるのださうで、其御領地に住む者は有難いことですよ』

『さうですか、夫れは宜いですな』

『尾張の人達も幸福だが、紀州様の御土地の人たちも、水戸様も宜いさうですよ。それに御隠居の黄門さまは、何んでも國々を廻つて世の中を良く仕様としてゐなさるさうですよ』

『おや、そろそろ此方へ来たぞ、危ない』

『何を云つて居るのちや』

一ふく吸ながら、聞いて居られると、

『永い間には、珍らしいことも見聞きましたよ。この御墓の前では珍らしい事がありましたよ』

『ハア、何う云ふことですか』

『變つたことも度々ありましたが、サア、あれは何年後になりますかなア、私が若い時ですからもう五十年も経ちますだらう。御墓の側で日本一の大試合がありましたよ。其時は驚ろきましたねえ』

『ナニ、日本一の大試合、御爺さん聞かせて下さい』

介さん覺さんも話に釣り込まれた。

「それは、大試合でしたぞ、私が御墓の掃除を仕様と来たとき、三十五六歳と見へるお侍が旅の仕度も立派でしたよ。お墓の廻りを綺麗になすつて、櫻の花を供へて、瓢箪からお酒を御墓にかけて居るではありませんか、呆氣にとられて見て居りますと、私の後ろに坊様が一人、もう年輩の立派な人でした。にこ／＼笑ひながら見て居ました」

「へエー、變つてるなア、お墓へ酒を、私は始めてだね、さう云ふ話しは」

「お侍が叮嚀に拜んだ後に、私が聞きましたよ。何うして御酒をかけたのですかと。すると、ニツコリ笑つて、今川侯は討死の時迄酒を呑んで居られたと聞く、餘程御好きと思つたから、手向たのだと云はれました。變つた事だと思つたが、成程と合點しましたね、と坊さんが大聲に、面白いな、今川侯も御喜びであらうと褒めて居ました。それから兩人で話し合つて居るうちに、試合となりましたね、旅の人が集まつて来て、見て居ましたが、何時迄たつても勝負が付きませんでした。お侍は能く見ると左一眼でした。鐵扇をかう構へて、エイ、エイ、と云ふだけで少しも動きませんでした。坊さんは鐵の如意とか云ふ、扇より少し長いものを前の方へ突き出してこれも、エイ、エイ、と氣合をかけて睨み合つて居ました。兩方とも鉢巻から汗がたら／＼出て物凄いくことで、何うなる事かと思つて居る内に、坊さんが參つた、と云ひました。とたんに、侍もまゐつたと云つて、よろ／＼と兩人共、其所へ座つて仕舞ました」

「ウーム、成程大試合ぢやな」

「見物の衆も、私も聞きましたら、坊さんの云ふには、俺はこの侍の倍にも近い年上だ、それで互角だつた。俺の年迄どころでは無い。もう四五年の後は、とても勝てないだらう。年から考へて、今互角なら俺の負けだと思ひ、まゐつたと云つた、と斯うです。御侍の方に聞くと、俺は斯う云ふ名人に初めて會つた。これ以上氣合が續かぬ、そこでまゐつたと云つた。かういはれました實に大した試合でした」

「さうでしたか、當時を見るやうですな、其名人方の名は」

「エ、一、坊さんが淺山三五郎一傳齋と云ふ先生で、淺山一傳流の元祖ですよ。お侍は、柳生十兵衛三嚴と云ふ先生でした。其頃は双方共、天下無敵と呼ばれたさうで、日本一の大試合だと、後で大評判でした」

勇ましい老人の試合物語りに、興味深々と引付けられて長吉迄が、熱心に聽いて居りましたが、御隠居さん。名人の試合は傑いものですねえ、聞いて居る内に思はず身體が固くなりますねえ介さん覺さんもさうでせう」

「然うだ。宜い話しを聞かせて貰いました。外にも珍らしい話しがあるやうですね、隠居さんも喜こんでおいでだ。御爺さんの記憶の良いところで、もう一つ話して下さらぬか」

覺さんもすゝみ出て、次の話題を切望しました。

「さうかね、ではもう一つ話しませうかね、御隠居さん、疲れはしないかね、こんなに長く話しをして」

「イエ、決して疲れません結構です。聞かせ下さい。お爺さんこそ疲れでせうが、若い者にも聞かせて遣つて下さい」

「宅の爺さんは話しが好きで、一晚中話して居ますよ。よく皆なが聴きに來ますからね、それに少しも耄ないで、昔の事を忘れないんですよ。それにやア若い者も勝はないでねえ」

「へエ、達者だなア、ちやア御爺さん頼みますよ」

「あの話しは、大試合の後だつたと思ふ、この先の鳴海の宿に、鳴海屋さんと云ふ鳴海絞りの間屋さんがあります。御隠居さんが丈夫の頃でした。私と同じやうに、義元公の御墓へ参るのでした。同じ心持でね、よく仰言たですよ。幸兵衛や、お前が御墓へ詣るから、私の病氣や旅行の時は代参を頼むと、それは、評判の良い物判りのよい隠居さんでした。大家の御隠居のやうではなく、腰の低い丁寧な優しい方でした。只一ツ、珠に疵とも云ふのは、お孫さんを可愛がり過ぎますのでなア、それも程のもので、甘やかすきた譯で手が付けられませんでした。劍術に夢中になりましたな、其時分尾張様の劍術御指南番は、御三人でした。皆眞蔭流の先生で、正席が

佐久間内膳先生、エー、次席が宍戸郷左衛門先生、三席が井藤東馬先生でした。其東馬先生の弟子になつた孫さんは太一郎と云ひまして、少し出来るものですから、御金を多くさん納めて免許皆傳とかの巻物を貰つたのです。東馬先生にすつかり煽てられましたな、サア大自慢で、俺は東海道の小天狗だと名乗つて、齒が浮くやうでした。また聞き傳へて旅の武者修業と云ふのが訪ねて來るんです。負て歸るものですから、本當に勝つた氣になり、修業者に御馳走をして御金を遣るものだから、毎日々々訪ねて來るのですね。大金持ちの事だから、そのくらゐの事は宜いにしても、天狗慢心には困りましたね、御父さんの太左右衛門さんもホト／＼困つて居なすつた。それを隠居さんが、利口な人にも似合はず、甘やかして、太一郎は偉い。宅の者は皆先生と呼びな若旦那と云ふてはならぬと、夢中になつてな、庭續きに道場迄造つて遣る始末でした。太左衛門さんの言葉などは耳にも入れないので、長男がこれでは仕様がないと、よく私に相談をなされて隠居に意見をして倅を改めさせて呉れると、だから私が隠居さんに云ふと、孫さんのことばかりは聞かないのですよ。これが珠に疵ですなア」

「成程、孫は子より生じて、尙愛の増ものとは申すが、それは困りましたらう」

「ところが或日、隠居の太兵衛さんが今川様の御墓へ詣ると、一ト足先に、お詣りをして居る若いお侍がありましたよ。私も丁度行き合せました。二十五六歳の美しい人でした。木刀を持つ

て旅仕度も甲斐々々しい、武者修業者でした。隠居さんが話しかけて、御侍は今川公に由縁の方かと聞きました。私が今聞きましたやうにな、すると由縁と云ふ譯では無いが、有名な大將である故、通行の途中御まゐりを致したと答へられました。それは感心な御人ぢや、見れば劍道御修業者のやうだが、宅へ御泊りなさい。若先生が教へます。と隠居さんが引つ張つて行きました。修業者は迷惑さうな顔をして行きますから、私も若い時分のこと、氣樂さうに従いて行くと、鳴海屋さんの奥座敷へ上つた修業者の前へ、太一郎さんが歸宅して、サア教へてやるから道場へ來い。東海道の小天狗だぞと、それはく大威張でした。私も癪にさはつて見て居ますと、修行者はニツコリ笑つて、怒りもしないのでした。ところへ太左衛門さんが歸つて來て、修業者さん伴へ意見のため、強く負かして下さい。生兵法で困つて居ます。皆さんが御世辭に負けて下さるので増長して、此分では今に大ごとが出来るかも知れません。と内々で頼んだものです。すると笑つて居た修業者は、頭を少し下げて合點々々をしました。太一郎さんが道場へ來いと云ひますと拙者は長い旅行で疲れて居る。此座敷で立合ふと云ひました。よし、それなら木刀を持って云ふと、拙者は疲れて居る。重い木刀は持たぬ、扇で遣らうと座つた儘扇を前へ突出しました。サア太一郎さんが眞赤になつて、立上れと云ふと、立つのも面倒な、座つて試合ふ、木刀でも眞剣でも來なさいと云ふのでした。イヤ太一さんの怒つたこと、御爺さんは大變な奴を引張つて來たと

木刀を眞向に上げて試合しましたら、扇で木刀を拂落し、組付くところを引倒し、膝の下へ押付て身動きもさせませんでした。それから意見しましたね、太一郎さん、生兵法は大怪我の基、劍道を習ふなら目錄の許を受ぬうちは、他流試合杯やつては成らぬ大怪我でもしては、御前は免許どころか、こんな腕前で、第一他人に對する行動は、これは何事だ、武術を習へば人の心が正直になる筈ぢや、正直になれば行ひも正しくなる譯だ。然うなれば他人にも無禮はなさぬものだ。よく考へなさいと引起してやりました。太一さんは庭から逃出す。隠居は目を白黒させる。太左衛門旦那は喜んで禮を云ふ、奉公人達は呆氣に取られると云ふ騒ぎでした。ところへ太一さんが井藤東馬先生を連て庭續きに入つて來ました。東馬先生は太い木劍を振り上げて、修業者來い。よくも高弟の太一郎を扇で試合つたな、我免許の弟子を何と心得る。立てつと、凄い勢ひでしたところが修業者は平氣な顔で、失禮だが旅の疲れがいよ／＼つよい。扇で座つて御相手をするともた云ふのでしたよ』

『へエー、これは面白いなア、それから何うなつたね、私は斯う云ふ話しが』
『大變怒つた井藤先生が、打ち殺して遣ると振り下ろした木刀を、一寸變して扇で木刀を打飛ばし、組んで來るのをまた膝の下へ押さえて動かさなかつた。太一さんと同じ手でしたよ、修業者の強いには、皆んなが驚ろいたね、でも東馬先生は、參つたと云はなかつた。すると落ち付い

たものだね、さて東馬先生、此場のことは、皆さんと共に、決して他言はしませんから御安心なさい。貴方の御務め向きに障るやうな事は御座らぬ、と云ふと、東馬先生はコソコソと逃出し、此上たよ。サア斯うなると流石の隠居も怒り出して、太一郎や、井藤さんの道場へもう行くな、此上剣術を習ひたければ御修業者に教へて頂け、宅の者は太一を先生と云つてはならぬ。若し云つた者は給金を下げるぞ、といやはや、太一郎さんの顔色はなかつたですよ。それから隠居が先達で御修業者々々々と、取持ちでした。それからすーつと其方が鳴海屋さんへ留られて、太一郎さんに教へて居るうち、東馬先生は、あの修業者を早く追拂へと度々云はれたさうでした。それから熱田様の御奉納試合の御話しになりますが一

と爺さんは、孫のつけて出す煙管をとつて先づ一ふく、老公はじめ、其記憶力と、順序を立てての巧みな話し振には感心して、話しの先が待遠しい程でした。

「御爺さん。早く續きを聞かせて、頼みますよ」

長吉は待ち兼ねて催促をすると、

「皆さんが宜く聞いて呉れますから、夫れでは續きをやりませうかな、ところで其修業者は、上野國の馬庭村の住人で、樋口十三郎と云ふ先生でした。馬庭村に代々住んで居られる名家で、其當時、關東の麒麟、大天狗と評判の高い、樋口十郎左衛門と云ふ偉い先生の息子さんでした。後で

聞いたのですが、親孝行で優しい人だつたと、それから二ヶ月も過ぎてからと思ひますが、熱田大神宮様の御神前に、御奉納試合がございました。尾張様の若侍衆が試合しますので、毎年一度づつ、三四年前から續いて居たやうでした。試合の仕度や其他の御係り役を、前の年と其時と二年續けて務めたのが東馬先生でした。ところが東馬さんは、太一郎さんに、この大役を務めることになつたから、祝つてくれと頼んださうですよ。賤な人ですなえ、鳴海屋の旦那がお金を紙に包むと、祝酒として太一さんが持参したさうで、それは前の年のことで、今年も頼まれたが、今迄お金をたくさん幾度も取られては、役に立たない許の巻物ばかり呉れて、馬鹿々々しいと思つたものだから、旦那は持つてゆけと云つたさうだが太一さんは、ホンの少しばかり祝つたのでした。これは當然ですよ。そこで太一さんが樋口先生と、熱田大神宮様へ御拜をなされて、御奉納試合を見て居ると、試合が一度すんで、次の試合になる迄暫く休むのでした。其時に間違が出来ましたのです」

「ハ、ア、何う云ふ間違でしたか」

「御隠居さん。話しはこれからですよ、東馬先生が御弟子に云ひ付けて、太一郎さんを控所の幕内へ引張りこみ、さうして上役の六戸郷左衛門先生に届けてをいて引返し、サア太一郎、お前は怪しい劍客者を留置き、我々の眞蔭流を悪口する由、師を罵る不届者、折檻するから然う思へ

と、鐵扇を振り上げて打たうとしたのです。私は知りません悪口杯は致しませんが、太一郎さんは一生懸命に其手を押へて居ると、幕の外で見て居た樋口先生が、幕中へ飛込み、拙者が證人になります。太一郎殿は御流名や貴殿を悪口したことは無い。疑ひを拂はれて御許しを願ふと云ふと、大勢の御弟子も太一郎さんの爲に口を添へ、友達のことですから許して貰ひましたが、樋口先生だけは許さないのでした。大勢の若侍に預けて置いて東馬さんは、佐久間、宍戸の兩先生の前へ出て、御覽になりました如く、無禮な浪人劍士、許可も受けずに幕中へ入り、且はまた、鳴海屋方に滞在なし眞蔭流を悪口なす不届者、繩をうつつて名古屋へ引立て、充分取調べて見ます考へ、此段御届を仕る。と斯う云つたものです。十三郎先生を無理にも罪にしやうとする悪計でした。

『ウーム、悪い野郎だなア、畜生奴』

『上役方や大勢の手を借りて、樋口先生を落入れようとした時、佐久間内膳先生が聲をかけました。夫は違ふ、許しも受ずに入幕したのはよくないが、太一郎を救ふ爲にとすれば、許してやれ、繩を打つて名古屋へ引つ立てる程の罪はない。今日は神様を御慰め申上る御奉納試合であるしかるを御社前にて、罪人を造りたくはない。此場で出来たことは、此場でおさめるが宜い。向後の注意をあたへて歸してやれ、と斯う優しく仰言つたのでした。聞いて居た私も感心しました』

ね、すると東馬さんが、イヤ、御言葉では御座るが、流名を悪口されては面目が立ちませぬ故、と尙も罪にしやうとすると、悪口を受たからとて、一應は考へて見ねばならぬ。立腹は後のことだ。我々が指南する劍法が、他から見非難さるゝ様なれば、向後一層研かねば成らぬ、然うして他流を悪口する程の劍士なれば、相當の手の内ならんと、また云はれると、それが劍道未熟でありながら悪口する故、許されませぬ。拙者に脆く負て居りますのに、先日鳴海屋で試合しました時を御目にかけてたう御座つた。彼は木刀にて打ち込み来るを、拙者は扇で打ち拂ひ、組み付き来るを引倒し、膝下に押へ付けましたら身動きも出来ませんでした。とこう云つたものですよ、何んとづうくしいでは有りませんか』

『アハ、、、こりやア驚ろいた。それでも侍かなア、恥を知らねえ奴だ、で夫から』

『佐久間先生は考へて居られましたか、あの劍士は何流だ、何處の人で姓名は、と御聞きになつた。上州から来た、馬庭念流の樋口十三郎と云ふ者ですと答へると、また考へて、よしつ、夫れなら樋口と試合つて見なさい。さうして見事に打ち込んで負かして御遣り、満座の中で負かされたら、向後他流を悪口致すまい。それで許してやんなさい、と云はれました。其時の東馬先生の顔は、今でも目に付いて居ますよ。ウ、ウーンと唸りましたよ。すると宍戸先生も夫れが宜いと云ふし、兩御家老様もそれが宜いから試合つて許せと仰言る。兩御家老とは、徳川將軍様から尾』

張様へ御附け家老の、成瀬隼人正様、竹越山城守様です。大納言様がお江戸ですから、御名代に御見分をして居られました。サア斯うなると、東馬先生も出なければ成らぬ事になりました。出れば直ぐ負るだらう。さうなると嘘が露見するから、切腹するか、浪人するかと云ふ場合になりましたよ』

『成程、嘘はつけねえ物だ、人間は正直でなければ不可ねへ、東馬と云ふ奴も早く気が付けば宜いのに、馬鹿な野郎だ。ねえ介さん』

『ウムさうだ……、御隠居さん、話しはますく面白くなりました。貴方も一ふく如何でございませう』

『一ふく遣りませうか、面白いですな』
老人は二三ふく吸つて一ト息つき、

『さて皆さん。話しはこれから一そ味がありますよ、そこで、樋口先生にもこの話しをしたところ、妙な顔をして返事をして居ましたが、やがて試合となりました。ところが、すぐ東馬さんを負かすだらうと思つたら、さうで無いのです。双方いつ迄も睨み合つて氣合をかけて居るので、私は變な事だと思ひました。東馬さんはブルブル震えて居るやうでした。其内に打ち合となつて、不思議なことには樋口先生が後へ下つてきたと思ふと、木刀を落として、まいつた。と大』

聲に云つたら、東馬さんは一間ばかり斜に飛んで、座はつてしまいましたよ。サア其時の見物の話しが面白かつた。勝つた人がヒョロ／＼になり。負た人が平氣で居る。此んな試合は始めて見た。東馬先生が斜に飛んだぜ、桂馬は斜に飛ぶが、東馬の斜に飛んだのは今がはじめてだらう、と』

『アハ、、、ハ、、、これは面白い』
『ウフ、、、ハツハ、、、』

御隠居も、聲をあげて御笑ひになつた。介さん覺さんも吹き出しましたが、長吉は腹をかへて笑ひが止まらないのです。老人も笑ひながら話しを続け、
『それで、また若侍衆の試合もつゞけられ、東馬さんも無事、樋口先生も無事に鳴海へ歸られました。鳴海屋さんでは大喜こびで、樋口さんを優遇して居ると、暫くして、近所の宿屋さんから手紙が来ました。それは佐久間先生が名古屋へ歸らず、試合が済むと鳴海へ來られて、松屋と云ふ宿屋に泊られたのです。然うして樋口先生へ手紙をよこした譯でした。それから先生が行つて會ひなされると、樋口さんは東馬に負て遣つたのであらう、實に感心な人だ。御懇意になりたいから訪ねて來た。と云はれたさうで、後で佐久間先生が、此試合のことを話されたには、仁義禮智信、五常の試合であると、その譯は、樋口さんが若いのに、満座の中で負けて遣る心が偉い。東』

馬を助けてやつたのは仁義、神様の御奉納試合に、其係りを務める人を自滅させるのは神様へ、御無禮になると考へたのであると、これは禮、斯うして東馬に花をもたせ、無事に納めたのは智しかれば東馬も正しき人になるであらうと、勝を譲つたところは信、じつに美しい心の武士ぢやと御褒になりましたさうです』

『成程、感心な人です、ねえ御隠居』

『ウム、良い心がけの仁だのう』

『それから内膳先生は、樋口先生に名古屋へ来て呉れと、たつての御話しですから、其後行かれまして泊つて居る内、津島の神様へ御参拜をして歸つて来るところを、何んと東馬先生が、心得違ひにも、樋口先生へ暗討ちをかけたのです。ところが如何に不意討ちでも天下の名人ですものヒラリと體を變して組み伏せたさうですよ……』

『へエー、何んとまア、呆れた野郎だなア』

『其時は樋口さんも腹を立て、恩も義理も判らない奴だから、餘つ程斬つて仕舞ふかと思つたさうですが、イヤ、さうでない、もう一度意見をして遣らうと、堪忍をなすつて、涙を流して懇々意見をなすつたら、遂に改心をして、切腹しようとしたのを、宥めて歸したところ、其後は東馬先生も生れかへつた様に心を改め、本當の御侍になりました』

『然うかい、それは良かったなア、樋口さんて方は偉いなア若いのに、東馬さんも斜には飛ぶめえ』

『ハ、、、、然うちや、眞直に飛ばれたらう、感心なことぢや、美くしい話しですな』

『それから、未だありますよ。佐久間先生も奥さんも、十三郎先生を見込んで、御嬢さんを嫁にあげたいと申込んだところ、始は中々承知しなかつたさうで、修業中のことだからと云はれて、それでも二年程過ぎたら、縁組となり上州へ御嫁に行かれたさうですよ。良い婿が出来たと評判でした。それから鳴海屋さんも、今では太左衛門旦那から三代目になります。相變らず繁昌ですよ。小天狗の太一郎さんも未だ達者ですが、隠居をして熱田に住んで居ります。毎朝々々熱田大神宮様へ御参拜をして居られます。私も折々訪ねて行きまして、一緒に御参拜をいたしました。もう昨年足が弱くなつたので、手数をかけますのが御氣の毒で、来い〜と云はれますが遠慮をして居りますよ。……をや、これは長話しをして、お日様も、もう夕暮になりました。御隠居さん疲れましたらう。私の家はすぐこの脇道だ。遠慮なく御泊りなさらんかな、汚ないところだが廣いから、まだ〜話しはたくさんある寝物語りでも遣りませうよ』

『爺さんの云ふとほり、汚い家だが泊つて行きなさいよ』

『有難う、珍らしい話しや良い話しを聞かせて下され、皆喜こんで居ます。御禮を申します』

三人もともに頭を下げますので。

「ヤア、御禮など云はれては困りますよ。御泊りなさいよ。なア皆さん」
親切な老人の言葉を喜ばれ、その農家へ同行なされました。俵夫婦と、孫夫婦が出迎へまし
て、風呂に入れてくれ、食膳をととのえて呉れます。其心盡しを一そ御喜こびになつて、

「今夜は取わけ宜い氣持ですな、介さん覺さんは何うですな、長吉さんは」

「心善い人達の待遇を受けまして、私共も宜い心持になりました」

「仰言る通り、落付いた氣分になりました。同じ廣い座敷でも、宿屋の大廣間とは違ひます。ハ
ハ、、、」

「然うぢや、大廣間か、思ひ出すのう長さん、アハ、、、」

「エへ、、、考へますと、縁は不思議なものですねえ、袖振合ふも多少の縁、初めて御目にか
かつたのは小田原のいろは屋で、ア、もう罷ませう。へ、、、」

老人も一緒に食事をしたが、終ると一ふくやつてまた話しました。

「田舎のことで何も御馳走が出来ませんよ。まア馳走の代りに話しならいくらでも出来る。お前
さん方のやうに宜く聞いて呉れると、張合があるでなア」

「御爺さんのやうに、上手な話しを聞かない者は損ですよ。ねえ御隠居さん」

「さうだとも、御爺さんに、廣く話して貰ひたいですね、多くの人に聞かせたい」
「左様です。此處だけでは、惜しいことです」

「それがな、皆さんの前だが、私は此處に居て、少しの人に話して居るやうだが、さうでない。
私の弟子が諸方で話して居ますよ。代りも遣つてくれますよ。良い弟子ですよ、アハ、、、」

「そうら、爺さまがまた自慢を始めたよ」

と宅中の人達が笑ひ出した。

「御弟子さんがありますか、夫れは宜い、矢つ張り御爺さんのやうに上手な人ですか」
と覺さんが膝をすゝめた。

「上手だとも、殊に依ると私よりは上手かも知れない」

「お爺さん、自慢は程にしなさいよ。御客さんに恥づかしいから、ハ、、、」

「イヤ笑ふでない。本當のことだもの、御客さん其弟子に付いて面白い話がある。二年程前の
こと、今川公の御墓参りをして居た旅の御侍と、皆さんのやうに初めて會つたのだが、話しが合
ひまして、丁度日も暮たものだから宅へ一と晩泊めてあげました。話しの好きな人で、とう／＼
語り明かして仕舞ましたよ。翌日一日また話して、また泊りなすつた。ところで此御侍が弟子に
なりましたよ」

「へエー、變つてるなア、餘程上手に喋舌れる方ですかね」
 「上手だとも、私が感心したくらいなもの、其方の云ふには、拙者は學問が好きだ、文武二道の修行をして居る。だが學事に片向き勝た、そこで御爺さんの話しを聞いて居る中に、大いに感ずるところが有つた。有難いと云はれましてね、良い話しを廣く世の中にするには、人を樂しませて、善道に導びくことになる。御爺さんの代りも兼て、諸國を話して歩きます。それを私の務めにする。仕事に仕様、御弟子にして呉れと云はれますから、承知して師弟になりましたよ。それから此方が、サア、彼時から三四度來たねえお前達」

「さうですよ。幸兵衛の二代目ですと云つてねえ」

「近頃は、遠州、駿州邊を廻つて居ると聞きました、もう今では、私も勝てませんよ。若い人で、聲が良くて、學問があつて、話しが達者だから、弟子の方がすつと偉いですよ。人の爲になる話しをして一生を送らうと云ふのですからねえ」

「へエー、感心な人だなア、良い御弟子を持つたねえ御爺さん。何んと云ふ名だね」

「エ、一、一心堂文山と云ふのですよ」

「ハ、一、文山先生、御隠居、あの人ですよ」

「オ、さうかい、一心堂さん、ウム成程」

「御爺さんの御弟子で、宜く話し方が似て居りますね、妙な縁でございます」

「オヤ、御客さん方は、文山さんを知つて居ますかね」

「ア、知つてますよ。遠州金谷の宿で聞かせて貰ひましたよ。上手でしたねえ、御爺さんより少し上手だらうか」

「これ、何を云ふ、私等にも聞かせて下さいました。御爺さんは居ながらにして、其心持を他國に通じて居る譯ですね」

「然うでしたか、不思議な縁だ、なア皆んな」

「本當にねえ、何處で何う云ふ人に會うか判らないものだね、是を考へても悪い事は出来ないものだねえ」

「さうだとも、それからあの名前は、此先の御寺で話した時、和尚さんが付けて呉れました。何んでも心得て居る學者だから、學でも文でも、心の中に山のやうにあると云ふので、一心堂文山と、本名は關根内記さんと云ふ、江戸の本郷とやら云ふ處の學者の息子さんですとか、立派な御武家の次男と云ふ事です。修行に出た途中私に會ひましたので、此前見へられた時、拙者も兩親の許しを受けました。安心して下さいと云つて居ましたよ。御兩親も判つた方で、少しでも世の人の爲になることなら許して遣ると、さうして文山さんも感心ですよ。何の道樂もなく、良い話

しをと苦勞をして居なさるのです。未だ四十前ですよ。老けては見えまへがね』

『成程、善い心持の人ですね』

それから程なく話しも終り、みな寢床に入りましたが、翌朝は早く起き謝禮をなされて當家を
出立されました。爺と孫が半里餘りも送つてくれる。別れを告げて老公も、振り返つて幸兵衛の
後ろ姿を見て居られた。

『御隠居さん。私は今朝困りました。爺さんが聞くんですもの、常陸の百姓衆ぢやアなからう。
口のきゝやうに權がある。優しい言葉の中に確かりしたところがある。飯を食ふ時に、眞直に座
つて食が口を追ひかけて居た。御侍の食ひ方だ。屈み加減に座つて口の方から食を追ひかけて食
はなかつた。あの食ひ方は侍に多い。と六ヶ敷い事を云ひましたよ。本當の事を聞きたいと、若
しかしたら、お前さん達は公儀の隠密ぢやア無いかと云ふんです。驚ろきましたね、でも、とう
とう天神林の光右衛門さんと、介さん覺さん長さんですませて來ました。だが目の高い御爺さん
ですわえ』

『然うかい。確かりした老人ぢや、眼力も勝れて居る。私よりは二十三も上であるに』

『さうすると、御隠居さんは未だ隠居にやア早ふございましたね、もう一度御役を御務めになつ
て頂きたいな、然うなると覺さんも介さんも、無論御家老様でせう。私は、御側御用人でねえ』

『ハ、、、、御側御用人はよかつたのう』

『で無ければ、御馬廻り役、御側に付いて居る』

『御馬廻り役よりは、金を預かる勘定方の役が宜からう。アハ、、、』

『へ、、、、介さん未だ時々割りますね、人が悪いや、ウフ、、、』

老公も思はず吹き出されて、それから鳴海の驛も遙後ろとなり。笠寺井戸田等を通つて、

尾張國名代の熱田に着きました。

熱田大神宮に御参拜、それより尾州名古屋の城下にまいられ、本町通りの宿屋に泊られました
其翌日は介さんに、白井正齋方を内々で訪ねさせました。白井は妻や伴を連れて、宿の柏屋を御
訪門、庄太郎は飛立つやうに喜び御側にまいる。妻も御目通りを許され、只一言優しく御訓
誡、後妻は涙を流して御詫を申し上げ、一家の圓滿を誓ひました。正齋は、是非共我家に御優遇を
させて頂きたく、御泊りを願ひましたが、内々の旅故と御辭退なされ、明日出立するから後で各
々に宜敷く申して呉れとの御言葉、それ故、内々にて御家老方に告げましたから、大納言さま江
戸にあられて御留守の折柄、成瀬、竹越の兩家老が、四五人の重役を連れて御機嫌を伺ひに出ま
した。さて、其翌日は、また御出立、正齋父子は御供をして、尾張の宮から御乗船になる迄御見
送りをしました。兩家老も、内々にて遠見隠れに御見送り。いよく出船になると庄太郎は手を

振つて、

『御隠居さまア、御氣をつけて、御機嫌よろしく、……介さん、覺さん、長吉さん御機嫌よう』
老公も手を上げて、庄太郎を見て居られるのを、長吉も手を振りながら見て、

『御隠居さん。可愛いものですねえ、何んだか涙が出ますよ』

『ウム、可愛いものぢや、正齋は良い子を持つたのう』

お乗になりましたのは、伊勢の國桑名へ七里の渡船、無事に上陸をなされました。夫れより、伊勢大神宮様へ御参拜、内宮外宮、御謹拜をあそばしました。其夜は二見ヶ浦の近くにお泊り、翌日は安濃津へ出、白子、神戸、石薬師、庄野、龜山と伊勢の名所を御見物、それより關、坂本、土山、水口、石部、草津から膳所、大津より京都に泊りを重ねてお着となる。さても光圀公は、隠居の身にてお微行の旅故遙かに御所を拜し奉り。平身低頭御敬禮をあそばしました。

それより三條通りに御泊り。京の名所を御見物なされ、伏見から夜舟に乗つて十三里、淀の川船と申して名高い通船、大阪の三軒屋に着、お上陸になりました時、長吉は喜び、

『御隠居さん。御蔭様で大阪迄御供ができました。此處は馴染の多い土地でして、それに繁昌の

ところですから諸國の職人も入り込みませう。どうかして親父に會へないとも限りません。今迄油断なく氣を付けて來ましたが』

『早く會はせて遣りたいのう介さん、覺さんも氣を配つて呉れるから、四人で探すのぢや、まア長吉氣を永く、時節を待ちなさい』

『へい、何分御願ひ申します。早く會いてえなア』

長吉は目を皿のやうにして、八方を見ながら道案内として先に立ちます。御見物ながら南へ向ひ、日本橋筋の宿屋浪花屋六兵衛方へ御泊りになりました。

さて、これからが、浪花奇談より、續いて乞食問答の一席でございます。

大阪へ御着になつて三日目のこと、今日も町々を御見物、北の方へ廻られて天満の天神様へ御参詣、御鳥居の外へ出ますと、數々の見世物小屋、種々の食物菓子店、手遊屋等の店先に人が集まり繁昌をきわめてをります。

『賑やかぢやのう。長吉は斯う云ふ人出の中に注意をして親父を尋ねるが宜い』

『へい、それなのでございます。二十五日の御祭日でも常日でも、天満宮様の御参詣はかはりません。何日でも斯ういふ人出です。大したものですねえ御隠居さん。この中に親父が居りやア宜いなア、アレツ、アツ』

『長吉、居つたのか』

『イエ、違ひますよ覺さん』

『でも、其聲は、何を見たのだね』

『へエ、何ですよ。介さん』

折しも人込の中で、掏賊だく、泥棒だく、ワアーツ、といふ聲、御隠居も延び上つて御覽になると、大勢の中に侍が一人、若い商人體の男を捕へて居る。地面へ座つて詫居る様子、其脇に十七八の綺麗な娘、文金の高島田に髪を結、衣裳も目立つ、華美な模様の伊達姿、供と見へる女中と小僧が、確かり娘の袖をつかんで居る。侍は怒聲をあげ。

『黙れつ、其言譯は聞かんぞ、この娘の紙入を出して遣れ、太い奴だ』

『旦那、間違ひですよ。私は掏賊ぢやありません。今お詣りをして来たところです。人聞きが悪いことを、困りますねえ、モシ御嬢さん紙入なんぞ盗りあアしまんぜ』

『エ、でも、あの』

『盗つたよう、其様なことを云つたつて駄目だよ。およしどんと私が見たんだい。お前は掏賊だ、早く出いなよ』

十三四の小僧は眞赤になつて高聲に云ふと、侍は左手を延して胸ぐらを掴み、

『立てつ、出さなければ役向へ引渡して遣る。其頃も拙者の懐中物を盗つたのはきさまだらう』

『旦那、冗談云ちア困りますよ。何時私が盗りました。餘まりですぜ』

『何を』

ボカリツ、右の拳で強く擲つた。

『アツ、痛たい。何をしやアがる』

『己れつ、手向ひするかつ、無禮討だぞ』

刀の柄へ右手をかけた途端。

『待つて下さい』

長吉が人を分けて飛込み、侍と若者の間に這入た。

『町人、何で止める。其方の知つた事では無い。退け』

『でも、無禮討は可哀さうですから、私が御詫を致します。勘辨して遣つて下せえ』

『成らん。賊のくせに無禮なことを云ふ。手討にするのだ』

『旦那、御詫をして済ませやうと思ひましたが、夫れちア申しませう。旦那の怒るのは少し筋違

ひぢアありませんか』

『何、何が筋違ひだ。云つて見ろ』

『旦那に擲られる迄は、知りません存じませんと謝まつて居たぢアござんせんか、あの様子を見ると、人違ひぢア無いかと思ひますね、だから此男の體をよく調べてから、御手討にして貰ひた

い

「云ふな、賊に違ひないのだ」

「さうですか、一寸御待ちを願ひます。オイ御前さん。人中ぢア苦いだらうが裸體になりねえ、覚えがねえなら、なれるだらう。サア」

「間違ひないよう。ねエ嬢さん。およしどん。あの人は味方をして居るが」

「小僧さん。黙つて居な、子供の出る幕ぢアねい」

「あんなこと言つてらア、子供ぢア無いぜ」

「オイ、なぜ裸體にならねえのだ。俺が手傳つてやらう」

長吉は若者の胸を叩いて、引寄せながら帯をといた。下を向いて居た男も力なくヒヨロ／＼しながら衣類を抜いた。

「それ御覽なせえ、紙入杯は無いでせう。旦那如何です。御判りでせう」

「ウーム、これは」

「オイ、小僧さん何うだ。よく見ねえ、嬢さんも女中さんも見えて呉んな」

「ウム、判つた。併し疑ひを受けぬように、以後は氣を付けろ」

と侍は人混を押分、顔を赤くして行きました。嬢は氣極悪さうに頭を下げ、

「小僧の疎匆から思ひ違ひをいたしましたして、失禮をいたしました。金入は私が落しましたと存じます」

「さうですか、落した品なら拾つた人が、何れ御宅へ届けませうよ。サ、氣を付けて御歸んなせえ」

「飛んだ御世話さまになりましたして、サア行きませう」

「可笑しいなア、變だなア」

と小僧はブツ／＼云ひながら、嬢の後から従てゆく、若者は衣類を身につけ頭を下げて、

「御蔭さまで、有難う存じます。助かりました。では御先へ御免なさい」

「氣を付けて行きなよ」

と、長吉は引返し、老公の前に、

「御隠居さん。少し御暇を頂きます。若し遅くなりましたら、御宿の方へ歸りますから」

「オ、悠くり行つて来るがよい」

「へい、有難う存じます。介さん覺さん御頼み申します」

長吉は人込みの中を、振り返りながら行く若者に追付き、

「待ちねえ」

「ヤア兄貴、暫くだなア、御蔭で助かった。危ねえところだった」
 「往來ぢア話しも出来ねえ、飯でも喰ひながら久しぶりで話さうよ」
 「ウン、案内しよう。懐かしいなア兄貴」
 一二丁行くと小料理屋の二階、裏座敷へ上つて、飯の仕度を云付けました。
 「三吉、酒は吞ねえよ。真面目な話しがしてえから、お前未だ遣つてるのか」
 「ウン、變だなア、兄貴は何うなんだ、浴る程好きな酒も吞ねえと云ふし、それに不思議でない
 ねえのはあの紙入だ。俺が拘つたに違えねえのだ。何うして彼品が」
 長吉は四方を見て、笑ひながら懐中から紙入を出し、
 『此品だらう』
 『ア、何うして兄貴の手へ』

「間拔なことをしやアがつて、もう少しであの武士に斬られるところぢアねえか、救つて遣りて
 えと思つて、お前の胸をたゝいた時俺の懐中へ入れちまつたのよ」
 『ア、さうか、早いなアそれで判つた。有難てえ、だが併し兄貴は變だなア、とにかく其紙入は
 俺に呉れるだらう』
 「遣れねえ、俺が預かつて置く、拘られた家を探して、ソツと返してやる』

『いよく何うかして居るなア、拘つた品を返すたア聞いたことが無え』
 『三吉、變に思ふのも無理はねえ、俺はある御隠居様の御意見で、今ぢやア生れ變つた眞人間に
 なつた。悪事の時を考へると身震ひが出る。此頃は夜も樂々寝られるんだ。そこで罪滅しの爲に
 仲間に會ふと意見をして改心させて居るのだぜ』

『エツ……』
 「先刻お前が斬られたと思つて、然うで無ければ捕まつたと思ひねえ、今度捕まりやア娑婆は無
 え、三尺高い木の上へ、其首を曝さなきアなるめえ、だから生れかはつて呉れ、こゝが頼みだ改
 心してくれ、なア三吉、お前も立派な商人の息子だ。成程親父さんは面白くねえ人だと、聞いた
 事はあるけれど、俺が改心した今考へると、あの時分お前から聞いたときは、大ぶん考へが違
 つて來た。親父が宜くねえから、俺も悪くなると云ふことは無いと思ふ』

「……」
 ところへ、お待ち遠さまと、膳を運んで來ました。
 「御世話だねえ女中さん。時刻違ひに來て』
 「何ういたしまして、結構なのです』
 『サア、喰べようぜ』

女中の給仕で兩人は飯をすませて膳を下げ、また差し向ひになり、

「お母は丈夫かえ、適には會うのかね」

「達者ださうだ。會はねえけれど」

「達者なら宜いや、親のある内が花だぜ、俺は不孝をして居る内に、お母に死なれて仕舞つた俺を苦しんで、すまねえ事だと今では後悔して居るんだ。お前のお母が、いつか俺に云つたことがある。三吉が居て呉れないので心配して居ます。目が醒れば寝るまで案じてをりますよ。と涙を拭いた顔が、お前に會つたら、また目先に見へるやうだぜ、親はいつ迄も此世の中に居るものぢや無え、孝行のしたい時分に親はなし、さりとてはまた、墓に布團は着せられもせず、俺が手本だ考へて呉れ、お母は人一倍苦勞をして居る人ぢや無えか、云はれねえでも知つて居る筈だ俺は人に意見の出来る身ぢやアねえ、だが今日では云へるやうに成つた。正しい御人と一緒に居るから、自然と此方も正しくなつてくる。人間は正直な人と交際なけりやア不可ねえぜ、永い世に短かい命、それだから少しも餘計に善事を仕て置かなきゃならねえ、それが人間の務めださうだ。斯う教へて頂いてるのだ。それを守つて居るから氣も晴々と、其日々々々を楽しく暮らして居る。三吉、清い心になつて、俺と一緒に御母に會ひに行かう。さぞ寔れて居るだらう。何んなに喜ぶか知れねえぜ、優しくして遣つて呉んねえ、頼むぜ……」

腕を組んでちーツと考へて居た三吉は、落る涙の顔を上げて、

「兄貴、有難い、よく判つた改心する。弟分だと思やアこそ、斯んなに心配してくれるのか、生れて始めての涙だらう。本當に泣いた。併し兄貴は立派な人間になつたなア、大蛇の兄貴を佛のやうにした、御隠居さんと云ふ人に一度會はせて呉れないか」

「ウム、改心して呉れたか、宜かつたなア、意見をした甲斐があつた、よしつ御隠居さんに會はせて遣らう」

「ウン、頼むよ兄貴、俺も今日から蠅の三吉を改ためて、お前が佛のやうになつたから、小佛の三吉とでもならうよ」

「ウン、夫れは宜いなア、ときにお前は何處に居るのだ」

「安宿を泊りあるいて居る。兄貴の宿は」

「日本橋筋の浪花屋六兵衛だ。常陸の百姓四人連れと聞いて來な、判らなきア、白い鬚の隠居さんの供とな、訪ねて來ねえ」

「ウン、吃度行く、早速お母のところへ一緒に頼むよ」

「よしつ、然うなつたら親父にも會ひねえ」

「……………」

『まあ宜いや、其話しは後日の事に仕様、……ちやアそろく出掛るぜ、然うして此紙入は、歸りに届けて遣らう、見物の話しを耳に挟んで置いた。娘達の家は見當が付くから、ア、彼の時は、お前を救うてえばつかりに、この紙入を、さうして心にも無えことを云つてよ。……それから此金は、御隠居に頂いた清い金だ。意見料に遣るよ』

『これを貰つちや、餘まり濟まねえ……』

『まあ宜いから取つて置ねえ、此家の勘定は別にこつちの金で拂ひなよ』

『そんなに貰つちや、氣の毒だなア』

長吉は別れて料理屋を出、急いで来たのは天満の老松町、松屋と云ふ呉服屋の娘たちと、群集の中に話して居たのが耳にありましたので、探しに來た譯、氣轉の利いた男ですから、ソツと紙入を投げこんだ。店に居た先刻の小僧の目に付くやうに、子供は目敏い。

『やア、嬢さんの紙入が此處にあるよ。誰か投こんだやうだぜ、およしどん』

ちらりと横目に見て、早足に浪花屋六兵衛へ歸つてきた。

『御歸んなさい。御連さんは先刻戻つて來なされました』

『然うかい。女中衆、御隠居も御戻りになつたかね』

座敷に這入ると御隠居は、兩人と茶を呑みながら座談のところでした。

『只今、遅くなりまして相濟ません』

『何處へ行つて來たね、あの若い男は知り合のやうだね』

『へい、實は彼奴のことで行きましたのです。氣極が悪いことですが、以前私の弟分で、蝮の三吉と云ふ掏賊でございます』

『ナニ、掏賊、以前のお仲間かね』

『へい、面目ねえことで、それから御隠居さん。彼奴は可哀さうなところも有るのでして、嚙で含めるやうに意見して遣りました。丁度私が御意見を頂いたやうに、野郎涙を流して改心すると云ひました。私も嬉しくなりました』

と委しく語りますのを御聞きになつて、

『それは善い事をしましたな、のう介さん覺さん』

『左様です。さう云ふ人間一人を救ひ出しますと、多くの人の迷惑を除くことになります』

『長さん、一日一善だ、また明日も善い仕事を遣つてお呉れ』

『エへ、、、覺さん介さん。そんなに褒られちやア、氣極がわるいなア、ところで御隠居さんに御願ひがござんす。きつと三吉が訪ねて來ませう。其時は御目通りを許して頂きたいのです。當人が是非願つて呉れと申しますから、ねえ、御兩人からも願つて下さいな』

に御願ひがござんす。きつと三吉が訪ねて來ませう。其時は御目通りを許して頂きたいのです。當人が是非願つて呉れと申しますから、ねえ、御兩人からも願つて下さいな』

「ナニ、また来るのか。此度は胡麻の灰でなくつて、掏賊かな、ハ、、、」

「笑つちやア不可ませんよ介さん、真剣で願つてるんですからねえ」

「會つてやりませう。見へたら連れておいで、長吉も良くなりましたのう介さん」

「さようで、いよく確かになりました。併し御目通りに来る男は改心のしたてで、未だ油断は出来ません。御手廻りの品、御注意を」

「オヤ、情けねえなア、介さんは用心深いや、アツハ、」

その翌晩、町々の見物をして歸られ食事の終られたところへ、女中が呼びに来て下におりた長吉が直ぐ上つて来て、

「御隠居さん。蝮の三吉が参りました。何うぞ御目通りを願ひます」

覺さんは目を丸くして、

「そら來ました。大蛇が蝮を連れて、御用心、御用心」

それから、御目通りを許されまして、御言葉を頂き、長吉から、他言はならぬが水戸の御老公さまと聞かされて、三吉は餘りの有難さに口もきけずに泣いて居りました。感極まると涙が先きとみえます。

この三吉の身の上話を、長吉が申上げました。それによると、三吉の母は、大阪東の淡路町

の菓子商の妻でした。三吉が生れたばかりの時、父親は女狂ひに遊び廻り、奉公人任せで、妻子も忘れて居た。度々の意見も聞かず、煩さい女だと、無理に實家へ返して仕舞つた。三吉を連れさせて、大阪の近在服部の父の家で、夫の様子を聞いて居ると、心得違ひにも、馴染の女を引入れて後妻にしたと、それから三年、縁有つて村の農家正兵衛に望まれ、連子をして再縁した。父は孫の三吉が可愛いので我家に育て、居た。三吉が十三歳の時、大阪の繁昌な土地で奉公をした。商人になりたいと祖父に頼んだ。そこで大阪へ孫を連れて來たのは、宗兵衛も十二年ぶりであつた。娘のこと以來、大阪へ足が向かなかつた。永い懇意の桂庵業定吉を日本橋筋の店に訪ねた。さうして孫の奉公口を、事情を話して頼むと、親切な定吉は、百事呑み込み三吉を預かつた。宗兵衛は安心して歸り。娘のおかつに話したので、おかつも三吉の幸福を祈つて居た。

それから程なく宗兵衛が大阪に来て、定吉に孫の奉公先を聞くと、淡路町の菓子屋淡路屋伊兵衛へ小僧に入れたと、定吉夫婦は氣極まるさうに斯う話した。餘りの意外に返事も出来なかつた事情を知りながら何事だと詰ると、定吉の答には、伊兵衛さんも此頃は眞面目になつたやうだ、店も繁昌だ、丁度小僧を頼まれて居たところだ。同じ小僧に出すなら、實父の家が宜からう。知らないでも親子の情は自然と通じるものだと考へた。然うすれば三吉さんの先行は必ず宜い。代々續いた金持ではあるし、宗兵衛さんも、おかつさんも、口惜からうが、子の爲孫のため、ちー

つと我慢して、私に任せて呉れと云ふ。宗兵衛も怒りはしたが、孫の爲だと聞くと何事も堪えて
 そんなら任せるが、三吉が可哀さうだから、何事も隠して置いて呉れと頼んで歸り、おかつを有
 めて、孫の出世を祈つて居た。

何事も知らずに三吉は、奉公大事と辛棒を續けて數年立つうちに、藪入りの日は祖父さんに、
 好きな土産を買つて、喜ぶ顔を見るのを楽しみとした。おかつも二人の子の母となつた頃、夫
 に逝かれ、三吉が二十の時には父に永別、嘆きの中に二兒を育て、農事の手傳、並々ならぬ苦勞
 を續けて居た。

三吉は、祖父一人、孫一人で育てられて来た宗兵衛が、突然に逝きましたので落膽したが、氣
 を取直してまた働き出した。其翌年の正月、藪入の日は祖父の墓参をして、母や弟達に土産
 を持ち、一日悠くり遊んで大阪へ歸り、定吉方を訪ねると、夫婦は喜び馳走をして呉れた。三
 吉も土産をだして話して居る内、酒に酔つた定吉が、つい喋舌つて仕舞つた。淡路屋の長男であ
 ることを、淡路屋の息子や娘さんは、三吉さんの弟や妹と云つていゝのだと、女房が心配し
 て止めるも聞かず、酒の機嫌でなほ續けるのを、三吉は呆然と聞いて、只何事も云はず、其夜は
 定吉の家に一泊した。

翌日は主家に歸らず、服部へ行き母に其話しをして事情を聞いた。おかつは苦い顔をして、其

時の話しをした。然うして何事も云はずに辛棒して立派な菓子屋になつて呉れると云ひ聞かせた
 辛棒するから安心してお呉れと、三吉は其翌日主家へ歸つた。それから三日目、定吉が青い顔を
 して訪ねて来た。おかつさん御訖に來た勘忍しておくれ、私が酒の上でつい彼時の昔話しを、宗
 兵衛さんに口止されて居ながら、面目ないことをした。そこで三吉さんは、淡路屋さんを家出し
 た。さうして此んな手紙が來た。お母さんに宜敷傳言をして呉れ、私のことは心配しないでくれ
 と書いてある。淡路屋さんにも一切の話しをしたら、旦那は驚ろいて、目をつむつて考へて居た
 が、暫くしてから、俺が悪かつた。三吉を探して呉れ、父子の名乗をする。と斯う云ふ譯になつ
 た。と涙の母を慰めて歸つた。

それからの三吉は、彼地此地と放浪、とうとう蠅の三吉に變つて仕舞つた。さうして長吉の
 弟分となつた。それでもお母に會せやうと、長吉が服部を訪ねたことが二三度あつた。
 と、斯ういふ永い、複雑した話しでありました。はなし終つた長吉が、

『よく御聴き下さいました。明日また御暇を頂きたう御座います。お母の家へ連れて行きますか
 ら、相済みませんが』

『それが宜い、遠慮せずと悠くり行つておいで、それから三吉も、今の心を忘れぬやうにして母
 を大切に、よく勞つてあげなさい』

「へい、御言葉を頂きまして、一生忘れません有難いことでございます」
と三吉は横を向いて、ソツと涙を拭いて居た。長吉は御側に呼ばれ、四五度頭を下げて居まし
たが、三吉に膝を寄せ、

「三吉、勿體ないぞ、お母に土産を買つてやれと仰言つて此御金を頂いた。御禮を申上げな、も
う泣くなよ」

「さうか、兄貴、頂いても宜いのか、ア、有難いことだ。お前も一緒に御禮を申上げておくれ」
三吉はいつ迄も御辭儀をして居た。長吉はホツト一息して、

「御隠居さん。お兩人さんの前ですが、人親となつたら、取譯善い行跡をして見せねえと、子供
の爲になりませんねえ。夫りあア生れつき良い子は別だらうが、大抵は親に似て來ますからねえ
三吉の野郎が、可哀さうなところも有りますと、初めに申上げましたが、エッへ、、、生意氣
なことを申しまして」

「イヤ、生意氣では無い。尤なことだ。お前の云ふとほり、心すべきことだ」

と覺さんは固くなつて答へた。それから長吉は三吉を宿まで送つて行き、翌朝は御暇をいたゞ
いて出かけました。

其翌日歸つて來て、ニコニコしながら、

「只今、有難ふ存じました。お母が喜びましたこと、丸で夢のやうだと云つて、弟達も嬉しが
つて、まア芝居で遣るやうでした。早速祖父さんの墓参りです母子揃つて、祖父さんも墓の下で
さぞ喜こんだでせう。それから夫れと話しは何時迄もつきねえんです。さうして淡路屋の方から
も人を廻して、時々來るさうです。面目ないが一度でも宜いから三吉に會はせて呉れと、餘つ程
悪かつたと後悔して居るやうですね、店も持たせるとか云つて居るさうで、先方が改心して居る
なら、一度會つて遣れと説き付けまして、三吉もしぶく承知しました。其内會ふが、店などは
嫌だ。お母と一緒に百姓をすると云つて、またお母を喜ばせて居ました」

「ウム、夫れは宜かつたのう」

「ところでお母に、内々だよ他へ喋舌ちやいけねえよと、御隠居様の御身分を知らして遣つたら
ウムと唸りましたよ。斯んな嬉しいことは無いと」

「コレ、然う喋舌つては駄目だ。段々知れてしまふと御微行にはならなくなる。これからは
黙つて居なさい」

「へエ、覺さん濟みません。これから氣を付けます。遂喜こばして遣りてえと思ひましてね」

御隠居は笑つて居られた。この長吉や三吉が眞直な道を歩行やうになりましたのも、水晶のや
うに澄んだ美しい御心にふれて、優しい御訓戒を與へられ、改悛せずには居られませんでした

らう。光圀公が一生に、數限りなく救はれたる其人々の話の中の、浪花の奇談でございます。御隠居は大阪に着かれた頃より。御疲れが出て、遠い歩行は御大儀故、近い土地を御見物、人情風俗を御覧になる、今日も四人連れで御出掛にならうとすると、宿の女中が、
『御隠居さん。御見物ですか、高津の正直蕎麥屋へ一度行つてごらんなさい。御土産話しになりますでせう』

『ハア、正直蕎麥、喰べて來ませう』

『御聞になれば、直ぐ判ります。正直蕎麥でも、叱言蕎麥でも、喧嘩蕎麥屋でも』

長吉は目をバチクリして、

『何喧嘩蕎麥だつて、物騒なそばもあるもんだねえ、何う云ふ譯だえ』

『エ、親切蕎麥屋とも云ひます』

『へエ、珍らしいなア、たくさん名があるんだね、其中に喧嘩そばの由來が聞きたいねえ、如何でせう御隠居さん』

『さうですな、聞かせて貰ひませうか』

『オホ、、、初めての御客さんは驚ろきなさるでせう。ことに依ると御客さんと喧嘩になるのですよ。それが正直過るからですの、まア行つてごらんなされると、成程と判りますから』

『大阪はうどんが名物の内だと思つたら、へエ、それぢやアその蕎麥も名物になるだらう。だが初耳だなア、御歸りに見て参りませうか』

『宜からう、寄つて來ませう』

浪花屋を出られて、其處此處とブラ／＼御見物、土地かはれば名も變る。浪花の芦も伊勢で濱萩、見る物聞くもの珍らしいと思召てか、足を止められては、耳傾けて御聞になります。

演者申します。西山公が大阪へ御着になられてからは、あの美しい、優しい大阪の方言、

『お母はん、手引きまひよ、危のおまつせ、もう南地へ來ましたで』

『お、結構なこつちや、あんたがこないに親切にして呉れるによつてな、何處へ行つても案じることおまへん。わて、いつも喜こんでまつせ』

『およしどん。あんたどこへ行きひやりまんね』

『わて、天満へ行かうと思ふてまんねんわ』
また男性の確かりした言葉を、彼地でおぼえましたから、さように述べます考へでしたが、西山公大阪の場面が長講になりますので、關東辯と若し交混になると、相済みません故、すべて關東辯で演じてをります。其思召で御愛讀をねがひます。

御歸り道に、聞いておいでになると高津の入口ですぐ判りました。

「江戸蕎麥 清助」と小さい看板が出てをります。

「此家でございますな、綺麗に掃除がして有りますな、御這入りを」

「覚さんが、暖簾を分けて會釋すると、老公が先にお入りになる。廣い店が一杯の客でした。」

「入らつしやい、此處へ御上んなさい。御四人さんですか」

「さうだよ」

長吉が上つて、奥の方に少し空いて居る場所へ、女中の出す座布団を並べて座りました。

「御隠居さん何になさいます。お兩人は、皆んな蒸籠と云ふのを喰べて居ますね」

「それが宜いの、介さん覺さんは何うだね、長さんは」

「結構です。では申しませう。女中さんや蒸籠を四ツ」

「ハ、ハ、ハ、少々御待ちなすつて」

見ると、御客達はさも甘さうにつる／＼とそばを喰べてをります。變り者の主人はと見廻しますと、店の正面にある帳場の中に座つて居る四十年輩の、目の大きい眉毛の太い色白の男がそれらしいので、見詰めて居りますと、

「御客さま方、今日のそばは如何ですか、近頃江戸そばの味が下つたと云ふ方があるさうで、御氣付きの節は、御遠慮なく仰言つて下さい。充分注意をいたしますから」

「ナニ、味が下つたと、誰が其様ことを云ふんだらう。馬鹿にしていやアがる。この甘いそばを決して心配はいりませんよ」

「さうとも／＼、大阪の名物だ悪口する奴があるなら俺が喧嘩して遣る」

「アツハ、ハ、ハ、喧嘩を引受けますかい。夫れぢやア清助さんが困るでせう、ハ、ハ、ハ、」

「本當ですよ誰が何んと云つても、この味は別だからねえ」

「さうですとも、永い間にそばやも折々出来たが、うどんに押されて皆んな廢めて仕舞つた中に

江戸蕎麥ばかりは盛んになつたね、甘いものはお客が知つてるからね」

「全くだ、一度來たら忘れられない。親切で安價で甘いから」

「エヘ、ハ、ハ、然う御客様方に褒められては氣極りがわるいんですが、まア宜敷願ひます。末長

く何うぞ」

と清助は、ニコ／＼笑つて居ると、御客の方から皆聲をかけて行く。

「御世話でした。また寄せて下さいよ。ア、甘かつた。左様なら」

と挨拶して出る。主人も叮嚀に頭を下げ居る。これを見て長吉は首を傾げ、

「御隠居さん。喧嘩どころぢアござんせんね、優しい男ですわね」

「さうだのう、もう喧嘩は止めたのかな」

「へエ、宿の女中が何か聞き違ひでも、……モシ／＼御客さんに聞きますが、何んで喧嘩そばと云ふのでせう。溫和しい人のやうですねえ」

「エ、それがね、一つ間違ふと怒りますよ。正直過ますからね、時々腹を立てますが、強いですよ。何しろ江戸ッ子を振廻すからねえ、でも直きなほりますよ」

「へエー成程、今日は機嫌が宜いんですか」

「サア、近頃は餘り怒りませんね、尤も御客の方ですつかり氣質を吞込んだから、今では間違ひはありませんよ。初めは恐しかったね、血だらけの喧嘩が毎日でした。清助さんの體は生疵の絶えた事はなかつたね」

「へエー此奴は驚ろいた、……御聞でしたか御隠居さん」

「ハア、珍しい蕎麥やさんぢやな」

そこへ、蒸籠に入れた蕎麥が四ツ出ましたので、喰べてみると成程美味、代りを注文、二ツツツ食しましたが、また三人はお代りをとあつらえるので西山公が、乃公もモウ一ツと注文なると、女中は一寸考へて、帳場の主人へ聞いて居る。

「あの御爺さんの御客さんに、三枚あげても宜うございますか」

「何の御客さんだ、ウム、白い鬚の御爺さんか、不可ねえ／＼、斷わりな」

「でも、あのう、斷わり難いのですから、旦那が斷わつて下さい」

「宜しつ、ちやア三枚だけにして置きな」

と云ひつけて此方を向き、御顔をちいつと、

「モシ、御鬚の御客さん。三枚は不可ませんよ。二ツにして置きなさい」

「さうですか、でも美味からもう一ツ喰べようと思ひましてね、いけませんかな」

「御客さんは幾歳ですね」

ホーラ始まつたぞ、これからだぞ、久しぶりに出會つたぞ、と他の客が小聲で話合ひながら、双方の顔を見競べて居る。蕎麥屋は目を丸くして、スーと老公の脇に来て、

「お幾歳かと聞いて居るんですがねえ」

「私は六十六ですよ」

「さうですか、喰物は歳に依つて考へなきやア不可ませんな、腹八分目と云ふことがありますぜ若い人は三ツぐらゐ食ひませうよ。だが宅のもりは大盛ですよ。二枚喰べれば充分だと思ふ。でも好きな人は別だから、三枚までは賣りますよ。併し、御年寄には二枚と極めてあります。それ以上は御賣りしませんね」

「ハア、左様かな」

『年寄が餘計にそばを喰つて、腹でも下してさ、江戸そばは品物をおとした。それで腹を悪くしたなど云はれちやア、私の家で迷惑だ。止めて貰ひませう。老人は何事でも食物は控目にするものでせう』

『ウム成程』

『御客さん。人間は三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知ると云ふさうですね、御爺さんは定命よりも十六年生延びて居るんでせう。だから他人に云はれないで其くらの事は判りさうなものですねえ、年寄は結構ですよ。でも無駄に年を寄つてもつまらないですわえ何の爲に鬚を生して居なさるのかね』

『ハー、成程』

『ハツハ、、、感心して居ては困りますね』

『イヤ、感心しましたよ。そばやさんの云ふことは尤もですよ。私が年甲斐もなく面目ないことですよ。百歳の童子、三歳の翁と云ふたとえが有りますな、お前さんは三歳の翁ぢや、私は百歳の童子ぢや、アハ、、、』

『然ういはれますと、此方が面目ないが、私は心に思つたことを黙つて居られない性分ですわ云つて仕舞へば根も葉もないが』

『感心々々、餘計に賣つて利益を見ようとするのが當然、それを商人が、お客の體を思つて利益の外に注意をなさるとは、見上げた心ですな』

『エへ、、、斯う云はれちやア、此方の引込が付かないですよ』

『そばやさんは親切だ。のう皆さん、……これでは親切そばやで、けんくわそばやではない。何うして此人と喧嘩が出来るものか』

『それがね御客さん。お前さんのやうに優しく受けて呉れると、何でも無いがね、怒る奴が多いのですよ。それに酒を呑む客とよく間違をしましたよ』

其所へ女房が出て、

『御客さん方、大ぶん御話しが相ますやうで、御茶がはいりました。奥で悠くり召上つては如何でせう。……ねえ御前さん』

『ウン、それが宜いや、皆さん奥へおいでなさい。御茶は自慢ですよ女房が茶好きでね、イエ遠慮はいらない。もう賣切りで、他の御客さんは皆んな御歸りになつた。サア御隠居』

『では、折角のことぢや、少し御邪魔をませうか、サアゆきませう』

『へい、参りませう。この喧嘩屋は質が能いや筋が立つてる』

と長吉は獨言をいひながら御後へ従いてゆく、美しい十疊の間に茶菓の用意が出来てあつた。

「サア、何うぞ此處へ、御隠居さん濟みませんねえ。夫があんなことを申しまして、毎度のこと
で馴れては居りますが、初めての御客さま、さぞ御腹立でせうと、まア御氣の毒さまで、でも相
手になさらないで、まアお悠くり」

「これは御内儀さんですか、御馳走になります。イヤ、中々面白い御氣性で感心してをります」

「御内儀さん。親方は江戸ッ子だつてね、キビ／＼して居て好いねえ、私も江戸ッ子だ」

「あら、御客さんも、さうですか、では御話しが合ひます譯ですこと、御隠居さん方は」

「この御三人は、常陸の御百姓ですよ。私は御供をさせて頂いて居るんです。だが、宿の女中さ
んに此家の話しを聞いて喰ひに來たのですよ」

「まアそれは有難う存じます」

「でも、喧嘩そばやらしくねえでせう。オヤ變だなアと思つて居ると、あれでせう。成程、來た
なと思つた。そろ／＼始めやアがるな、ようし、野郎擲つちまふと……」

「これ／＼何を云ふ」

「エへ、、、これは何うも、つい」

「まア、夫と似て居ますこと。江戸ッ子は氣が短かいのと、手が早いので、オホ、、、」

「それですよ。御隠居さんに叱言を云つて頂いてるんで、まア少しづゝ違つては來ますがね、未

だ時々出るんです。丁度親方と同じでせう」

「よく似て居ますこと、然うなんですよ」

「そばやさんは、顔や手先に疵跡が幾つもありますね、それには面白い御話しもあるでせうね」
介さんも興味をもつたとみえ、聞き出さうとした。

「へエ、江戸ッ子が居るから判つて居ませうが、私は取譯氣の短い方でした。もう十五年後だ
から、二十五の時でした。大阪へ初めて來ましてね、少し寄り處があつて、北の太平橋の脇へ店
を出したのです。ところが江戸そばなんて頭から馬鹿にしてね、相手にしないんです。うどんを
喰つちやア、喰はれねえと云ふんでせう。私は腹が立ちましたねえ、喰はないで悪く云ふ奴が多
いんでせう。泣きましたよ。何しろ江戸三軒の蕎麥屋の一軒と云はれる。本郷湯島の湯島蕎麥屋
で十年奉公して、八歳か九歳から苦勞したのですもの、自慢ぢやアないが、江戸草分の三軒そば
やと云はれた。浅草金龍山脇のそばやと、本所元町のくすやそばにも見習から手傳まで遣つて修
業したんですよ。それを喰へねえと云ふんだから泣きたくなりますよ御客さん」

「さうでしたらう。苦勞をしましたね」

「エ、そこが見込が立たないので、それから四所場所を替へて店の出直しを遣て、漸く高津へ
落ち付いた譯でした。此處は寺町が近いから、おまわりの人が多く寄つて呉れますので、初めか

ら御客は有りましたが、それからが此疵跡ですよ』

『ハア、成程、苦勞でしたな、で疵は』

『何としても、うどんばかり喰つて、蕎麥の美味が判らないでしたね、それに亂暴な奴が居ますからねえ、喰つて錢を拂はないで、こんな物を喰はせやアがつたから腹が下つた。サア醫者にかけろ、金を出せと云ふ奴がたくさん居るんだから遣り切れない』

『ウム、悪い奴が居りましたな、金を出さないと何うなりましたね』

『出したら限りが無い。私は遣らなかつたね、勤定も拂つて行けと云つたのでした。だから毎日立廻りだ。擲つて来るから擲り返すね、一人と一人なら、幾等強い野郎でも平氣ですがね、兩人三人と組で遣つて来やアがるんですよ。その時の跡ですよ。そりやア血みどろでしたね、幸ひ此體格ですから堪へたのですよ。遂二三年前迄續きましたよ』

『夫れはよく辛棒をしましたの、併し、其様な時に、お役人衆へ訴へなかつたのですか』

『初めは御訴へもしましたが、御出役になる時分には逃げて行くんです。それでも後で捕まる奴も有りますが、牢から出て来ると、また来やアがつて、なぜ訴へたと、友達を引張つて来やアがるんです。で後が面倒ですから私は考へたのです。體を張つて一番何うなる事かと、思切つて遣つ付けたのです。それは苦るしかつたですよ。本當の命掛けでしたよ。私が押切つて仕舞へば他

の店も救へるだらうと、死ぬ覺悟をしたのですよ。で體中と云つてもいゝ程疵だらけになつたが其代りでせう。何んな悪い奴でも錢を拂つてゆきますよ。決して亂暴はしませんね、御近所の店に私が顔を出すと、變な野郎が来て居ても皆んな逃げて行きますよ』

『へエー、傑いなア、其處迄よく遣つたなア』

『其次が、堅氣の旦那方でした。酒に酔つてぐすくして居ると、早く切上げて御歸りなさいと意見しますとね、生意氣な奴だと来るんです。酒の上の悪い人が有りますからね、其所で今度は酒を賣らないことにしたのですよ。これがまた面倒でしてね、何うして賣らないのかと、まア種々に遣つて見て、酒は一人に二合だけ賣ることにしたのです。そばは三枚迄、それも若い人だけに、五十過ぎた人には二枚と定めたのです。其くらゐ食つて居れば丁度宜いんですよ。食過ぎるのは毒ですからね、それを考へないで、いゝ年をして三ツも四ツも喰ひたがる奴があるので……』

『おまへさん。何を云つてるの』

『さうか、御免なさいよ。エへ、』

『成程ねえ、喧嘩蕎麥屋に違ひねえ、大阪名物だらうに、氣が付かなかつたなア、尤も私は幾度も来るやうだが、落付いて居ないから判らなかつた。然ういへば三吉が、何處かで喧嘩をして来て、もうそばは喰はないと云つたことがありましたよ。ハ、ア、奴此處で擲られたな、アハ、』

「そばやさんの苦心談を聞かせて貰ひまして、隠居さん初め私共も感心しました。有難ふござい
ます」

と禮を述べて介さんが勘定を拂ふと、御隠居は頭を下げられ、

「これは、長座をしましたな、御世話になりました。また寄せて貰ひませう」と御立ちにならうとすると。

「ア、モシ、皆さん未だ宜いぢやアありませんか、御宿は何處ですか」

「日本橋筋の浪花屋さんですよ」

「さうですか、御國は何地ですかね」

「常陸の國です。天神林の百姓で光右衛門と云ひます。村の若いものでな、介三、覺三、長吉で
すよ」

「上方見物ですね、これから何處へ行きますかね」

「中國筋までも、隠居さんの供をするつもりで来ました。丈夫ですからね」

「すると、未だ悠くりして居るんでせう。来たついでに見られるだけ見物させてお上げなさいよ
お年だからねえ、再度は來られないだらうから」

「さうですねえ、御客さん方播州廻りや、紀州の見物、それに高野山へおまゐりをなさいませ、

それから四國廻りをなさつたら如何、弘法大師の、八十八ヶ所をおまゐり……」

「おい、おやす、おまへの云ふやうには廻られまいが、でも出来るだけ見て行くのですねえ

御隠居」

「ハア、見せてもらいませう。達者ですからな、相當歩行ますよ」

「それは結構ですね」

と云ひながら、女房に小聲で何か話して、

「ねえ御隠居さん。皆さん、明日から私の家へ御泊りなさい」

「エ、此家へ」

餘り意外なので、覺さんが一番先きに答へて、御顔を見、介さん長吉を見ると、同じやうにニ
ガ笑ひをして居る、

「お前さんが氣に入つた。御宿をしたいんですよ。立ち入つた事を云ふやうだが、宿錢は一切
御断はりますよ。宿屋ぢやア無いから、何月でも居て下さいよ。何うですね」

「そばやさん。御親切に有難う。併し、初めて來た私達を、何うして泊めてくれやうと思ふので
すかね」

「へエ、私が先刻、御爺さんの側へいつて、ボン／＼云ひました時、誰だつて顔の色が變るもの

ですよ。さうして客に向つて何を云ふ、ぐらゐな事はいふもんだ。後では笑つても、其時は屹座怒りますよ。そこで一寸、小喧嘩になりますね、今迄に幾度有つたか數へられませんよ」

「ハア、其様に有りましたかな」
「ところが、驚ろいたね、ビクともしない。顔色どころか、平氣で笑つて居る。其返事ぶりの落付いたこと、私の云ふことを、ハイ／＼と何でも聞いて呉れる。まア珍らしい人だと思つたね、斯う云ふ御爺さんを世話して見たいと考へた。それに悠くり見物をさせて上げたい。それにやア安心して居られる家が宜からうと、さうして懷中も餘り樂でも無ささうだから」

「オヤ／＼、こりやア驚ろいたね」

「おまへさん、考へて口を御聞きなさいよ」

「濟まねえ／＼、御免なさい。遂腹にさう思つたものだから」

「アレ／＼、開つ放しだなア此人は」

「ね、泊つて呉れるでせう。さう決めた」

「まア待つて下さいよ」

「御客さん。お泊りなさいよ。夫は云ひでしたら聞かないのですよ。皆さんが泊つて下さらないと、また喧嘩になりますよ」

「アレ／＼、へエー、喧嘩に……」

「オホ、今迄に幾人も泊てあげましたのです。知らない方でも氣が合ますとねえ、ですから宅の者は馴て居ますわ、決して御心配なく、それに夫は兩親に早く別れて居ますから老人が好きなのです。御聞きの通りちよいと云ふ事が變つていきますので妙に思ひなさるでせうが、これでも正氣なのですよ」

「オイ／＼、止せよ、氣は確だぞ、……では御隠居、明日宅の若い者に皆さんの荷物を運ばせませから、……オイ若い者は二人、浪花屋さんへ行って、皆さんの荷をとつて來な、判つてゐるか日本橋筋の浪花屋六兵衛さんだよ」

「へい、承知しました。早く行って來ます」

「ア、モシ、一寸待つて下さい。御親切は有難いが矢張浪花屋に居りますから、此家へ御世話をかけては濟みませんので」

と、覺さんが手を振つて斷わりますのを。
「宜いんですよ。遠慮つばい人達だなア、御隠居が承知なのに、皆さんが不承知の譯はないでせう」

「御隠居は未だ承知して居ませんよ。ねえ御隠居」

「アハ、、、これは變つて居るのう、ハ、、、面白いことぢや」

「御隠居、歸りませう」

「ウム、そろ／＼戻りませうかな」

「何うも御世話になりました。御馳走さまでした」

「御歸りですか、おかまい申しませんで、このお菓子を御持ちください。お邪魔でも」

「有難う、では左様なら」

「皆さん待て居ますよ。明日迎ひに遣りますから、遠慮しないで、自分の宅だと思つて來なさいよ」

「ハイ、御親切に有難う」

そばやを出た老公はじめ、笑ひながら、中にも長吉は吹出して、

「あの調子ぢやア迎ひに來ますよ。今夜の内に宿替ですnee、ハ、、、」

「アハ、、、併し親切な男ですな、珍しい氣性であります」

「成程、あの様子では喧嘩にもなりましたらう。でも落行ところ眞實のやうですから、遣り通した譯でせう。兎に角面白い人物です」

「さうぢや、なか／＼面白い。味のある男ぢや」

話しながら浪花屋へ御歸りになると、女中が出迎へて、

「御歸んなさい。御隠居さん方、江戸そばへ御寄でしたか」

「ウム、喰て來ましたよ。美味かつた」

「あの、喧嘩そばの由來、御判りになりました」

「判りましたよ。よく判つてのう。アツハ、、、」

「オホ、、、」

「女中さん驚いたよ。私は度々大阪へ來たのに、氣が付かなかつたnee、威勢の宜い蕎麥やだねえ、成程あれぢやア浪花名物の中に這入るだらう」

「さうです。本當にnee、それに御内儀さんが優しい人で、何を云はれてもニコ／＼笑つて御亭主にさからいませんさうで、中々出來ないことだと評判ですよ」

「フーン、感心だなア、私も女房を貰う時には、亭主に一々逆らはないやうな女を見立てることだなア」

「御客さんは未だ御一人ですか、御世話しませうかね、其御顔なら行き人がありますよ。美男方ですもの」

「煽るなよ。御隠居さんに聞こへると氣極が悪いや、未だ女房どころぢやないんだよ」

「オホ、、、、あの、直ぐ御風呂が宜ろしうございます」
其翌日、朝食を終りましたところへ、女中が来て、

「御客さま、江戸蕎麥の若い衆が三人見へまして、御荷物を運びに來たと申して居ります。さうして今晚から江戸蕎麥さんへ御泊りになるさうで」

「へエーさうかい。來ましたよ御隠居さん。介さん覺さん。來るだらうかとは思つて居ましたが變つて居るなア、斷つて來ませう」

と長吉が立ち上るを、御とめになり。

「まア待ちなさい。のう覺さんや介さん。折角の親切だから二三日でも世話になりませうか、それに彼家に居つたら、私と云ふことが判らんで宜いかも知れぬ。ウフ、、、」

「成程、御宜ろしいでせう。それに、御話しの種にも成りませう。ハ、、、」

「初対面の人達を、我家に泊めやうとは、さても變つた親切ですなア」

「妙なことに成るもんだなア、水戸の黄門さまが蕎麥屋に御宿とは」

「ア、、、これ〜」

「へい〜、申しませんです。つい……」

長吉が若い者達と一緒に、荷物といつても少しばかりの品を、江戸蕎麥へ運んで、其夕刻御出

掛になりました。清助夫婦は喜んで、種々の取持をして呉れます。

「まア、御隠居、宜く來て呉れましたねえ、皆さんも一緒に、實は何うだかと思つて居ましたよ初めて會つて氣味の悪い奴だと、昨夜の内に何處へかそつと宿替をなさりやアしないかと、昨日も話した通り、氣が合と誰でも泊て御世話をしたく成る物だから、エツへ、、、永く居て見物をなさいよ」

「何んでも用を云ひ付けて下さいまし、御氣使ひなく」

「イヤ、待遇を受けましては御氣の毒ですから、家の人達と一緒にして下さい。御客抜かいでなく、不思議な御縁ぢや、有難い御厚意です」

「どうか何分宜敷く」

「折角の御親切ですから、御邪魔に參りました。宜敷願ひます」

「何うも妙な御縁ですねえ、初めて來ましたばかりなのに、氣味が悪いから、昨晚の内に、逃さうかと思つて……」

「これ〜、何を云ふのだ」

「御隠居さん。此人は剝出の話をするから宜いですねえ」

「ハ、、、、變り物でう。氣に掛んで下さいよ」

「變りものなら夫とは一さう氣が合ませうよ。オホ、、、それから、八疊と三疊をお開けして有りますから、何うぞ御悠るり」

其夜は三疊の間に長吉、八疊に三人が御寝みになり。翌日から續いて御見物、……夫婦の親切を奉公人迄が見習つて居るものか、宜く行届いたもので、口の聞き方は荒いやうでも一度話し合と慕しみの持てる清助に、二三日で充分馴染となり。長吉杯は兄弟のやうに話すのでした。

「オイ、長吉さん。明日は十五日で店がとりわけ急がしいから、出前の方をお前、手傳つてくんな」

「なに、出前を、俺がか、こいつア驚いたなア、宜しつ引受た。持つて行こう。どうせ近所だらうから」

翌朝、食事が終ると長吉がにこ／＼笑ひながら、江戸蕎麥の印半纏を着て居ますのを御覽になつて、

「長さんや、何を笑つてをる。其姿は……」

「御隠居さん。御願ひですから長さんだけは止めて下さい。介さんや覺さんとは違ひますからね何ぼ何でも、餘まり勿體なくつて氣が痛みましてねえ、へ、、、何うぞ、それから此半纏ですか、エツへ、昨晚頼まれました、今日は十五日でまた特別に急がしいさうで、出前の手傳い

を遣つてくれと云ふ譯でして、一日だけ蕎麥屋になりますので、へ、、、、面白いものです」

「それは御苦勞ぢや、確かに手傳つて御遣り」

「へい、畏りました」

介さん覺さんも笑つて居る。其内に時刻は過て、寺町通りに近いものですから、墓參の歸りの人々が、少し早いけれども名物蕎麥屋、寄つて行かうとボツ／＼來客、それから／＼と續々に繁昌、出まへ持も急がしくなつた。外からの註文があと／＼と續くので、長吉もそろ／＼働きた出した。見ておいでになると、二人の出まへ持とは違つて流石に長吉、ボン／＼云ふだけ有て氣轉の利いた働さぶり。蕎麥の這入た岡持を下げて、出て行たかと思ふと、もう歸つて來る。また出かける。すぐ歸つて後を持ってゆく、其早いこと一人目に立ちますから、清助も感心して、

「長吉さん御苦勞だねえ、晩に御馳走するから頼むよ。アハ、、、口も八丁手も八丁、中々役に立つなア、馴ねえ人のやうぢアない。つゞいて當分頼まうかしら」

「冗談ぢやアない。一日で願ひ下げだよ。へ、、、、オ、後を出しなよ。早く／＼」

「ハ、、、介さんや、覺さん、長吉の威勢のよいこと、面白いやうに働きますぞ」

「さやうです。よく喋舌ますがよく働きます。小氣味の宜い男であります」

江戸そばは喜んで、にこ／＼しながら、

『今日の急がしさを、御蔭さまで手傳つて貰ひまして助かりますよ。助けついでに、濟みません
が介さんも覺さんも店を手傳つて下さいな』

『私達も……併し、役に立たないだらうね』

『マア遣つて下さいよ。居ないよりは増だから、上つて喰ふお客の下駄の間違はないやうに氣を
付けてねえ』

『ハア、下駄の番人か』

『覺さん、介さんも手傳つてあげなさい。話しの種にもなりますぞ』

『ハイ、承知いたしました。居ないよりは増ださうで、アハ、』

『モシ、介さん笑つて居ないで、早く頼むよ、其所の御客さんに湯をあげておくれ、覺さん、犬
が二疋這入ってきた追拂つてくんね』

『まアお前さん。介さん覺さんまで御願ひしたの、御氣の毒さまねえ本當に』

『ア、犬が草履をくはえてゆきやアがる。介さんの役だよ』

『オヤ、畜生々々、まて、草履を返せつ』

『アレツ、犬と問答してる。世話がやさきれねえ』

『老公は思はずブツト吹出した。其御顔を見返つた清助は、』

『隠居さん。使つては濟みませんが、帳場を頼みますよ』

『私も……』

『へエ、一人病氣で、いつもの手傳ひが来ないものですからね、此通りの御客さんと出前でせう
私が立つたり座つたりで、をち、帳場に居られませんので、此所へ座つて帳面を記して下さい
な、頼みますよ店と出前の御注文をねえ』

覺さんは頭をふり、手を振って御止め仕様としたが、老公は苦笑しながら、帳場の中へ御座りに
なり。

『出来ませうかな、まア遣つて見ませう』

『遣れますとも、字は書けるんでせう。判りさへすれば宜いのですよ。悪筆でも間に合さへすれ
ば』

『勿體ないことを云ふ。悪筆でも杯と、そして帳場を、知らぬことゝて咎むる譯にもゆかぬが、
相濟ぬことだ』

と覺さんは頭をさげた。筆を御持になつた老公は、次から次の注文を、出前と店とを書き分て
達筆の御方ですから、早口に呼ぶ聲をサラ、と御記しになる。其度ごとに長い白髭が動く
のです。その姿勢の正しい上品な態度に、清助は見入つて急しい中にも聲をかけ、

「隠居さん。字は上手なア、それに達筆だねえ、髭が立派で、良い帳場だなア、續いて頼みたいな給金は氣張るが」

老公はます／＼苦笑をなされて、筆を走らせて居られると、
「蕎麥屋さん。今日は見馴ない人達が働いて居るね。此店は年中繁昌だからこのくらゐな人は居ても宜いんだよ。然うすれば御客を待たせないでも済むんだよ」

「然うですねえ。さうしたいと思つて居るんですが、此人達は、旅の御客さんでね、一日だけ助て貰つた譯なので、何うも氣に入つた者が来て呉れませんよ。辛抱する奴が少なくなつて困りますよ。私が八ヶ間敷と云つてね、だが八ヶ間敷云つて御客を大切にするやうに言付けるんです。蕎麥も、つゆも注意をしてねえ。夫れだから繁昌するんですよ。それが判らないんですから……」

「尤だ、だが江戸蕎麥さん。帳場のお爺さんは親類かね、初めて見たよ」

「ウ、ン、違ひますよ。一寸した事から懇意になつて、宅に居て貰ひますよ。でも行々は親類どころじやない。親子になつて貰ふ考へですよ」

老公は呆れて、筆を止められた。

「それは宜いねえ。上品な宜い親父さんだ、美しい髭だなア、さうなると江戸蕎麥がモー一つ名が殖るぜ、髭そばとな、アハ、……」

他のお客達は、此話しにつれて、御顔をじろ／＼見るものですから、下俯向て書きつゞけて居られると、客の出入は繁くなるばかり。ところへ侍の客が一人這入て来ました。四十二三にもならうか、立派な身形、威嚴のある中に笑顔で、馴て居ると見へ、人を分て店の隅へ座りました。

「旦那入つしやいまし。半月ばかり御出になりませんね」

「ア、急がしいので無沙汰をしたよ。半月来ないと永いなア」

「田中の旦那入つしやい、何うかなさいまして、御風邪でも」

「イヤ、御内儀さん何ともないのだよ。次々と急がしかつたもので」

「それなら宜ろしうございますが、おそばがお嫌になつたのではと、オホ、……まア安心いたしました。……御酒とお蒸籠を早くね、田中様ですよ」

やがて、其侍は前に運んだ膳の上の酒を、楽しみさうに蕎麥を喰ながら飲んで居る。二合の酒に二つの蒸籠が残り少なくなつた頃、ちよい／＼目を付けて居た帳場の中から、御顔を上げられたところを眞向に見た。すると侍はちり／＼と後へ下つて、箸を持つ手がぶる／＼と震へた。酒も見る／＼醒てるやうすに、内儀は妙な顔をして、

「お前さん。田中の旦那が變ですよ」

「何うしてだね」

「だつて、御隠居を見たらふるえ出しましたよ。あれつ、御覽なさいよ。だんく後へ下つて、さうら、でせう」

「フウム、成程、此奴は妙だ。ア、旦那が隠居の方を向て御辭儀をして居るぜ」

「さうねえ。いよく變だこと、……お前さんは何う思ふ」

「さア、ことによると隠居は金貸かも知ないぜ、田中さんが借金をうんとして、江戸に居た時から、其儘百も返さねえで居て、今突然に會たのちやア無いか」

「何とも知らないよ」

と、夫婦は小聲で話して居ると、侍は代金を膳の上のせて、腰を低くして、頭を下ながら足音も静かに外へ出て、そつと清助を呼出し、

「主人、あの、白い髭の御老人は、何處の御方だ、然うしてお前の家に何時からおいでだ、何う云ふ譯で御知あひになつたのか」

「旦那、何うしたのです。隠居さんを見て、可笑ですわねえ。あの人は常陸の百姓で光右衛門さん供が三人付いて上方見物に來たのですよ。店で喰て居る内に話しが合つて泊てあげたのです。介三覺三長吉と四人ですが」

「ウム、前には何處にお宿を定めて、御泊りで」

「旦那、イヤに叮嚀ですわねえ。あの隠居さんは金貸ですかね」

「これく、何を云ふのだ、違ふく、兎に角失禮の無いやうに、隠居々々杯と云つては困るなア」

「夫れちやア御隠居さんは何ですわね、聞かして下さいな、ねえ旦那」

「サア、夫れが、今は一寸申されぬ。判然わかつたら申すが、夫れ迄も友達づきあひは不可ぬ。御無禮のないやうに、若しも御宿が變るやうならば直ぐ知らせて呉れ」

「承知しました。でも私には何が何だか判らない。變手古だなア」

「今に判る。それから帳場を願ふのはよくないね、また來るから」と急いで歸つて行く、後姿を見送つて宅に入ると、隠居さんは矢つ張筆をとつて居る。介さんも覺さんも手傳つてをる。長吉も冗談を云ひながら出前の方を働いている。これを見て内儀のお

やすは氣兼ねはじめた様だが、清助は平氣で、遠慮なく話し掛て居ました。日暮前に賣切となり店を片付けて一同夕食、食事が終ると清助は、

「御隠居さん有難う。皆さんも有難う。御蔭で今日は助かりました。毎月、一日と十五日、二十八日は、目が廻るやうに急がしいのでしてねえ。介さんも覺さんも、立ったり座つたり疲れたでせう。長さんは足が痛いだらう」

「本當にまア済みませんでしたこと、御蔭さまで大助かりでございました。有難う存じます。今日のやうに調子宜くいつたことは珍しいのです。これも御手傳ひのおかげですこと、宅の人達も疲れたでせう。……ねえお前さん。今日が済んだら一日御客さんの御案内をして、悠くり遊んでおいでなさいよ」

「ウン、然うしやう。……ときに御隠居、疑る譯ぢやアありませんが、常陸の百姓光右衛門さんでせうねえ」

「さうです。だが、隠居さんの事を何か聞いて居るお侍がありましたねえ」

と介さんが口を入れた。清助は合點々々をしながら、四人を見廻して、

「其ことなんです。先刻の方は、天満與力の田中源内といふ御役人さまですよ。御隠居を見て眞青な顔になりましたね、急に歸られたのですよ。私を呼出して、御無禮の無いやうに、また来るから、帳場などを頼んでは不可ないと云ふ譯で、何か人間違ひでもして居なさんでせう。夫れとも隠居さんは偉い人ですか」

「ハ、……、偉い人かとは宜いのう」

「でもねえお前さん。お顔を見ると御上品で偉い御方かも知れませんかよ。それに御飯も多んと喰ないし」

「變なことを云ふなよ。偉い人が俺の宅へ泊りなさるか、……ねえ然うでしやう皆さん」

「然うだとも、俺たちは百姓ですよ。ねえ御隠居さん。人間違ひですわねえ」

「ウム、ウム然うだ……」

「今夜は早く御寝みなさい。疲れたでせう」

それから程なく、寢所へ入られると、長吉が四方を見廻し、小聲で、

「そろ／＼露見ですよ。與力が見付け出したんでせう。道理で内儀さんの言葉が急に叮嚀になつて、私達を呼ぶにも御の字を付けて、先刻出前から歸つて來たら、御長さんと、呼やアがつた。不意を喰つて驚いたね、女と間違へている。へ、……、」

「アハ、……、これは面白い。お長さんか」

「ハ、……、滑稽だなア」

「アツハ、……、お長さんとは優しいなア」

「御隠居さん。皆さんも何がそんなに可笑のです。よく笑ひますねえ」

「エツへ、……、思ひ出し笑ひでさア、隠居さんの帳場が似合いましたと云つて、介さん覺さんの働きぶりが、板について居るつてねえ。へ、……、御寝みなさい」

「さうですか、アハ、……、此方も釣込れた。御寝みなさい……」

さて、翌日は泉州堺迄御出掛にならうと仰言る。今迄は足の疲れを補ないながら、近いところを見て居られたが、今日一泊の思召で、清助夫婦にも話されて、高津を出でられ今宮へ、天下茶屋を過ぎて住吉郡に出、住吉神社に御参拜、それより堺に御着、大阪よりは僅かに三里と申しますが、此處はもう和泉の國、併も名高い堺にまいられました。途中に名所を御見物、この地の古跡を訪ねられ、海に面した勝景を楽しまれ、あの大蘇鐵の邊に腰を下されて、

「そろ／＼宿にゆきますかな」

「お疲れでせう。ぶら／＼御歩行は草臥ますもので、併し、住吉の松林と海濱、堺の大濱、見事な風景でございます」

「気分も晴々いたすのう。では参らうかな」

長吉がきめて來ました濱屋と云ふ宿に、お着になる。此家は商人宿で一杯の客、ごや／＼と隣室の話し聲で、中々眠りにつけませぬ。それに蚊がぶん／＼、蚊帳の中へ這入ってくる。長吉が大聲で、

「蚊帳を取替てくれないか、御手数でも頼むよ。蚊が這入て寝られないから」

宿屋の女房が笑ひながら、

「御客さん。御氣の毒さんですが我慢して下さいよ。もう蚊帳が出切ましてねえ。それ一ト張し

か無いのですから、蚊帳のあなを紙きれで結んでくださいな」

「オヤ／＼外に無いのかい。穴だらけで結びやうがねえや」

「御客さん。済みませんねえ。蓬萊の蚊帳で、御免なさい」

「蓬萊の蚊帳つて何んだい」

「オホ、／＼、御存じないのですか、鶴と龜が舞ひ遊ぶ、と云ふ譯で、御目出たい蚊帳だと思つて、我慢をなすつて」

「へエ、成程ねえ。釣と蚊めが舞遊ぶか、ハ、／＼、何が目出度のだ。馬鹿にして居やアがらあ、また飛込んで來やアがつた。オヤ、蚤が居るぞ、いやにチク／＼すると思つたら、痒々これは堪らない。御隠居如何ですか、介さん覺さん。何うです。兩方から攻られちやア遣り切れねえ」

「これは可成堪へるのう。チク／＼するぞ」

「蚤と蚊ではかないません。いま／＼での大廣間の方が樂でしたが、夏の斯う云ふ宿は、樂ではございませぬ。御起になつては、蚤退治を致しませう」

「私は蚊退治を引受ます。長吉は蚊帳を震ひなさい。それ、それ」

「へい、承知しました。サア震ひますよ。ア、不可ねえ、釣手がはづれた。今釣りますよ。オヤオヤ此んな大きな穴がある。あれ／＼……」

「八ヶ間敷やい、隣の奴等静かにしろい。騒々しくつて寝られやしない。黙つて寝ろよ」

「何を、生意氣なことを云ふな、隣の奴等か」

「これ〜、長吉黙つて居なさい」

「へい」

と蚊帳を釣り直して、寝やうとしたが、ブーン〜、チク〜、夜半の頃迄眠りに付けませんので、皆目をばちくり。長吉は起直つて、

「如何でせう。ぶら〜御歩行に成つては、夏の夜道はまた別の味がござんすぜ、これから夜の景色を見ながら大阪迄、夜明には丁度着きますから、斯うして居るより樂でせう」

「ウム、介さん覺さんは何うちや」

「御隠居は如何ですか、御疲れは、私共はいづれでも」

「それなら、出ませうか、疲れもとれたから夜道も涼しうて宜からう」

そこで、宿の拂ひをすませて表へ出られた。そよ〜と吹く涼風に、汗ばんだ體もすう〜として、静かな夜道をぶら〜と、お話しながら、

「長吉や、此方が樂ぢやな、お前は馴てをるのう」

「へい、蚊と蚤と、おまけに奴鳴られちやア堪りませんや、驚きましたよ。飛んだ宿をさめて済

みませんでした」

「イヤ〜、數泊の中にはさま〜の宿もある。これもまた面白い」

「エッへ、面白くもござんすまい。愚痴を仰言らない方だから、済みませんでした」

「御隠居、月が見へます。雲を離れまして」

「オオー、良い月、また一段の美景ぢやのう」

「御隠居さん。もう大和橋へ参りました」

「オ、一ト休み致さうかな」

「ハイ、堺と住吉の間の、この大和橋は有名の由、風情のある橋名でございます」

「さうぢや、宜い名であるのう」

橋の欄干に寄か〜つて見た長吉は、

「この橋は確かりしてをります。寄り掛りまして大丈夫です。こちらへ何うぞ」

「さうかな、ウム、此處は宜いのう」

と、寄りか〜られて空を見上げ、

「ア、名月であるのう……」

月に、一禮をなされて恍惚と見とれて居らる〜のを、長吉が、

「今夜の月を十六夜の月と申すさうで、夫れに付いて思出しました御隠居さん」
 「何を思出したのかな」

「エ、ー、あの、初めて御目にかゝりました小田原の宿で、甲州の商人から聞いたのですが、武田信玄公が十六夜の名月を見て、

「誰も見よ滿れば缺くるものなるを十六夜空や人の世のなか」
 と書いて板垣駿河守といふ、名高い家來に送つたら、陣中で直ぐ返歌をしたさうです。

「十六夜の月は缺くとも武士の忠義はかゝぬ大和魂」
 と上杉謙信公と戦の最中、少しの間に月を見て歌をよむと云ふのですから、信玄公も偉いが、

板垣といふ旗下の大將も偉いものですねえ。十六夜に大和橋、大和魂の歌、何だか似通ひましたやうに考へまして、思ひ出しました。如何でせうか」

「成程、宜く覚えてをつたの、風流と武將、英雄尙餘裕あり……」

「オヤ、御隠居さん御覽なさい。橋の下に人が居ますよ。ねえ介さん。ホーラ、覺さん、居るでせう」

橋の下を御覽になると、真中を水が流れて左右は河原、水にちら／＼月が寫つています。其右寄りの方に、寝て居た人が今起上つた様子です。然うして橋上を見上げてをります。

「御隠居さん。乞食ですよ。橋の下に寝て居たんですね、目を醒してむく／＼起したところですよ」

「さうぢやな」

懐中から紙を二三枚おだしになり。小錢を入れて一包にし、ぐつとひねつて、

「それ、投ますよ。受なさい」

ポーンと、おなげに成つた。すると乞食は紙包みを手にとつて、欄干を見上げ、右の膝を立てて、ビューツと投返し、

「返したぞ、貰ひたく無い」

乞食の様子に、思はず顔を見合せましたが、老公は笑顔にて、

「何か氣に入らぬ事があるかね、何を怒つてをるのだえ」

「ウム、判らなければ云つて聞かせやう。惠んで呉る志しは有難いが、禮を知らぬ人の惠は受たくないな老人、他に若い者も居るやうだ橋下迄なげ下りて来て、手に渡しては呉ぬ。投るとは何事だ、紙が破れて錢が散つたら、見失ふ錢もあるだらう。通用金を一枚なりとも失ふては濟むまい。其昔、青砥左衛門藤綱と云ふ奉行は、僅か三文の錢を河中に落したとき、多くの人を雇つてこれを探し出したりと、其心掛の勝れたること、然るに年甲斐もない。今の行爲を嫌ふ、それだから返したのだ」

長吉は堪り兼ねて欄干から半身乗り出し、

『ナナ、何を、生意氣な事を云ふない』

『あゝこれ、お待ちつ』

『へい、でも餘りなことを云やアがるんで』

『まア宜いから、黙つて居なさい。……お乞食さんや、成程尤ぢや、併し私は侮つて投た譯ではない。橋下へ下る道があるのか、夜のことではあり。道不案内のこと、夫れに、お前さんを見て氣の毒に思ひ、少しも早く志しをあげたいと思ふたので、年寄の氣短かに思はず投たものですそれ投ますよ。と短い言葉の中に、惠む志の挨拶もこもつて居つた氣で、まア機嫌を直して受ておくれ』

『ウム、判つた。併し一旦返したのだから断ります。どれ、月でも悠くり見やうか』

乞食はくるりつと、向をむいて空を見上げ、アアツ、と深い息をついて居る。

『御隠居さん私が、手渡しをして來ます。癪に障る野郎だな、……折角くださるのに』

『争つてはなりませんよ』

『へい』

と、答へて橋を渡り。川に従て四五間ゆき河原へ下りて乞食に近づき、

『サア、御隠居の志した貰つて置ねえ、オイ受取らねえか、……此所迄下りて來たら好いだらう』

『もう判つて居る。一度返したのだから、断ると云ふてをるでは無いか』

『イヤ剛情な奴だなア、折角の思召だ貰ひねえよ。俺も河原まで來て、引込がつかねえ』

『月見の邪魔だ、橋上へ行け、もう云ふな』

『何だと、ヤイ、傑さうな口を聞くな、斯うなりやア腕づくでも渡して見せる』

乞食の右腕を掴もうとすると、ボンと胸を突かれてヨロ／＼と後へ下つた。長吉は赫として、

『野郎、もう勘辨しねえぞ』

右手を上げて打つてかゝると、ヒラリ、體を變して長吉の帯を掴んで投倒した乞食の早業、此時、橋上から、問答不穩と下りて來た介さんが、止めやうとする間に長吉は起上り。

『投やアがつたな、野郎何うするか見ろつ』

飛付て行くと、バタリツと投飛ばされた凄腕前、乞食は介さんをつつと見て、

『貴様も來るかつ』

と、身構へた。鋭い兩眼

『ウム、相手にならう。來い』

云ふが早いか、組付く介さんを、

「エイッ」
足を拂つて左に投た。コロリッ、と廻轉して立上つた。介さんも飛鳥の早業、
「遣つたな」

二度目に組んでゆくを、腰投に掛けやうとするを、巧にそらして三四度揉合うち、肩にかついでドーン、と投た。乞食はくるり廻つて立上つた。

「中々できる。サア来い」

「何を」

兩人は確かり組んで、押つ押されつ、投れば投返し五角の様子、もう長吉の出る幕では無くなつた。老公は覺さんと、河原へ下りてちーつと見て居られる。痛い足を引づりながら長吉も、…水戸家三十五萬石の廣い御家中に、五本の指に數へられる劍剛、佐々介三郎も、危く見えるくらゐ。強い乞食の體術に、覺さんも出やうとするを、御止めになり。

「兩人待てつ、双方控へよ。もう争ふな」

「ハッ」

介さんは、組んだ手を引いて飛退いた。乞食は油断なく廻圍を見て居る。覺さんは老公に耳うちをして、振り返り。

「下に居れ、この御方は、水戸家の御老公ぢや、光園公であらるゝ、内々の御旅行である」

「エ、ッ」

疑りの目で、御顔を見ながら二足三足跡へ下つて、自然と河原へ座つて仕舞つた。

「ハッ、ハ、ー、何とも以つて申譯もなく、水戸の黄門様、西山公であらせられましたか、知ぬ事とは申しながら、…御説を仕つります」

「イヤ、其心配はいらぬ。頭を上げなさい。サア兩人とも仲を直して語りなさい。介さんも

長吉も此處へ御いで」

「御供の方々、私の片意地から、存ぜぬ事とは申せ、誠に失禮いたしました。何卒御用捨を」

「ウム、このやうに云ふて居るから、兩人とも、忘れて遣りなさい」

「ハッ、私は忘れしました。併し強い男であります。…長吉何うした」

「へエ、何とも有りませんよ。…御隠居さん。御心配をかけましてへイ、何うも相濟ません。物の途端でつい。…だが乞食さん。お前は強いなア、足を蹴られちやつた。痛かつたぜ、喧嘩

になれてるな、俺はたいがいの奴にやア負ねえつもりだが」

「お前さんは武士であつたらう。何うして乞食になつた。仔細を語りなさい」

乞食は下を向いて暫く考へて居りましたが、靜かに顔を上げ、

「御話し申上げます。仰の通り武士で御座ります。備中の國松山の城主、水谷出羽守の臣堤軍次郎と申します。父の惣左衛門が、上役大館郷左衛門に討たれました。昨年九月九日に、何ういふ譯かと申しますに、大館は怪しき遊女を二三人も連れまいり。我娘分となし主君へ妾として差上げ、酒色に御行跡を亂しまして、遂に彼は中老正席に立身なし。ますく我意を振ひます故。父が意見をしましたが少しも聞かず。爲に殿へ直々御意見仕つりましたを意恨に思ひ、不意討されました。私は父の仇討を願ひ出ましたが、殿の御許しが御座りませぬ。夫故大手の榊形で出合ました時、斬つてかゝりました」

「ウム、然うして……」

「残念ながら、十餘人も付いて居りました爲、力及ばず取逃しました。再起を計つて居りましたが、殿の御怒り強く、大館を討たんとした者は斬捨よと、嚴重の御達しなりと知らせて呉る友もありませんので、殊に大館は家中一番の利け者にて、彼に逆らふ者は松山には居られませぬ。されば拙者に同情をして呉ます人々もありませんので、一度は立退く方が宜いと云ふて呉ます者もあり松山近方に身の置き所もなく、遂に此邊迄参りました。此後は、殿が江戸へ参勤交代にてお出立の途中を待ち、御側離れぬ大館を討ちたく、時の来るをまちをります。併しながら、近頃心痛に存じますは、殿の行状亂れ給ふて、領分の政事に無理を生じますやうな場合が、若しも之有時は

江戸表へ聞へ、重き御役人様方の知るところとなりませれば、主家の大事、斯く考へます故一時も早く、大館を討て主家の難を未前に防ぎたく存じをります。然うして、非人乞食の姿になりましたは、人目を除る爲と、且は、度々追はれて貯へも失し、面目次第も御座りませぬ」

御聞きになつた老公は、涙をぬぐう軍次郎の顔をぢい一つと御覽になり。

「其方は忠孝二道の武士ぢや、苦勞を致すのう。察しつかはす。母や兄弟は無いのかな」

「ハッ、有難き御言葉、御禮を申上げます。母は、四國の高松に、近親の家がございます故、確り預かりくれました。兄弟は有りませぬ只一人にござります」

「さようか、……介さん、覺さん。氣の毒な話しぢやのう。長吉、お前も泣いて居るな」

兩人は御答へをして、軍次郎の側に寄り、しきりに慰めて居る。長吉はボロ／＼、

「ヘイ、涙が出ます。此人の心を察しますとねえ、御隠居さん。それから御母さんが心配だらうと考へて、可哀さうな人です。何とかして上げて下さい御隠居さん」

「ウム、考へて置く……」

「考へておくどころぢやア有りませんよ。斯う云ふことを御救げ遊ばすことも、御仕事でせう」

「コレ／＼、また始めたのう。まア宜い、任せて置なさい」

「しめたつ、任せて置けと仰言りやア此方の者だ、俺も助太刀だ」

「また逆上てをるな、併しそれも宜からう……」

介さん覺さんに申付け、大阪へ同行することになりましたから、軍次郎の喜びは一方ならず、嬉し涙にくれて居ります。長吉は我事のやうに喜んで、

「軍次郎さん、宜かつたねえ。何だか夢のやうだ。斯う來なくつちやア、水戸の隠居ぢあアねえ」

「何をいふ、アハ、ハハ、ハハ、長吉は最前怒つたのう。早速仲直りが出來て宜かつた」

「エツヘ、ハハ、江戸ツ子でさア、へ、へ、へ、」

「また江戸ツ子を振り廻すのう。……介さん覺さんそろく出掛けますかな」

「ハイ、参りませう、軍次郎さんも仕度が宜ければ、サア御供を」

この間に軍次郎は手早く仕度をしました。川水で顔や頭や、手足を洗ひ、汚い衣類は皆捨て、襪紙包みの中に用意の衣類と着替、見違へるやうに成りました。大小一ト腰は揃つてをりませんが小刀だけは風呂敷に包んで有つたのを、菰の中から取出して小脇に抱へ、御供の中に加はりました。

「ヤア、立派になつた。乞食の姿は何處へやら、イザ鎌倉と云ふ場合には、流石はお侍だ心掛が違ふ感心だなア」

「赤面の至りでござる」

こゝで、一行五人となられ、夜があけて程なく大阪へ御歸りになり。軍次郎を江戸蕎麥に近い宿屋に落付かせ、清助方へ御戻りになりました。

「いま歸りましたよ」

「御歸りなさいませ、御足勞でせう」

「御歸り。如何でした。宜い景色でせう」

「御歸り。住吉様へ御参りをなされました」

「ハイ、御参拜をしまして、住吉と堺を見物して來ました、隠居さんも喜ばれました」

「それは結構でしたこと、覺さんも始めてですの」

「さうです。夫れからお土産を少し買つて來ました。皆さんで分て下さい」

「まア、濟みませんこと、皆んな御禮を」

内儀のおやすが先立で、皆集まつて話しかける。堺名物の金物屋で買ってきた、鉄等を喜んでを云ふて居ります中に、主人の清助は奥の間に居るやうだが、出て來ません其内儀が奥へ行つたかと思ふと直ぐ出て來て、

「あの、長吉さんにお話しがあるさうで、濟みませんが何うぞ」

「宜しつ、心得た……」

奥の間に入ると清助は、煙管を下へ置き

「サア此方へ來な、草臥たらう……」

「なあアに、是つばかり歩行たつて、時に話があるさうだね、何たえ」

清助はギョロリツと目を光らせ、

「長吉さん。交際た日は短かいが、お互ひに氣が合つて兄弟みたいにして居るのに、隠さねえでも宜いだらう……」

「へエー、改まつて何うしたんだ、何を隠したのだね」

「然うか、江戸蕎麥の目は、伊達に付いて居るんちあア無いぜ、物を見る爲だよ」

「フウーン、判らねえ、奥齒に物の狭まつて居るやうな物のいひ方だなア、手つ取早く聞きたいねえ」

「然うかな、夫れちやア云ふが、常陸の天神林の百姓衆だと、それが氣に入らねえんだ。本當の事を聞かして貰ひたいのだ」

「……………」

「黙つて居ないで、返事をして呉んな」

「困るなア、常陸の天神林の光右衛門隠居に相違ないがなア、それに作男の介さん……」

「オット、不可ねえ。一昨日、帳場を頼んだ時に、店へ來た旦那は、天満興力の中でも利げ物の田中源内と云ふ御方だ」

「ウン、夫れが何うしたのだね」

「まア聞きなよ。御隠居の顔を見てぶるくと震へたやうだ。それから急に歸つたが、歸りがけに、御隠居のことを聞いてゆきなすつた。と昨日の朝、皆さんが出掛た後へまた來なさいまして御隠居さまの御家來さんに御目にかゝりたい。取次を頼むとね、介さんか覺さんだらう。お前は御家來と云ふ柄ぢア無い」

「オヤ〜……………」

「御留守だと云つたら、また出直して來ると歸りなすつた。すると一刻ばかり過てまた來られ、此度は御隠居さまの事で聞きたいことがある。西の町奉行所へ一所に來て呉れと、今月は西が月番だから、仕方がない出掛たよ御奉行所へ……………」

「一寸待つて呉れ、然うなると俺ちやア判らねえ。介さんか覺さんに聞いて呉んな、今代るから」と、立つて横の別間に入り。

「介さんか覺さん。代つて下さいよ。清助の奴、いろ〜聞くのでねえ」
今の話しをすると、老公はお笑ひになり。介さんが立つて、

「然うか、聞いて来やう。ウフ、」

主人に會ふと、大真面目で、話を續けた。

「實は、御隠居を、大きな金貨、御金御用達とでも云ふのか、それとも、大旗本の御隠居が御忍歩の旅かなア、とも思ひましてねえ。田中さんに途中で聞きました、云はないんですよ。まア考へながら従いて、西御奉行所へ行つたのでした。御調所ぢやアない。御休息所とか云ふ間に通されました。其處へ御奉行の加藤大和様が出て来ました。下役衆を遠ざけて、田中さんと私ともう御一人四人きりでした。御奉行の仰言るには、お前は何うして御隠居を御世話して居るのか、何う云ふ御知り合かと、私は田中さんに答へた通りに申述べたのです。すると御奉行さまは感心して、宜く他人の世話をするさうだ。其心持を何時迄も續けて呉、追而褒美の沙汰に及ぶ、御隠居を大切に御世話申上げるやうにと仰言つたのです」

「ウム、成程」

「それから伺がつたのです。あの御隠居はどういふ御身分でせうと、と御奉行さんは、いづれ後日申聞けるから御無禮の無いやうに、充分注意をして、御食物等は御毒にならぬやうな品を選んで差上げるやう。他に御轉居あそばす場合は直ぐ知らせて參れ、と御叮嚀でした。それから昨晩また田中さんが、御同役を一人連れてそつと来ましたよ。御隠居さまは御歸り遊ばされたかと、然

うして時々宅の廻りを御役人が、氣の付かないやうな形をして、内々見張つて居るやうな氣がするんです。……介さん、隠さないで聞かして下さい。御隠居は誰人さまなのです。それからお兩人は、あの長吉さんは」

「さうかい。御主人に飛んだ心配をかけましたね、それでは隠居さんと話してから、また申しませう。何うか心配なく……」

「イエ、心配どころじやありません。今迄多くさん泊めました、御奉行さんに御目通りをして、褒られたのは始めてです。これも御隠居さんを泊ためたためです。有難いと思つて居ますが、天神林の光右衛門さんで無く、御本名が聞きたくなりましたね、何うか今迄の失禮は御詫言をして下さいよ。隠されるのが嫌ひで」

「イヤ、然う改まつては困ります。失禮どころでは無い、結構な御待遇を受けて居る。常陸の百姓が……」

「また始まつた。もう駄目ですよ。本體を現はしなさい。エ、」

「本體を現はせば宜いな、アハ、」

「では休息をしますから」

と介さんは座を立ち、居間に來ると、老公は微笑ながら、

「現はれましたかな、大分話しが永いやうぢやで」

「ハイ、御察しの通りに……」

と、今の話しを申上げますと、合點をなされ、

「さうかな、……乃公も此分ではもう大丈夫、足痛も全快ぢや、充分歩行るから一兩日内に出立
としようの、御墓参をいたして、夫れから軍次郎も同行して参らう」

「ハイ、御宜ろしう存じます。彼もさぞ喜びませう」

「御隠居さん。御役人がチヨイ／＼来るやうに成つちやア、私は氣が痛みますね、でも御供の有
難さに、安心はして居ますが、それに御身分が露見しちやア面白くござんせんね、御出立は結構
ですわえ」

「ウム、早速立つことに仕様……」

其日は御休息のため、終日外出をなさらぬこととなり。其間に覺さんが、軍次郎の宿を訪ね、
御供が出来ると告げましたらその喜びは非常であつた。然うして衣類等を買求めるやうと、金を
與へて仕度をさせた。さて長吉は、店の急がしくなつて來たのを見て、

「そろ／＼混で來たね、手傳ふよ」

「有難う。でも疲れて居るでせう。お寝なさいよ」

「ウ、ン、先刻とろつと遣つたら、もう平氣だ若い者はねえ。店でも出前でも引受るよ。遠慮は
拔だぜ」

「然うですか、濟みませんねえ。御隠居さんは、介さんも御寝みですか」

「ウン、寝ておいでだ。覺さんは出掛なすつたやうだ。……オツと引受けた。どし／＼出しねえ
馴ると面白いや」

長吉は、清助と顔を付き合せても平氣で、今の話しは忘れたやう。店や出前を手傳つて、いつ
もの元氣で働いて居る。次から次と冗談をいつて、御客や宅の者を笑はせながら、江戸前の氣轉
を利かせてはたらくので、朝の内一寸遠慮をしたやうだが、いつか忘れて、長さん／＼と皆んな
が話しかける。清助が外出すると、内儀が座つた。

「お内儀さん。帳場かね、出掛たね……」

「エ、一寸、直ぐ歸りませう。夫れ迄お帳場を、オホ、」

それから、しばらくして清助が歸ると、間もなく田中と、もう一人侍が來ました。夫婦が出迎
へ奥の間に案内、さうして内儀が店へ出。

「長吉さん。御役人さまが御兩人見へて、御隠居さまの御付きの方に、御目にかゝりたい。御取
次を頼むと仰言るの、ですから介さん覺さんにさう云つて下さいな」

「ウン、宜ろしい。直ぐ話すよ」

丁度、覺さんも歸つて来たところでしたから、これを告げると、介さんが奥の間へ来て、見ると清助は會釋して座を下り、介さんを紹介して出てゆきました。兩士は叮嚀に頭を下げますから、「さう御叮嚀では困ります。私は當家に泊り居ります。常陸の百姓光右衛門隠居の供、介三と申します。何か御用の由……」

「ハイ、拙者は、西町奉行加藤大和守の公用人、高井三彌に御座ります」

「拙者は、天満與力の田中源内と申す者、……就きまして拙者より申述べます。御隠居は水戸の西山公と拜察仕ります……」

「……………」

「かねて、江戸御役人様方より内々御達し是有、水府老公御忍歩にて關西方面御旅行中なれば充分御注意申上げ失禮のなきやうにと、御通知書を心得居ります。拙者江戸表に居りましたる節町々御巡見の御時、兩三度御顔を拜しました。一昨日は餘りの意外に、失禮ながら再三再四御見上申しました……」

「ウム、宜く御判りになりました。御察しの通り水戸家の御隠居で御座る」

「ハツ、ハ、ツ」

兩士は平伏して、御居間の方を見ますゆゑ。

「イヤ、内々の御旅ですから、然う氣づかひをなさらぬやう。頭を御上げください。……未だ私の姓名も申さず、水戸家の藩士佐々介三郎で御座る。イヤこれは固くなりましたな、矢張御隠居の供ですから、介さんで御話し下さい、ハ、ハ、ハ、」

「ハイ、これは何うも、實は加藤大和が、今夜にても御機嫌を伺ひに、御目通り願ひたく、御都合をうかゞひに参上仕りました」

「ハア、……暫く御待ち下さい」

座を立て、元の居間に入ると、兩人を相手に笑ひながら話して居られた。

「介さん。何ですか、話しは……」

「ハイ、……前日見へたと申します田中と云ふ與力と、町奉行加藤大和守殿公用人、高井三彌と申す仁が見へました」

と右の話しを申上げますと、苦笑なされて、

「然うかな、斯ういふ家に居れば判るまいと思ふたが、帳場を断れば宜かつたの。アハ、ハ、ハ、大和が来ると、此家の者が氣兼であらう。乃公が行く、イヤ、ハ、ハ、ハ、隠居のことぢや、その兩人も呼びなさい。會ませう」

『それでは餘りに、……ハイ、では連れて参ります』

介さんが兩士に告ると、餘りの喜びに、顔を見合せ無言でをりました。やがて御居間へ案内され、御顔を見ると平身しました。

『兩人とも、頭をあげなさい。隠居の身ぢやで其様に挨拶されては、却つて困る。友達だと思つての、サア、座をすゝめなさい』

『ハ、ツ、恐入ります。御目通り仰せ付けられまして、有難く御禮申上げます。高井三彌と申します。ハツ』

『誠に、何とも勿體なきことゝ存じます。私共に御目通りを御許し下されまして、田中源内御禮を申上げます』

『イヤ、ますます、叮嚀になりますな、それでは話しが遠い。サア、もつと頭を上げなさい。公用人を御勤めかな、……田中さんは與力であるさうぢやな、蕎麥が好きぢやさうな。見つけられましたよ。アハ、』

『ハツ、これは、何共恐縮仕ります』

光圀公の圓滿温雅の御態度、御言葉に感銘し、また覺さんも穩健なる態度にて、叮嚀なる挨拶等に、兩士は只々感じ入るばかり。流石は水戸の黄門主従、聞きしにまさる御方と、自然に頭が

下りました。

『夫れから、大和さんが見へるとか聞きました、乃公の方から出掛て行きますと、然う云ふて下さい。イヤ、其方が、此方の都合ぢや、何うか内々を續けるのぢやから、皆も心配せぬやうに云ふてお呉れ、出迎へ杯は断りますぞ、参る時は介さんか覺さんが、先に知らせますが』

『夫れにては、餘りに恐入りますが、早速申傳へます。それでは御免を……』

『御苦勞であつた。然うして此家の人達には、氣兼ねせぬやうに、申してな、乃公達から話しますからの』

『ハツ、承知仕りました。……御免』

介さん覺さんに送られて、家外へ出ながら、清助夫婦に小聲で、後から悠くり話すと云ひながら、介さん覺さんに會釋をして歸りました。夫婦は呆氣にとられたやうでしたが、店がまた急がしく成つてきましたから、話しをする間もなく、帳場へ座る。店に出る。兩人は御居間に戻ると、長吉が、

『清助も内儀さんも、立聞きをしやうとして出来ねえので、變な顔をして居ましたよ。私は御次の間の見張役と來ましたので、ところで、夫婦とも聞いて居るでせう。今の兩人から、でも後で御聞かせを願ひますよ、御隠居さん。介さん覺さん、こう現れた上からは、引くに引かれぬ此場

の仕儀、こいつあア一番」

「何をいふのだ、ハ、、、」

「アハ、、、面白い男ですな」

「ウフ、氣轉者で、ウフ、、、」

「オヤ急がしくなつて来たぞ、手傳つて遣らう」

店を覗いて居た長吉が、また働き出しました。顔を見ながら、互に口を利く間もなく次から次とはたりますます。働く氣分の良い事は、何の苦勞も忘れまして、いつも心は晴々として、其日々を楽しく暮してゆけます。……とは江戸蕎麥の看板の一つでした。

日が暮れますと、賣切になるのが毎日同じで、それから店を掃除して、家内中で悠くり夜食につきます。今日も夜食が終つた後、清助夫婦を御呼びになり。老公はニッコリなされて、常の優しい御言葉で、

「清助さんにも、御内儀さんにも、不思議な御縁で、御世話になりました。……私共の事は、もう聞いておらうの」

清助は頭を振り、女房と顔を見合せて、また御顔を見。

「へい、何だか變手古練で、譯が判りません。御役人方も、御大切にしろくだけで、お百姓

で無いことだけは判りましたが、介さんも覺さんも云はないし、長さんに幾等聞いても笑つてばかり居て……」

「さうかね、未だ聞かないのですか……」

「へエ、だん／＼考へましてねえ、遠慮の無いことを云ひますと、御家柄の良い、貧乏旗本の御隠居だらうとね……」

老公は吹出された。覺さんも介さんも、長吉は腹を抱へて笑出した。

「何が可笑いんです。……オイ長的、一所になつて笑ふなよ」

介さんは笑ひを堪へて、靜に寄り。

「さて清助さん。實は水戸の御隠居であられる。常陸國水戸前の城主中納言光圀公、今、御隠居の西山と申される。内々御旅行の途中でいらせられます」

「エ、あの、水戸の黄門様ですか、本當ですか、へエー、何うしたら宜いだらう……」

清助は斯う云つて、平伏したまゝ口も利けません。おやすは、頭を疊につけて泣き出しました。御隠居は、ます／＼御笑ひになり。

「清助さん。何うしたね、今迄通りに交際つてお呉れ、それで宜いのですよ。……お内儀さんもさうお辭儀ばかりして居ないで、何の遠慮もいらぬ。今迄と同じの方を喜びますから、特別の挨拶

「挨拶や待遇は断りますよ」

「ハイ、ハイ、存じませんで、勿體ないことではございました。御無禮を御怒りもなく、今の御言葉、有難う存じます。御有難う存じます……」

それから、男女の奉公人も、皆御目通りを許され、夢のやうに喜びました。夫婦は遠慮をしな

がらも、御話しを續けるやうになりました。
翌日は、西町奉行所に御出掛となり。加藤大和守に御會となる。大和は恐縮して、我邸に御滞在を願ひました。折柄東町奉行病中とあつて、公用人が御目通りを許され、役向きの方々、御老公の御視察なるぞ、と役人衆が斯うであるから、不良の者等は身慄ひして、水戸から黄門様が視に來たぞ、悪事をすれば命が無い。直ぐ見つかるぞと膽を潰し、皆正業にと遣入つて行く、また正しい者は賞せられた。西山公の通つた後は、行く處綺麗になり。良民は朗かになつたと申します。さて、再度を約して一旦大阪を御出立と定まる、其時に長吉を呼び、
「其方を連れ参らうと思つたが、考へて見ると、大阪は繁昌の地にて、斯の通り人の出入が多い父を尋ねるには、もう暫く此地に居るが宜い。歸りにはまた立寄る程に、夫迄諸方を探して見よ

乃公も行く先々で心掛よう」

長吉は涙ぐみ、御顔を見上げて、

「へい、また御目通り致します迄も、御別れが辛うござんす。……ねえ御兩人さん……」

「ウム、尤だ、併御言葉に従ひなさい」

そこで長吉はお金を給はる。事情を聞いて清助が預かる事になりました。其翌日は、清助夫婦も皆も、お別れを惜んで、御送りをせめて一里なりとも、と申しますを御断りになり。役人方の御送りも固く御辭退、一行四人で御出立、堤軍次郎は兩人と同じようなる身形を調べ、御供の中に加はりました。さてこれより、大楠公の御墓参をなされ、楠公御建碑のお話してございます。
大阪より湊川の古戦場に、其所此所と御訪ねになると、土手の片邊に、草蓬々たる中に小さきお墓を見出しました。これこそ、我國の大忠臣、楠正成公の御墓でありました。お頭を下げられた儘、感極まりて御落涙、禮拜久しうして頭を上げ、見返れば三士も、伏し拜みては落涙なし言はず語らず主従が、同じ思ひで草をとり。水を汲んで洗ひきよめ、香花をそなへて、御墓所を後に、坂本村の光源寺「楠寺」を訪ね、老僧の話と書類とにより。正成公主従七十三人、湊川に御戦死の古事を、御調べになり。程近き旅人宿、坂本屋へお泊りになりました。翌朝主人を呼

「坂本屋さん。石工さんで正直な人は居ませんかな、頼みたいのですが……」
 「ハイ、居りますよ。此家の側で、一丁行くと、石屋金太郎といふ看板が出て居ります。直ぐ判りますがお客さん、氣を付けて口をお利きなさい。石金は少し變り者ですから、氣に入らないと断られますよ。其おつもりで」

三人御供で来られると、石工の表札が見へたので覺さんが先へ、御免下さいと、廣い土間に這入ると。

「誰だね、見馴ない人達だな、まアお掛け、俺は石金だが、何ですか」

四十五六の色白で、愛嬌のある男、變り者とは見へない様子。

「ハイ今日は、私共は常陸の百姓ですが、坂本屋さんへ泊つて居る、光右衛門といふ者です。主人さんから聞いて来ました。石金さんは上手ださうですな」

「へエ、上手ですよ」

「成程變つて居る。其上手な腕で、石碑を一基拵へて下さいな」

「ウン、それは家業だから拵へますが、注文の仕方が、私に不向だと断りますよ。氣に向いたら念を入れて作りますぜ、この上手の腕で、何う云ふ方の石碑ですか、大きさは」

「ウム、湊川に御戦死あそばされた、楠正成公の御石碑を建てますのです」

「エ、楠公様の御墓を、お前さんが……」

「さうです。草深い中に、大忠臣のお墓が埋もれて居るのは残念です。どうか立派にお建ていたしたいのです」

「さうですか、……感心な人だなア、まア此方へ上んなさい。オイ皆さんも上んなせえよ」
 其所へ女房が茶をもつて出ました。

「實はお客さん。お墓のことで不思議に思つたのは、もう久しい前の話したが、九州久留米の學者の先生だとか云ふ人が来て、楠様のお墓を建てると注文なされたから、私は支度に掛つて良い石も揃へ、仕事にかゝると其先生が青い顔をして来ましたよ。折角頼んだが一時止めて貰ひたいと、尤仕度のお金は下さいましたが、何う云ふ都合で止めたのか未だに判らないんです。それから今のお墓は、知らぬ間に建てられたのです、青石で誰も始めは氣が付かなかつた。何でも青山下野守様と後で聞きました、御奇篤なことだ、……偉い方だと思つて居ます」

「オ、左様か……」

御隠居は頭を下げて、敬意を表された。

「リア、もう六七年にもなりますか、夫迄は缺けた古石が地面に埋つて、松の根方に少し見えたぐらゐで、あれが楠公さまの御墓ぢアあるまいかと、土地の者は思つて居ました。兎に角、今で